338-6
1200501394787
338
6
M

338-6

338-6

世界お伽夜話

原名「アラビアン・ナイト」

文學士　中村綠水譯

禍つみの神

▲魔物

いまはむかしトばかりで年代も判然せぬ――左樣五千年も前と思へばよい、處も町の名も、確とは分らぬト云ふと頗る空漠な話しだが、事實は有つたことゝ思つて合點

44. 1. 12
内交

すればよいしかし今日の様な文明な、電氣もあれば水道もあるト云つた様な世の中からは少し放れて考へて見て貰ひたい、彼方此方に、白壁造りの家か四五軒並んで、ごく地道に商賣をして居た呉服屋があつた、名前は福井屋の幸兵衛と云ふ、この幸兵衛は、何しろ、三代續きの富豪で――いや三代と云ふは、兎角賣家の札を斜かいにかけるものだが、この幸兵衛は、徳川さんの三代目と同じで、地盤いよ〳〵堅くなり、商賣ます〳〵繁昌するやうに出來上つて居た、店の仕事ばかりではト思つて毎年夏と冬とに、一寸行商に出掛ける、ト云つても、其の當時のことだから汽車もない汽船もない、たゞ、長い途をテク〳〵と根氣よく歩いて行くのである。

丁度其の年も、商品を小僧に持たせて、只二人で田舍廻りに出掛けた、まだ、家を出てから三日目、十四五里も來た頃に、いつも通る大きな沙漠に出た――水もない草もない大きな砂原で、所々に椰樹の木が、こんもりして居る計り、――其の日はばかに暑いので、幸兵衛も小僧も喘ぎ〳〵歩いて居たが、休み場所によい大きな木蔭の

下に來たので、まづ一服と腰を下ろして、チョロ〳〵と流れて居る、泉で口を嗽いで、持つて來た棘をぽつり〳〵ト食べ出した、食べてしまつたからどれもう一息歩かうかと、腰を上げて見ると、驚いた。

今が今迄、あたりは廣々した砂原であつたのが俄かに草も木も見へなくなつて、まつ黑闇！こりや大變だ、夕立の雲が下りたかと眼をキョロ〳〵して居ると其の黑暗の中から得体の知れぬ、イヤ幸兵衛にはむかし、物の本で見た妖怪の繪の、實物がてゝに抽け出て來たやうな大怪物！兩眼は鏡の樣で、紅い舌と共に焔をブウ〳〵吹き出して右の手（手だか足だか一寸判斷に苦しむ樣なもの）には、襟首にヒヤリとしさうな冷めたい刄物をぶらさげて居る、全体の大きさは丁度仁王樣の樣だ幸兵衛は一目見て震へてしまつた、この怪物は大きな、ドス聲で、幸兵衛の方をハツタと睨み乍ら、『こら！貴樣はよくも己れの子を殺したな、さあ仇を取りに來たのだ、貴樣の素首を此處に出して仕舞へ』と云ひ乍ら、ゴウ〳〵云ふ物凄い息を幸兵衛の

面上に吹きつける。

幸兵衛は、此の姿を一目見た計りで驚いてしまつたのに、其上、仇だから命を出せと云ふ、何が何だか判らない、、、コリヤ晝寢の夢かしらんトも思つて見るが、いや夢どこの騒ぎぢやない、眼前の此の有樣は、確に實際だ、夢ぢやないト判斷はしたものゝ『子供の仇呼ばり』は、ちと腑におちない、ブル〳〵顏へ乍ら、思ひ切つて一番聞いて見やう！『いやこれは！』ト云つたが後か出ない、實際お初にお目にかゝつた人？獸！だもの、まさかに化物扱ひも出來ない、ドコかの世界に行つたら、こんな、恐ろしい人が、お互樣のやうに、樂しく笑ひ合つて暮して居る所があるのかも知れぬ、＝やうやツと後を繼いで『私は只今、其所に休みました計りのもの、あなた樣のお子樣を殺したなどゝは、そりや！お人違ひでもムりましやう』ト云ひ終らないうちに怪物は、更に大怒聲を發して『なに！人違ひ？馬鹿なことを云ふな！貴樣は先刻、椰樹の蔭で棘を食つた時其の核をどうした？フム捨てた！其の捨

た、核が己れの子供の眼に入つたから療治したが、癒らぬのだ、トウ〳〵死んでしまつた、つまり、貴樣が殺したのだ、だから、今、己れは貴樣の命を貰つて行く、サー此程云つたら、了解つたらう、ぐづ〳〵せずに此方へ出ろ！いや早く首を渡せと云ふに！』　幸兵衛は、『あつ！』これは、失敗つた成程、先刻、何心なく捨てたあの棘の核が、この怪物の子供の眼に入つたか、これは、困つたことになつた、かね〴〵聞いて居た、沙漠の魔の神樣はこれだないやはや飛んだことになつちまつたト心の中で思ひ乍ら、こんどは度胸をきめて、ずつと怪物の方へ進みよつた。

▲善い思案

初めて見た時には口も開けなかつたが、二三度、顏を見たので少しは口もきけるやうになつた、幸兵衛は、ぴたりと怪物の前に座つて、『いや、終〳〵怪我でムいまして何ともはや！しかし其ふ云ふ譯ならば、手前の命は差上ますが、こゝに折入つて

お願がムひます、ト申すのは實は手前家には老母もあり妻も子供も居ります、いまこゝで、命を落しましては遺言なども出來ませぬから、ドウか、今一度、家内に逢つてから死にたうムいます、イエ何！逃げるなどと、そんな卑怯なことは致しませぬ、どうか十二ヶ月の御猶豫を願ひ舛、神に誓つて、再び此處に參ります』ト云ふと、怪物も初めは、この人間奴！また人間社界で、よく使つて居る、虚言で、おれを詐さうとするのだなと思つたが、また思ひ返へして、いかにも此奴だけは正直さうだ、聞いて呉れやうト思つたが、『よし、では、其時誤るな、キット來いよ、白刃を研いで待つて居るぞ、』と云ひ乍ら、スット一息に消へてしまつた、四方の景色はもとの通りになつた、幸兵衛は夢から覺めたやう、たゞもう茫々然として、暫くつゝ立つた、何しろ、十二ヶ月の後には、この魔物の刃に切られねばならぬ、嗚呼トンデモないことになつた、もう逃げたとて追付かない、觀念して、此の長い壽命をやるとしやうか、それも誠に、忌々しいどうしたら、よからうかなあと考へて

は歩み、歩んでは止りし乍らも兎角して吾が家に歸つて來た。

家の閥をまたぐのも力なく、ぐつたりと肱を組んで考へに沈むと、家中の人は驚いた、何しろ、二三日前に出た人が、今日、子然と歸へて來た、いや歸へて來たばかりならいゝが、其の顏色のわるさ、其の姿の、やつれたこと何か不思議なことがあつたに違ひないト、そろ〳〵心配し出して、やつと、主人から一伍仔細を聞いた時の驚き！なげき！何と云ふ魔の神樣だらうと、たゞ、口惜むばかり、よい考も出ない。

そのうちに月日はずん〳〵進んで、はや今日は、其の怪物の待つて居る木蔭に行くべき日となつた、何とかよい思案はないものかと胸に考へ〳〵、家内のものに別れて、只獨り砂原を、とぼ〳〵辿つて、木蔭の石に腰かけて今や來ると四方を見廻はして居たが、やがて覺悟の眼を閉ぢて居ると、コツ〳〵と靴の音がしだした、『おいでなすつたな』と心の中に思つて、馬鹿に度胸をおちつけて、ハツト音のする方を

見ると、これは意外だ。

▲地獄で佛

いやな魔の神様が來たなと思つて見ると、これは又た、一人の老翁、白髯を長く垂れしづ〳〵と歩んで傍に二匹の牝鹿を伴れて居る、幸兵衛は其身を起して一禮し乍ら『こは何處の御方か、思ひもよらぬ所においでになりましたな、こゝは世界に名たゝる魔所です、こゝで休んで居ると、魔物が來て、命をとりますから早く、他へおいでなさい、早く〳〵』ト云ふ、老翁は不思議な顔し乍ら『なに魔物だつて？ハアッ〳〵、して御前さんは何かそんな怪性のものに遇ひなさつたかい？』

『いや、遇つたどころではありませぬ實はかく〳〵の理由で、今日此所に命をやりに來て居るのです』と云ふと、老翁は首をかたげ乍ら『いや左樣か、しかし御前さん、そう氣を落しなさんな、私が一應命乞をして上げませう』と云ふから、

幸兵衛は、ほつと一息、何分御願申しますと早や嘻し泣きに泣いたが內心は中々不安心である、まあ兎に角、怪物の來るのを待つとしやう。

▲味方が殖えて來た

この牝鹿の老人と幸兵衛とは靜かに怪物今や出づると待ち構へて居るとやがて又一人の老人が何處からともなく二匹の黑犬を曳いて出て來たさうかと思ふと、又一人の老人が、偶然に現れて來て、こゝに三老人！　何れも幸兵衛の不幸に同情して、命乞をしてやらう、ト云つて呉れる、幸兵衛の身に採つては、救の神樣である、地獄で亡人の佛樣に遇つた譯だ、幸兵衛は何となく心强くなつた、サア來い怪物、これで命がとれるならとつて見ろ、と心の中は强くなつた、今か〳〵と待つて居る內に、四邊がゴウ〳〵と大音がして嵐の樣な模樣になつたと思ふ中に、一件の魔物が出て來た、口に焰火を吐き乍ら、幸兵衛を睨みつけて、怒聲を發して大喝した『サ

ア、愈々約束通り貴様の命は貰つた、ドレ、生首を靈前に供へやうか』　と毒々しげに云ひ放つて白刃を振り上げた、其の勢ひは、大地の砂も捲き上がるやうに凄しい！　さすが世間の事に慣れ切つた三老人もこの光景には思はず、慄として身を震はした。

▲妻は牝鹿

この三翁は眼前の光景に恐れて言葉も出ないがやがて牝鹿を伴れた老人は、前に進み出て魔王に向つて恐る〳〵云ふには　『私は此の商人の命乞に罷出たものでありますが、どうか、私の此所で御話しする物語のおもしろかつたなら、此の罪を御許し下さるやう願ひたいものですが』　と云ひ訖つて魔王の顔付如何と案じ乍らに見上げると、魔王は　『よし〳〵聞き届けるかどうか、兎に角話して見よ』　と云ふそこで此の老人はやをら一場の物語を初めて此の商人の罪を免るさせんと計るであ

つた。

『扨てこの牝鹿は自分の妻であると申すと、嘸かし不思議でありませうか、これもすぐせの約束とやらで誠に可愛想なものでありまする、もと、私には子が出來なかつたものですから、一人の女奴隷を妾とし雇つて子供を生ませました、ところが此の妻は生來、嫉妬深くて、私が居ない間にその妾を妖術で牛と生れ變らせて、人里放れた農家にやつて屠らせやうとし、其の子供は小牛として私に之れを切つて神に捧ぐる人身御供にしろと勸めました、私は、どうして自分の子を刀で切つて神に捧げることが出來ませう、如何してよいかと思案の中に、來年の回教の祭日に殺すことゝして夫れ迄は農家に預けておいたところが、或日農夫が一人の子供を伴れて家に訪ねて來て云ふには　『ワシが娘は、汝樣の預つた小牛を妖術で生れ變らせたら人間であつたから、今日は伴れて來ました』　と云ふ、見ると、十三四の可愛らしい子供です、私は一旦は驚きましたが又た心の中に喜ばしくなりますと、前の妻

の仕打が惡くゝつてたまらず、とう〳〵命たけは助けてやりましたが、其の代り、牝鹿に生れ變らせました、今伴れて居るのは其の牝鹿です』と語り終ると魔王はあまり奇怪な話しに魂を奪はれ、前後も知らずに聞惚れて居たが、やがて此の商人の罪の半分だけは許してやらう』と言ひ出した。

▲三人兄弟

第二番目の老人も、奇拔な話しをしてこの怪物の心を動かさうと、胸にたくはへた話しをいろ〳〵に艶付けて物語る。

『今、私が曳いて來た二匹の黑犬は形こそ、獸なれ、これも昔は吾が兄弟でありました、なさけないことには、人間界から墮落してこんな姿をして居るのです、私の父はもと村で、指折の財産家でしたが、沒る時に、遺產として、兄弟三人に、各一〇〇〇圓宛貰ひました、そして各商業を營みましたが、第一の兄は行商に行つて

不運にも失敗したから、私は、一〇〇〇圓を更に貸してやつて商店を出させました第二の兄も亦た商業をしましたが是亦思はしく行かないので、零落して故郷に歸へつて來ました、或日の事、私等三人は相談して何か大儲けの仕事にかゝらうぢやないかさし當つては一つ海を渡つて遠い國に品物を卸して見やうと、金子三千圓を資本にして雜貨を積みこんで愈々舟出しました、そして太洋を走ること丁度一ケ月程も經つた頃、トある港に着きましたから其の地の商店を尋ねて早速、品物の卸しを初めた所が品は良いし、價は安いので、ドン〳〵買込んで呉れましたから、各〻儲けました、中でも、私が一番大儲けしたから、二度の品物卸しをしやうとて一先づ、歸國しやうとしました、何しろ、初めての國ですから、物珍らしい事計り、三人は伴れ立つて港の方に參る途中、で、事件が湧き上りました。

ト云ふのは、フト一人の美人に遇つたことです、この荒れ果てた、荒らくれ男計り見て居た目には美人は、何となく、物珍らしく思はれましたそこで、よく〳〵見る

と、身には襤褸こそ着てゐますが、天の成せる美人か磨かぬ玉のやうです、先方でも、亦た私の方を見て居ましたがズン〳〵進みよつて私の手に突然接吻して、『何方の君か、なつかしの姿や』と云ひ乍らさも慕はしげです、私はたゞもう夢中です、スルトこの美人は耳に口を寄せて客人よ妾れを御身の妻として、美はしの國に伴ひ呉れ給はずやと云ふのです、私は何だか狐につまゝれたやうです、たゞもうハラ〳〵してしまひましたが、他の二人とも相談して、兎に角伴れて行くことにきめましたが、扨て、この縁も由緒もない女が、後になつて私の身替りにもなつてくれる鬼女とは思ひもよりませぬ。

やがて私ども兄弟とこの女と同船して、歸國しましたが、途中で、私の身に大難が起りました、――ト云ふのは、私の兄達二人は私の大儲けして大金を持つて居るを知つて居るものですからドウかして海上で殺して其の金を奪はうと企んだのか、私を突然、甲板から渦巻く大波になげこみました、私は不意を打たれて氣も顛動し、

夢中で水中で、もがいて居ると、例の美人は甲板に表はれて、スラ〳〵と私しを、救ひ擧げてくれました、女の力で、この渦まく波に、私を救ひあげるなどゝは全く、妖魔の力でなくては出來ないことです、鬼女の仕業です、スルト此の女は、私しに着物を着代へさせ、身体を暖め、藥を呑ませなどして、頻りに勤はつてくれます、見ると、こんだは、私の兄達が居ませぬ、不思議なこと哉と思つて、此の女に聞くと、悪い人達だから人間界から追拂つてやりました、御安心なさいト云ひ乍ら、ほゝ笑んで居るのです、私も可愛想とは思ひましたが致方がありません、そのまゝ舟に乘つて、夫れからは無事に上陸して自家に歸りました、其の女はいつのまにか見失つてしまつたのです、不思議なこともあるものかと、思案にくれてゐるトある日のこと、門前に朦朧たる烟の中に其の女の姿が顯れて、私に向つて云ふには

『郷の兄達は悪逆非道のものなれば、人間界を追放して、黒犬と姿を更へさしたり、邂逅ふことともあらば情にて一飯を與へよ』と云ふかと思ふと、消へてしまへましたが

其れから二三日經つと、私の家の廻りを、身すぼらしい痩せた二匹の黑犬が、ウロ〳〵して居るので、扨は來たなと思つて、家に畜養つて居るのです、實は此の犬を伴れて、もう一遍罪を詫び、人間界に歸へして貰ひたいと思つて其の鬼女を搜して歩いて居るのです今日も計らず、其の搜しに行く途中で、此の商人に出逢つたので す』と、本當の事やら、虛事やらを取り交せては、喋舌り出したので、魔王も興に入り乍ら。『ハテ、扨ておもしろい話しを聞くものかな、よし汝の話しにて、商人の罪は許しくれん、トク〳〵此の場を行け』と大喝して、朦々たる烟の中に消へてしまつた、商人はこの三人に厚く禮を述べて、喜び勇んで吾家に一散走り。

一刀四十人

▲遺産の分配

昔し波斯のトある町にカッシムとアリババと呼ぶ、二人の兄弟が住んで居た其の親父が臨終の時に多くもない財産を二人の遺子等に同額に分けてくれたのであつたが其の後、カッシムは持參金を澤山持つた嫁を貰つて前とは打つて變つた富豪となり手廣く商賣をやり初めた、弟のアリババは何處迄も運の惡い男と見へて裸一貫の女と結婚し九尺二間の長屋に住んで山へ薪を切りに行つては之を三匹の驢馬に積んで町へ賣りに行つては其日〳〵の烟を立てゝゐた。

或日のこと、アリババは平常の通り山へ行つて薪を作りいざこれから町へ歸らうとして不圖向ふの方を見ると白烟が朦々と立ち上つて夫が段々に此方へ近づいて來るやうだ、アリババは驚き乍らよく見ると其の中から一隊の馬に跨つた人が現はれて來たドウモ盜賊らしいのでかうなると吃驚したのはアリババだ、マゴ〳〵してゐると命にも拘はると側の大木の上に攀ぢ上つた、しかも都合のいゝ事には此木は靑葉がよく茂つてゐるので、下からは上は見へぬが上からは下の事がよく分る、すばらし

い勢で乘り込んで來た一隊は凡そ四十人許、やがて、此の木の下に來ると、皆が一度に馬を下り手綱を解いて木に結び付け馬の首へは糧秣の入つた袋を掛けてやつて、それから鞍につけてゐる袋を除つて居る、アリババは木の上から此れを見て、この袋には、きツと金銀がうんと入つて居るのだなと思つた。

その中に一隊の頭領とも見へる者が、なんだか、祈禱見た樣な聲を出すと、アリババが隱れて居る木の下の岩の所に來て其の岩の戸を押し開けて、皆んな入つてしまつた、アリババは、たゞもう恐ろしいので、ぢつとして木の上で小さくなつて居た。

待つて居る内に戸が又開いて殿して這入つた、頭領が先づ、岩の外に現はれ一人宛で出て來る部下共を見張つて居たが、やがて戸を再び閉て一隊は出發の用意已に成つて、頭領は先頭に立つて、シヅ〳〵と此處をくり出した。

アリババは木の上から目の届く限り此の一隊を見送つて居たがやがて木から下りて扨て考へた、――ト云ふのは先刻――頭領が祈禱し乍ら、何だか呪文を唱へた其言葉を

知つて居たので、ひよつとしたら、あの呪文を唱へたら此の戸はあきはしまいかと思つた、そこで好奇心から、何でも一つ試めして見たくてたまらず木から下りて其の下に茂つてゐる草をかきわけ乍ら、オープン、セザム！と物眞似に一つやつて見た。

▲洞の中は黃金白銀

スルト戸がサツト開いた、アリババの考へでは、たゞ薄暗い洞だと思つたが、其の口を覗き込んだら、吃驚して腰が拔けた、ト云ふのは他でもない洞の中は黃金白金で一杯だ、食糧もあれば衣類もある、成程これは盜賊の住家だなと思つた、アリババは、洞中を隈なく見渡して、まづ差當り、袋の中にあつた金銀を三匹の驢馬につめるだけ積んで、之れをうま〳〵馬に乘せ其上から薪をかぶせて、岩の戸を閉めて、スタ〳〵歸つて來た。

家に這入つてからは金銀の袋を床の上に上げると黄金白銀山とばかり！妻は驚いて目を括つた、アリババは妻に云ひ付けて、あく迄も秘密を守れ他言するなと云ひ付けたが、妻は、珍らしさに、金貨や銀貨を、いぢくつては勘定し始めた、スルト、アリババは『オイ今は錢勘定する時ぢやないぢやないか、それよりも、こいつを藏つとく場所を拵へなくちやならない』『それもそうね！だけどあなた、一寸どれだけの額になるか、妾勘定がしたいのですもの、妾は秤つて見ますから卿は穴を堀んなさいな！妾は其間に一寸秤を義兄のカッシムの家から借りて來ますは！』と云ひ乍ら、サッサと二三軒先きの義兄の所に秤を借りに行つた。

所が、その義兄の妻は、アリババの所ではドンナ小さなものを計るか一番見たいものだと思つて、秤の側へ牛脂を塗つて貸して呉れた、アリババの妻はそんなことには氣が附かない、一生懸命に計つては積み、積んでは計つたが中々、計算し切れない金額だ、其の間に、アリババは頻りに其の金貨を穴の中に藏し始めた。

やがて、秤を返へしに行つた時に、塗つておいた牛脂に、小さい金の粒が付いてゐたのを氣か附かずに渡して歸つた後で、カッシムの妻は、フト秤を見ると金の粒が、ちら〳〵着いた居るので驚いて、早速、夫のカッシムに向つて『アリババは大金持ですね、金を秤で計る程持つて居ますね！』と不思議な顏貌で尋ねた。

カッシムは突然の事だから、判らなかつたが仔細を聞いて怪しく思ひ乍ら翌日、アリババの所にやつて來て問ふには『御前は貧乏だ〳〵と口癖のやうに云ふが、金銀を秤で計る程、持つて居るぢやないか、一體ドウして儲けた金だい？少しは已れにも貸さないかね』と云つた、アリババは驚いてドウして此の秘密を悟られたか、コイツは困つたことになつた、しかし仕方がないわ、話して了へと仔細を打明けてドウか内密にしてくれろと頼み込んだ、その時、カッシムは傲然として『始めから、そんなこと位だと思つて居たのよ、しかし俺も一度見たいものだ、隠すなら隠すで、俺の方にも了見があるから、』ト薄氣味のわるい脅かし文句を列べるので、ア

リババも口惜し乍らもすつかり喋舌つてしまつた。

スルトカツシムは翌日、夜の明けない内に黄金の入物として大きい行李を十匹の馬に脊負はせ、アリババの敎へた通りの道を辿つてやがて洞の前に來た、萬事敎はつた通りにして、洞の中に入り、見當り次第に財貨を包の中に投げ込んで、さて出やうとしたら、岩の戸が開かない！

カツシムは驚いたの驚かないのツて！今更外に出られず、間誤〳〵すると、洞が頽れて、壓し殺されたら大變だ、ト思ひ乍ら、頻りに氣をもみ出しだ、彼是する内に、洞の外に人の足音が、ザワ〳〵と聞ゑる、云ふ迄もなく泥棒が歸つて來たのだ。盜賊の一隊は、岩の戸に十匹の驢馬が立つて居て、しかも脊中には大きな行李をつけてゐるのを見てイヤ驚いて、早速、頭領の所に知らせに行つた、頭領は馬を飛ばして歸つて來て此の體を見て、岩の前に立ち、オープンセザムと云ふと戸が開いた、中に居たカツシムは命からゞ〳〵逃げ出さうとしたが、さうは行かん、トウ〳〵生虜

にされた。

盜賊共は後來の見せしめに、カツシムの身体を四裂にして二つ宛戸の内側に釣して置かうと評議して早速、四裂にして、戸を閉ざし、何處ともなく、又、行つてしまつた。

家に待つて居たカツシムの妻は夫が夜になつても歸つて來ないので、ソロ〳〵心配し始めた、アリババの所にやつて來て『カツシムがまだ歸りませぬが、途中何か變事でもありはしますまいか』と云ふと、アリババは『なに、晝間は、さまりが惡いから夜になつて遲く歸る積なのだらうよ』と慰めて居る計り、さて翌日になつても歸つて來ないので、アリババも心配し始めて、急いで三匹の驢馬を曳いて洞の所まで來て見たが一向影も形もない、しかも、カツシムの伴れて來た十匹の驢馬の姿も見へないのみならず其の洞の入口には

▲腥い血汐

が流れて居る、アリババはッと計りに吐胸を衝いて驚いた、此れは殺されたな！何でも唯事ではないト早速、呪文を唱へて戸を開けて見るとばッたり足下に落ちて居るのは、カツシムの五體が四裂になつて居るのである！

アリババは之れを見て早速、兄の仇討をしやうと思つた、乃で、一匹の驢馬に死体を積んで上から薪で被ひ、後二匹の驢馬には又々金銀をウント積んで、戸を元の通りに閉め切つて日の暮れがたに、家に歸つて來た。

泣き悲しむ、カツシムの妻を且つ慰め且つ傷はり乍ら厚く葬ることにして扨て自家の奴隷の一番怜悧な、モーヂヤナと云ふのを召んで言葉靜かに云つて聞かせるには

『扨てお前はよく私等兄弟の爲に働く人だ、就ては此の籠の中のはカツシムの死骸だ、コイツは併し病氣で死んだことにして葬むつてくれ頼むぞ』　と云ひ置いて

アリババはすた〳〵自家へ歸つて來た。あくる日は夜の明けるのを待ちかねて、モーヂアナは藥屋へ瀕死の病人に何か効驗があるやうな藥を求めに行つた、すると藥屋では誰れが病氣かと聞くので、實は主人が重病で家内中難儀して居るのです、ト答へた其夕方には、また同じ藥屋に行つて今や病人は息を引取りさうだ、何かよい香料はないものかと尋ねた藥屋では早速、香料をよこしたので、モーヂヤナは急いで吾家へ歸つて來た。

また、アリババは日に何度となく、カツシムの家に往復し、さも悲しさうな顔付をして居るので、町の人々、はてな何か悲しみ事でも出來たのかと思つて居たが、其の日――丁度モーヂヤナが藥屋から香料を買つて來た夕方に死んだことを發表した。

その明くる日、早く、モーヂアナは毎日朝早くから露店を出して居る老人の靴屋の所に行つて金貨を一つ握らし乍ら　『ムスタワさん、早くから御勉強だね、時に甚だすまないが、お前の縫ひ道具を持つて一寸私と一緒に來てはくれまいか、尤も其

の場所に行く時には目隠しゝなければならないよ、』之れを聞いた、ムスタワは一寸小首を傾けながら『お前さん、そんなことするのは私の目の見へないのをいゝ事にして何か悪戯――私の名譽に拘はるやうなことをするのぢやないかい』モーヂヤナはポケットから、亦た一箇の金貨を握らせ乍ら『御太陽さまが見て居らしやらーね、何で、そんなことをするものか』ムスタワも、内々、薄氣味も悪るいし、さりとて、握つた金貨の心持もよいので、むや〳〵の中にモーヂヤに引張られて來たのは、乃ち、カツシムの家だ、そこで、門の入口で、一寸ムスタワに目隠しを食はせて、やがて引張り込んだのは、血腥い、カツシムの死体の傍！こゝで、目隠しを除かれたムスタワは、キヨロ〳〵四邊を見廻し乍ら、何と吩咐かるかと内心びく〳〵ものを居ると、モーヂアナは『さームスタワさん、ズツト此方によんなさい此れからが、お前さんの仕事だ、サー此れを縫つて呉れ給へ』と指すのを見ると、血汐、したゝるカツシムの死骸！

▲死骸の縫ひ合はせ

道が物慣れた、ムスタワも、これには驚いた、破れ靴の縫ひ合はせには慣れて居るが、死骸の縫ひ合はせとは、ちと、閉口した、實際のところ、六十年來、こんな事に出合つたのは初めてゞある、いやどうか是れ限り、御了ひに願ひたいものだ、ト思つて、怖づ〳〵針と糸とで縫ひ合はせた、仕事がすんでから、また元の通りに目隠して家の外まで送り出してやつた。

モーヂヤナは家へ歸ると湯を沸かして死体をよく洗ひ其の間、アリババは死骸に香料をよくふりかけて經帷衣を着せてしまつた、それから、坊さんが來て經を讀む、棺に收める、葬儀萬般の用意整つて、首尾よく世間体を誤摩化して、野邊の送りを濟ませてしまつた。

かくて、カツシムの悲慘な死体も、妻とモーヂヤナとアリババとの骨折とで世間体

はごまかしてしまつた。

▲盗賊の探偵

こんな事をやつて居る間に例の四十人組の盗賊等は森の中の洞へとつて歸へして見ると、洞の中は、落花狼藉！金銀財寶が荒らされてゐる許りぢやない四裂にした死体も見當らぬ、頭領はこれを見て、喫驚し乍ら『吾々は確かに發見されたぞ、さーこうなつちゃ油斷は出來ぬ、キツト徒黨があるに相違ない、此の徒黨を見付けて殺してしまはねばならぬ』と息まく。『ついてはお前等の中で一番大膽なものを撰り出して旅人の風をして町に行き先に吾々が殺した奴の噂を聞き其奴の住所と名前とを探してくるのだ、しかし其人間が得物がなくつて歸つて來たら生命を貰ふから又失敗つたときも同じだぞ』と吩咐けた、すると、其中の一人の筋骨逞ましい奴が進み出て、『御頭！其の役はどうか私にさして下せい、キツト仇をとつて見せます、イヤ其の仲間を探がして見せませう。』これを聞いた頭領は、『うん諾！行つて來い！』と早速、許してやつた。

此の男は翌朝早く旅客の風體に身を繕つて一隊の人々に別れを告げて町の方へブラ〳〵と歩んで來ると、早起の靴直しのムスタワがもう露店を張つて居る。

▲探偵の手係り

これを見た盗探は、さも心易げに、ムスタワの傍に寄つて『早くから御稼になりますね』と話しかけると『何！私は年を經つて眠れないから早くから起きて働くのです、それに目性も、よいかして、馬鹿によく見えるのです、此間も暗い所で四裂になつた死骸を縫ひ合はせ事もあつたものさ』と何氣なく、爺さんはベラ〳〵と喋舌つちまつた。之れを聞いた、盗探は飛びたつ思ひ、占めた！と心の中には思つたが左あらぬ體『なに！死骸を縫ひ合はせたつて？』『如何にも！いや話す

まい〳〵』と爺さんは口を押へた、すると盗探は早速、ポケットから金貨を出して、ムスタワに握らせ乍ら『何も私が秘密を聞きたくはないのですがね！どうでしよう、一つ其の家を教へてはくれませんか？』『そりや、知つてる事なら、隠しもしまいがね、實は途中まで目隠されましたから、よく判らねいだ』『だけども道順位は覺えてゐるでせう、誠に氣の毒だが一つ私と一所に其邊まで來て貰ひたいですがね、これはほんの少し計りですが』と云ひ乍ら金貨を二つ並べた、ムスタワも金貨に目が眩んで、トウ〳〵引張り出されて、兎に角、目隠をされた四辻の所まで來た、ムスタワは盗探に向つて『多分、此の道を行つたと思ひます』との事に二人、伴れ立つて、ムスタワに目隠をさせて歩む一々歩數で勘定して見たら、丁度、止まつたのが、今はアリババの家だが、以前はカッシムの家だ、盗探は、其家に一寸、白墨で印をつけて得意氣になつて、歸つた、必と頭領初め皆から褒められることゝ思つて、心の中に、ムズ〳〵し乍ら急ぎ足で歸つて來た。

▲不思議な目標

ある日のこと、召使モーヂャナは用事を吩咐かつてふと外に出ると、何時の間にか自分の家の白壁に何だか得體の知れない目標が白墨で塗つてあるのを見出した『こりや何だらう』と獨言し乍ら考へるには『誰れも自家の主人に惡戯するものはないが兎に角、薄氣味のわるいことだ』と思つたから、モーヂャナは白墨で、向ふ三軒兩隣にも同じやうな目標を書いて見た。

その間に一方の盗探は、占めた！と計りで急いで、森の中の一味の者に話しをした、ところが、頭領は大層喜んで滿足の意を表して扨て皆に向つて云ふには『諸君！吾等は直ちに武裝して出發しやう、併し人目を避ける爲に一人又は二人宛、あの大公園に集まつて居て呉れ、己れはこの男と一緒に行き、まづ、其の家を確めて見る

から』　夫れからは一人二人宛、そろ〳〵と町へ入込んだ、一番最後に頭領は、この男と一所に來て見ると、成程目標の書いてある家があつたが、――いやあつたではない、向ふ三軒兩隣がみんな同じやうな目標がかいてある、盗探は、此の内、自分の書いたのは一軒だと云ふけれども、このうちでどれがそれだか判然しない、頭領は少しく面喰つて直ちに部下の集合を解散して自分の古巣に歸らせた、かうなると初めの約束通り、その盗探は死刑に處したけれども、一隊の安全を計るには是非とも此の古巣に亂入したものを搜し出して來なければならぬ。

▲第二の盗探

そこでまた一人の男が、例のムスタワを誑かしてこんだは其の家へ赤いチョークで、目標を書いておいた、ところが注意周到な、モーヂヤナは、前と同じ樣に赤チョークで同じやうに目標を書いておいた。そんなことは神ならぬ身の盗探に察しやうがないので、こんどこそは成功だと誇り顔に、之れを頭領に申し上げて、一隊又た前の通りに來て見ると、この有樣で、判斷が着かない仕方がなくて、こんども失敗して、第二の犧牲者を殺してしまつた。

▲油甕の中に人

四十余人の一隊の中から二人迄も殺してしまつたから、頭領も之れは、自分自身探偵するより他はないと氣附いた、そこで或日、又々ムスタワを誑して先に二人の盗探がやつたやうに同じ事をしたが今度は目標をつけないで、目星をつけた家の前を二三度往來して心に忘れまいと觀念した。

かくて頭領は心の中で、『こん度こそは占めたものだ』と、大得意で洞の中に歸つてから皆に向つて十九匹の驢馬と三十八箇の大甕を求めさして其の中一つだけは油を一杯入れておけと命令した。

二三日たつと盗賊どもは驢馬と甕とを買ひ集めて其の中に一人宛入つて隠れた、準備とく出來上つたので、盗賊どもは十九匹の驢馬に之れを率かせて、目指す町に向つて出立した、思つた通りに日暮頃町に着いたのである、そこで、アリババの家の前に來ると丁度バッタリ出逢つたのはアリババだ、頭領は一寸、會釈して　『私どもは遠方のものですが、明日この油を市で賣たいものですが、宿と云つてもありませぬ、ドウカ今夜一晩、お庭先でも拜借が出來ますまいか』　と云ふ、一遍は、アリババも此の頭領の姿を森の洞の木の上から、チラと見たこともあるし、また其の言葉も聞いたこともあるが、何しろ、油屋に化けたとは氣が附かないから夫れはお易い御用だと云つて此の一隊を泊めることにした。

そこで、アリババは一隊の油甕＝盗賊を庭に並べて、頭領を丁寧に接待して自分は入浴に出掛けるから、汁物を拵らへておけとコッソリに吩咐けて出て行つた。

この間に頭領は庭に出て、三十八箇の甕の蓋を除つて、各を呼び出して云ひ渡すに

は、『おれが部屋の窓から石を投げるのを合圖にお前達は出て來てくれ』　と、それから自分の部屋に行つて、ランプを消して、寢床にもぐり込むで居た。

さてまた、モーデャナは主人のアリババから命じられた、汁物を拵らへやうと思つたが、相憎、油がないので、例の庭の油甕の所に來て、油を盗つてやれと思つて、そッと、其の蓋をとると中から泥棒が、『頭領！まだですか』　と小聲で聞いた。

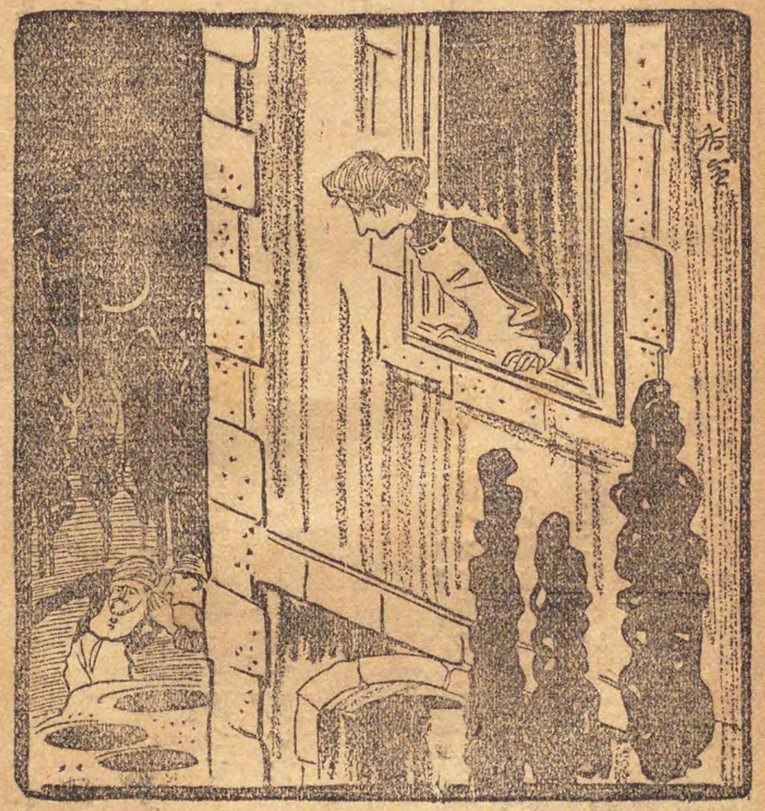
▲油で煮殺ず

油どころか、甕の中から、だしぬけに人の聲！　モーデャナはハッと思つた並大抵の女なら腰をぬかしてしまふのだが、根が怜悧な人だから、フト胸に浮んだ一策の實行にとりかゝつた、そして、此れは適切、例の盗賊の一隊だなと感附いたから一々其の甕の上から、『何まだ〜もう少し辛棒しろ』　と云ひ乍ら、急いで自分は、庭の一箇の油甕の下に火を炊いて、之れをグラ〜煮上て、それから、突然其の沸

油を三十八箇の甕の中に流し込んで、皆な沈默の中に殺してしまつた、そして自分は窓から首を出して、此の先き、ドウなる事かと樣子を見てゐた。

▲卅八箇の死體

モーヂャアは樣子を窺つて居る間に盜賊の頭領は、一家が眠靜まつ



てゐるのを見て小さい石を投げては合圖をしたが、誰れも出て來ない、ハテナと小首を傾け乍ら、そろ〳〵庭に下りて來た、そして、甕の側に寄り添つて『何か用意でもして居るのか』と覗き込むと沸油の香と死人の臭とかブンと一時に鼻を衝いた。

アッと一聲出した切り、扨ては悟られたかと、慌て横飛びになつて裏木戸から逃げ出してしまつた。

先刻から此の態を凝視めて居た、モーヂャナは頭領の逃げて行く後ろ姿を見送つて、ホッと一息吐いて安堵した、翌日になつて、この一伍仔什を、モーヂャナがアリバに話すと、アリバは、たゞ驚く計り何の言葉もない、やがて、三十八箇の死骸は、それ〳〵溝に埋めて十九匹の驢馬は市場に賣り拂つた。

▲今度は羅紗屋

扨て例の頭領は、いつも〳〵計畫が失敗するので殘念でたまらず、何とかしてアリババを殺してやりたいと思つて、今度は、多年盜み取た織物を洞中から運び出してカッシムの家＝今はアリババの息子が住んで居る家の前にさゝやかな店を出した。賊盜の頭領は名を、ホウセーンと改めて近所へは披露に及んだ、特に向ふ側のアリババの息子とは親密になるやうにと務めた二三日内にアリババは息子に逢ひに來たが、此の主人＝昔の盜賊の頭領は目指す仇は此者であるなと心の中に思ひながら、さあらぬ體で挨拶して、それからは、益〳〵親切づくめで此の息子と交際した。

▲もてなし

或日、互の懇親を堅めやうと、息子は父のアリババの家で此のホウセーンを招待することになつた、父は喜び勇んで此の御客を待遇しやうと、御馳走を出さうとすると、此のお客は鹽氣の這入つたものは厭だから、他の者で味をつけて出して貰ひたいと注文する、臺所で、これを聞いた、モーヂャアナは妙なお客もあるものだ、と思つて、一寸其のお客の姿を見ると、まがふ方ない先夜の盜賊！モーヂャナは扨は奴さん復仇に來たな、よし、また虐めてやらうと決心して自分は、懷に小刀を呑んで、美しく着飾つて、やがて其の客人の前に出て、『下手ながら、舞の一手を御覽下され』と云ふ。

▲たゞ一刀に

頭領も美い酒やいろ〳〵な御馳走に酔ひくづれ　今はアリババを覗ふ勇氣もない、モーヂャナは巧みな舞を演じながら、たび〳〵機會を覗つて、劍を右手に持ち小數を左手にして、やがて、一番の舞の終つた時に靜かに客人の前に進んで、戯れに喜捨を願ひ出た。

巧まれたとは知らぬ盜賊の頭領は酔眼朦朧として懐中を探らうとする其の隙を見て、

電光石火、モーヂャナの懷中からは閃めく白刃が飛んで、お客の心臟をたゞ一と抉り、苦悶する間もなく、頭領は、そこへばッたり！

此の光景に驚いたのは、アリババ親子だ、息子は『お前どうして、そんなことをする！』と一喝したが、モーヂャナほ沈着に『旦那さんの仇を討つたのです、此の男はあの四十人組の頭です、これよく此の顏を御覽なさい、』と云ひ乍ら、頭領の死骸の顏を擡げて見せる。

アリババ父子は、ひゞく、モーヂャナの勇氣と知慧とに感心して早速、其の日から召使でなく、此の家の養女として息子と夫婦にさせた、生命の親に報ゆる當然の處置であらう。

その年の暮に、フト例の洞の事を思ひ出して、そこへ出掛けて見た、洞の入口の所に立つて、オープン、セザムと云ふと自然と戸が開いた、穴の中に入つて見ると、盜賊の頭領が荷物を運んだ以來、何人も住んだ痕跡はない、して見るとこの寶の藏を開けるのは天下にアリババ一人であるかと早速金銀を鞍に積むで自分の家に持つて來て息子にも其の戸の開け方を敎へて代々富み榮へたと云ふ話しである。

水夫の話

▲御馳走

ハラウン、アルラスバットの御代にバグダットと謂ふ所にヒンドバッドと謂ふ貧乏な荷運人が住んで居た非常に暑い或日の事此荷運人は町の外れから村の外れまで重ひ荷を運ぶ役を云ひ付かつたが途中であまり草臥れたから大きい別莊の側へ荷を下し其上に坐つて休んで居た、其休んで居つた處は伽羅木の香と別莊から洩れ來る香料とバラの匂とで四邊の空氣はえならぬ香を帶び加ふるに別莊からは樂器の合奏に交つて鶯を始め色々の鳥の囀る聲が聞えるから荷運人はあゝいゝ所で休んだものだ

と喜んで居つた其妙なる音樂や旨味さうな料理の匂ひで荷運人は別莊では何か慶事があつて宴會を催して居るものと考へたが角兎こんな事は荷運人と緣の薄い方であるから誰の別莊だか薩張分らないそこで彼は門の所に美しい衣服を着て立つて居る召使共の所へ來て誰の別莊かと尋ねたのであるすると其中の一人が『御前はバグダットに住んで居ながら世界を一週した有名なる航海者シンドバットの家を知らないのか』と答へたのであるすると荷運人は天を仰いで『神よシントバットと私の身の上との相違を御覽下さい私は毎日疲勞と困苦とに責めたてられそれにやつと粗末な大麥のパンを買つて家族を養つて行くのに幸福なるシンドバットは毎日々々こんな榮華をして居りますシンドバットは何の幸福あつて神からこんな運命を授けられ私は何の罪科があつてこんな、、、ミジメな生活をして居るのでせう』と大聲たて、嘆息を洩らした、荷運人がこんな事をして居る間に一人の召使が出て來て主人が何か話したいことがあるそうだから此方へと、謂つて大廣間に彼を導ひた此廣間に

は數多の客が食卓を圍んで坐つた卓の上には山海の珍味處狹きまで並て在る上座に控へて居るのは長い白髯を生やした尊げな紳士で其後ろには一家の役人と家内のものが居並んで居る此紳士こそはシンドバット其人である大勢の客の前に來て生れて初めての御馳走を前に控へて恐怖の念漸く增したヒンドダットは震え乍ら客に挨拶をしたするとシンドバットは近く荷運人を招んで其右方に坐らせ輕く挨拶して甘味い葡萄酒を注いで呉れた、こんな葡萄酒は例の棚の上に澤山と並んで居るのだ。これはシンドバットが窓越しに荷運人の愚痴を聞くために宅へ引き連れさして來たのである食事が濟むとシンドバットは荷運人に話かけて其名と職業を尋ね更に『俺はお前がさつき道筋で謂つた事を今一度お前の口から聞きたいのだが』と謂ふ注文であるからヒンドバットは夢追ふ如く心亂れ頭を垂れて答ふるには『旦那樣に申上げますが先程謂つた事はあまり疲れましたからツイ愚痴が出たのですどうも失禮なことを申しましたどうか御許し下さい』『そんなに俺を沒義漢と思ふなよ俺は

あんな不平を聞いて怒る樣な者でないぞ併しお前は俺が働らかずに今の樣に安樂にして居つて此富を得たと思つてゐる樣だが俺だつて此幸福なる今の境遇になるまで殆ど何人も想像する事の出來ない位の苦痛を肉体と精神とに何年とも知れず受けて來たのだ、就ては諸君と』　一座の人々に向ひ　『私の今まで受けた苦みと謂ふのはツマリ自然界の大富源を我物にせんと云ふ性質から起つた事と思ふから諸君の御許しを以て私が今まで遭遇した危險の事を御話しよう屹度諸君も面白いと思はれるでしよう』　と云つて、やをら語り出すのである。

シンドバツトの第一回航海

▲難船

私の父と謂ふのはいゝ加減の地位名譽もあつた金持ちの商人であつて私に澤山の財産を遺して置いて呉れたが私は放蕩な生活をしたゝめ悉く夫を消費してしまつたのだ併し私はすぐ其非を悟り且最も大事な時間を空費したと謂ふ事を初めて後悔し又父が屢々言ひ聞かした偉人ソロモンの言つた　『よき名聲は高價なる良藥より勝れり』　と謂ふのを思ひ出し此、飜然と反省する所あり今後は父の商賣に身を投せんと決心しこゝの商人と組合つて船を艤裝し共々之に乘つて航海を始めたのである船は帆を擧げて波斯灣をよぎつて西印度地方に針路を取つたが始めの間は航醉がして苦しかつたが間もなく恢復し夫からは決して航醉はしなくなつた此航海には船は諸所の嶋に寄港して貨物の交易を行ふたが或日の事風が全くなぎてしまつて一波も起らず、とある小島の近所で漂つて居たすると船長は帆を捲き收めよと謂ふ命令を下し上陸したいものは小島に上つて差支かないと謂ふ許可が出た私も其上陸隊の一人であつたのだ吾々は上陸して盛に飲み食ひをなし連日海上に於ける疲勞を醫して居ると急に島が地震の樣に震ひ出したから吾々は全く蒼くなつてしまつたのだ船中でも島の震ふのがよく分つたと見へて頻りに早く歸航せよと促して來る全く船へ歸ら

ないと生命が危いのだ今迄私々が島と見て居たのは實は海中に接める怪物の脊中であつたのであるすると敏捷な奴は直に小舟に乘り移り或者は水の中へ飛び込んで泳いで居る奴もあつたが私は島即ち怪物の脊中が海の中に沈んでしまうまでチツとして居つたのだ幸ひ火を起さうと思つて船から持つて來た木に附着いて波間に漂ふて居たそうして居る間に船長は小舟に水中に泳いで居る船員を收容し丁度起つて來る風を利用して帆を捲き上げズンズン航海を始めたのである、此に於て私は全く波に翻弄せられ其日と次の夜まで海中に漂ふて居つたのだもの此時には精力は全く竭き生命はなきものと觀念して居つたが幸ひなるかな波の御蔭でとある島の磯へ打ち上げられたのだ所が磯の岸は高くして凸凹甚しくために漸く手の届く所にあつた木の根を捕へて岸へ上る事が出來たのである夜が明け離れるのを待つて私は其邊を徊ひ廻て何か牧草でもないかと探すと幸にも少しばかり見付出したから之れを食ひ清い泉を發見して水も飲む事が出來たのだかうなると元氣稍回復したからズン〳〵島

の内部に進入して行くと平原に來て數多の馬が其處で食つで居るのを見た夫に人聲も聞える樣子だから其方をさして行くと人影が現れて來て向から御前は誰だと聞くのだそこで私はありし次第を物語ると彼は私の仲間の數人が團欒して居た洞穴の中へ連れて來た此時私も吃驚したが向ふの人達もより以上に驚いて居つた私は彼等の出して呉れた食物を食つてから『貴君達はこんな荒れ果てた所で何をして居られるのか』と聞くと彼等は此島の王なるマハラジャの臣下なる侍童であると云ふ事で毎年々々王の馬を此處へ連れて來ては牧草を食はすのだと謂ふ事まで知れて來たのである尙彼等は明朝家へ歸るのだと謂ふのであつた翌朝になつて彼等は私を引き連れて王都に歸つて來てマハラジャの所へ自分を連れて來たすると王は自分を誰れであるかと聞くから私は王の領土へ來たまでの話しをしたのだ王は之を聞いて大に喜び且つ私の不幸に同情を寄せて呉れ何事にも不自由のない樣にとの厚い恩命に接した。

私は元來商人であるから王の前を引きさがつてから二三の商人を訪問して商買上の事を話し特に此等の人々にバクダットの噂や其處へ歸る機會がなからうかと詳しく聞いたのであつた此王都は海岸に位置して良好な港灣があるから各地至る所から毎日船が入港して來るだから私は物の別りさうな印度人を訪ねて之と話をし又時間を定めて王の御機嫌を伺ひ其部下なる知事や地方官と四方山の話をしたのである王の領分の中にカセルと謂ふ一の島があつて晩になると大鼓の音が聞えると謂ふ噂で水夫共は之をデジアルの住居せる所と信じて居るのだそこで私は一度此奇怪なる島を見に行かうと決心し其方へ行くと途すがら百乃至二百ギユヒツトの長があらうと思はれる位の魚類を見た之を見た時には怖ろしさに何もかも忘れてしまつた併し害をしない事は此魚が棒切れや板類をガサ〳〵たゝくとすぐ逃げる位臆病ものであるから分るのだ此奇怪の島から歸つて來て或日港に立つて居ると一隻の船が入港して來た此船は私をバルソラまで乗せて行つたものだ私はすぐ一目見て其船長を知つたから私は船へ行つて私の荷物はどうしたかと聞き且つ私の名前が書いてある荷物は私のでしやうな』と話しかけた之れを聞いた船長は

『神よ私は目のあたりシントバットの死せる光景を見ました而かも貴君はシントバットだと謂ふ自分のものでないものを取らうと思つて虚言を謂つても駄目です』

と謂ふから『まあ御待ちなさい私の謂ふ事を聞いて下さい』と謂つて居る時に私をよく見知つて居る人が出て來てまだ生き長らへて居る私を見て大に喜んで呉れたから船長も遂に其偽ならざる事を知り且つ漸く自分を思ひ出したらしく私に抱き付いて『天に謝す！君は虎口を免れて今此處で遇ふとはこんな嬉しい事はない其處にあるのは君の荷物だから勝手に處分なさい』そこで私は荷物の中から最も珍らしさうなものを取り出し王に進呈すると王はこんな珍奇なものをどうして得たかと聞くから私は此の發見の始末を話した王は大に私の幸運なのを祝つて呉れ其品々を受領されて歸る時に王は私に非常な珍奇なものを呉れたのであつたそこで私は

王に別れを告げ今の船中に來り伽羅木、草履、樟腦、肉豆腐、丁香、胡椒、ジンジヤ等を積載し諸島を經てバルソラに歸還し其處から十萬セクキンの物を以て此バグダツトに戻つて來たのであるシンドバツトは話を之れで止めて再び音樂の合奏を命じ夕暮れ近くなつた時百セクインの這入つた金入を取り來らしめて之を荷運人に與へ且曰く『ヒンドバツトよ之をお前にやらうから家へ歸つて明日また俺の冒險談を聞きにやつて來い』と、荷運人は此丁重なる取扱と贈物に唯驚いて家に歸つて來た翌日ヒントバツトは自分の一番よい衣物を着て此惠み深き旅客の所に來ると紳士は喜び心から歡待して呉れた其内に客が皆揃つて食事を一緒に濟しそれからシンドバツトは一座の人々に向つて『之れから私の第二次航海の冒險談を話しましやう』と謂つた。

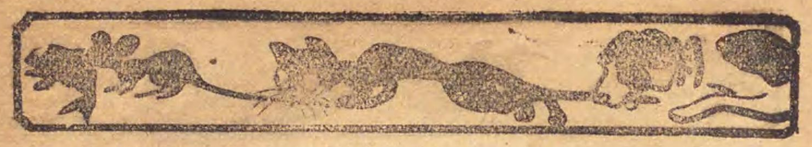
第二回の航海

▲ダイヤで輝く谷底

第一回の航海終つて私はバクダツトで餘命を送らうと思つて居たが暫くして安逸なる生活に飽き再び信用ある二三の商人と第二次の航海を始めたのであるそこで我々は堅固なる船に乘り神に安全なる航海を祈りつゝ出帆した或日の事我々は各種の果樹が繁茂せる島に到着したが陸の上に人も動物も居らない船員の者等は花を摘んで居る奴もあれば果物を取つて居るものもあつたが私は只一人葡萄酒と食料を携へ壹尚暗き二つの森の間を流るゝ小川のほとりに坐つたのである此處で私は食事を甘味く濟して其儘眠つてしまつたどれ位眠つたか知らないが目をさますともう船が出帆してしまつて居る此悲しき境涯に處して私は悲痛のあまり死ぬほど苦悶の叫びを發して頭や胸を打ち身を地に投げて失望のあまり俯伏して居たのであるが遂に私は自分の運命を神に任せんと心を定めどうしていゝか分らなかつたが兎に角私は高き木

の頂邊に攀ち上り何か見えないかしらんと思つて四邊を見廻したのであつた海の方を見ると見えるは空と波の外何物もなく陸上には向ふに何か白いものが見えるだから木から降りて來てまだ殘つて居た食物を携へ其方へと歩み出したが距離甚だ遠く未だ何物とも見當がつかない併し段々近ついて見るとどうも白いのは圓頂の家らしく其高さといひ廣さといひ中々素晴らしいものである私はやつと其處へ來て廻りをグル〳〵回つて入口がないから探して見たがそれらしいものはない加之ならず上へ上らうと思つても圓滑て手掛りすらないのである計つて見ると周圓約五十歩ばかりだ、此の時太陽は既に沈まんとして居たが突然空は黑雲が漲つた樣に眞黑となつた。

今迄晴れて居た空が急に雲脚が早くなつて雨もようになつたりなんかする事は、此頃の天氣で、格別不思議とも思はなかつたが、此時ばかりは何だか異樣な心持がした、實は、次で來るべき自分の運命を何か暗示して居るのではないかと思つた、そ



して此の黑い雲の中から何が飛びだすかとはらはらして居た。

▲怪鳥

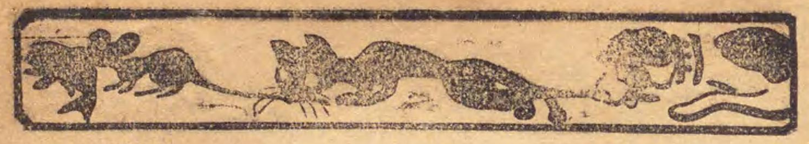
私は此あまりの光景に吃驚して居たが私の方を目がけて飛んで來た計る事の出來ない位の怪鳥を見るに及で其の驚きは益々倍したのである尤も私は水夫共がロックと謂ふ

怪鳥の話をして居るのを聞いた事があるからすぐ其れだらうと推察し且つ今迄私の生命の綱と頼んで居た圓頂の家は怪鳥の卵だと初めて悟つたのであつた暫くすると怪鳥は地上に降つて卵の上に坐つたから私はソット卵に附着いて居ると丁度私の目の前に大木の幹とも思はれる位大きい足があるのだそこで私は頭巾で自分の体をしッかと其足に結ひ付け次の朝になつてロツクに此荒涼たる島から連れ出して貰ふ計畫をしたのだ其中に夜を過して未明となるや怪鳥は飛び始め私を地面から見えない位高い所まで連れて行き今度は殆ど知覺を失ふ位の速力で降下して來た併し地面へ怪鳥が降りると手早く結び目を解き之が終るか終らない中に怪鳥は之も長さ幾間と知れない位の大きい蛇を嘴にくわへて飛びだしたのである私の降つた所は山嶽重疊せる間で雲をつくばかりの高巒四方に聳え其又險峻なる到底此處より出でる事が出來ない位の所であつた併し仕方がないから其邊をブラ〳〵歩くと地には金剛石が敷いてあつて其に驚く程大きいのが混つて居る私は夫を見て大に喜むだが夫も暫の間

で少し離れた所に大蛇の群集して居るのに氣がつき喜びも何も一度に消え失せブル〳〵震え乍らよく見ると其中の最少のものでも象を呑む事が出來る程大きひのだ尤も此等の蛇は日中は穴の中に居つて其強敵たる怪鳥の難を避け夜になつて唯出て來るのである、私は其日を谷間の散歩にて暮し夜になると安全と考へた穴の中へ這入つて隱れて居たのだ併し尙念のため穴の低くて狹ひ入口には大きい石を置いて蛇の攻撃をさけたが光線はいい加減に入射する樣にしたのである夜が明けると蛇は退却したから私は恐さに震えつゝ穴の外に出て金剛石の上を歩いては居るが之を拾いとつてどうかうしやうと云ふ考へはちつともなかつた併し昨夜は一睡もせないから恐し事は恐しいが遂に其處に坐つて食事をしてから其儘眠つでしまつた眠つて間もなく何か私の側に落ちた樣だから不圖目を醒すと之は大きい生肉の一片て續て四方八方の岩から下へ落ちて來る肉塊は數個に及むて居る。

▲鷲の脊中

常々から水夫や他の人々が金剛石の谷について話しをして居るのを單に無稽の説と聞き流して居つて且つ商人共が谷間から金剛石を拾ひ取る方法などに付ても一笑に附して顧みなかつたが今始めて私は自分の過れるを悟つたのである即ち此谷の近邊に住める商人等は鷲の雛の生れた時期を窺つて谷間に大肉塊を投じるのだすると此肉塊は金剛石の上に落ちて肉塊に附着たのだ之と見た鷲は非常なる勢で飛び降り肉塊を拾つて其巣に運んでは雛に食はすのである其時に商人は鷲の巣目かけて亂入し大聲を發して鷲を追ひ肉片につける金剛石を取つて來るのである私は之を見て此方法を利用し自ら死地を免れんと考へ先づ金剛石の大きなのを澤山拾ひ集めて食品を入れて居る革袋の中に入れ肉塊の大きなものを取つて頭巾にて其身を之に結着け金剛石を入れたる袋は帶に固くつけて身を地上に横へて居たのださうすると間もなく



一匹の鷲は私の躰を結び付けたる肉塊を掴むで山の頂上に置ける其巣に運んだすると商人等は直ちに叫聲を發して鷲を驚し鷲の肉塊を捨てゝ其巣より去るを待ち一人の商人は私の居る巣へやつて來たが彼は私を見て非常に驚き暫し茫然たりしが氣がついたと見えて何處から來たとも私に問はないで喧嘩をしかけ何故自分の物を盗むのかと詰り寄つて來たのだ、そこで私は『まあさう怒りなさるな始末が分ります れば喜びになる事ですから靜になさい私は自分と貴君に分ける金剛石を他のあの商人等が持つて居らない程澤山持つて居ます』と語り終る間もなく他の商人等は私の周圍に群集し私を見て目ばかり圓くして居る併し理由を話すと益彼等は驚いたのである商人は私を小屋へ連れて行き其處で私は袋を解くと大きい金剛石を見て彼等は大に吃驚して居るばかりではなくこんなに大きい完全なるものはまだ見た事がないと話をして居るさて私が運ばれて來た巣を占有せる商人（各商人は夫々定まれる巣を占領して居る）に向ひ欲しいだけ金剛石を取つて呉れと謂ふと彼等は大きい

一つと最小のものの二個を取つて其滿足せるを示したから私は何も害をする樣な事はありませんから遠慮せずにもつと澤山御取りなさいと謂つたのである其時商人は

『いえ之で澤山です之だけあればもう航海をして面倒な事をやる必用がありませんの』

と其夜私は商人等ど共に一夜を明しまた商人の中で話を聞かない人々を滿足させんためにもう一度自分に就ての金剛石の谷の話をしたのであつた其後數日間商人は尙肉塊を投じて金剛石を拾集め各自取り得たものを以て大に滿足し其翌日に至り打ち揃つて此處を出發し大きい蛇の居る高山の近傍をも無事通過し初めて到着せる港より船に乘つて直に群島に寄港した此島には一種の油を採取する木が非常に繁茂して大なるものは枝葉欝蒼として其影には優に百人を坐せしむる事が出來る位だ此島で又象よりは小さいが水牛よりは稍大きい動物の犀を見た、此動物は鼻の上に角があつて一キロビット位で質甚だ堅く中央には孔が通じて居る私の見た時には丁度此獸が象と戰つて居た所で犀は其角を象の胃袋へ突き通し頭部に象を背負つて馳け出したのだ供し象の血と脂肪が流れて犀の目に入つたから犀は盲目となつて身を地に伏せた不思議な話だが其處へ丁度怪鳥のロックがやつて來て犀と象の二匹を爪に掴んで飛び去つてしまつたのだ。私は此島で金剛石の一部を以て或商品と交易し更に此島より他島に行き尙大陸地方の諸港に寄泊し遂にバツタに上陸しバグダットへ歸つて來たのであつた此の地へ歸つて來ると私は直ぐに貧困者に金額の贈與をなし持ち歸れる大資產で榮華に暮したが此生活が嫌になつて來たのであるシントバットは第二次航海の物語りを終つて又荷運人に百セクキンを與へ第三次の航海譚を聞かすから明日また來いと招待したのであつた。

第三回の航海

▲人間の蒲燒

私はまた怠惰けて日を送つて居るのが嫌になつて來たから二三の商人と共に長き航

海を始めたのだすると或日の事船は大暴風に遭ひ全く針路を失つてしまつた所が此黒風雨は數日續いて其中にトある島の港の前まで船が來て居つた船長は入港するのを喜ばない樣であつたが仕方がないから碇を投じて其處に碇泊したのである吾々はまづ帆を捲いて居ると船長は此處や近所の島々には毛の多い野蠻人が住むで其丈は甚だ低い併し其數は田に飛ぶ蝗よりも多い若し其中の一人でも殺さうものなら彼等は手を揃へて我々を攻擊し塵殺し終るべしと告げたのだ夫から間もなく船長の告げた事が一から十までは事實であると謂ふ事が分つて來たから皆が恐慌を來した、身の丈け二呎餘全身茶色の毛を茫々と生やした十人程の一隊は私の船の方に泳ぎ來つて包圍してしまつたのである彼等は驚くばかり巧妙に舷を攀ぢ上つて帆を下したり綱を切斷する等の狼藉を働いて船を洵岸に擱坐させて船員の上陸を促して然る後彼等が初めやつて來た方の島へ船を持つて行つてしまつた。

船を取り上げられては仕方がないから吾々は船員と共に島内深く進入すると遙か向

S T 4 2
11.1.29

ふに棟を列らねた建物が見えるから其方へと歩を早めて行つた此建物は建築甚だ美しい魏然たる王宮で門は黒檀で作る二枚の扉を備へて居る此門を開いて中へ這入ると玄關を備へた大きい室が見え其玄關の一方の側には人間の白骨累々として推く積まれ之と同じ合せになつた他の側には魚串を數知れぬ程置いてある吾々は其恐ろしき光景に慄として居ると、突然カチャンと高い音がして大廣間の戸が開くよと見ると目の前に亭々たる棕呂の木かとばかり疑はるゝ程脊高き眞黒の人間の獰猛なる姿が現れたのだ此異形なる人間は前額の中央に唯一箇の目を備へ前齒は鋭利で且つ長く口外に突出て其口は丁度馬の樣に奥行きが深いのである更に彼等の上唇は胸の上まで垂れ耳は宛ら象の如くにして兩肩を蔽ひ爪は怪鳥の如く長くして曲つて居る此恐ろしい惡魔を一目見て我々は殆んど人事不省に陷り死人の如く地上に横はつて居た我に歸ると今の異形の人間が玄關に坐つて居る彼は歩を我々の方に進め先つ手を伸して私の首筋を摑み体を振り廻して見た稍て私の体を骨と皮ばかりと見たのであ

らうか、其儘にして船員全体を順次に捕へて同じ様に撿査したのだ所が一番よく肥えて居るものは船長であつたから恰も我々が雀を捕へでもする様に片手で船長を持つて体に串を突ぎさし火を起して之を焼き晩食に食つてしまつた、食事がすむと元の通り玄關に歸り其儘横になつて眠つてしまつたかうして朝まで眠つて居たが我々の方では怖くて眠る所の騒ぎではない苦惱の中に夜を過した朝になると巨人は目を醒し我々を置き去りにした儘出て行つてしまつた次の夜私達は友人のために巨人に仇討をしやうと一決した彼は水夫の一人を人身御供にしてしまつて又其處へ横になつて眠つてしまつた暫くすると巨人は鼾をかいてよく眠つて居るから之に乗じて船員中より撰べる勇敢なる九人と私は夫々串を取つて其尖端を火にかけて赤熱しめ猶ほ十人相應じて一時にやけ串を彼の目に突きさして盲目にしてしまつたのだ、すると巨人は非常なる苦痛を覺えたのであらう天地も崩るゝばかりの唸聲を發してムツクと起き上り私達を捕へ様として手を伸したのだ併し私等一同は手が届かない所ま

で逃げて居つたから安全であつた巨人は此に至り門をこぢ明けて大喚聲を洩しつゝ出て去つた私達も直ぐ王宮を出發して海岸に來つて三人乗りの筏を幾つとなく其邊に澤山あつた材木で作つたが巨人は天明まで現れて來ず又今はまた聞えて居るあの大聲がやめば死ぬたらうと思つて居たから直ぐ筏に乗るのを見合せて日の出を待つて居た即ち巨人が死ぬは一同は此島に逗留しようと謂ふ決心なのだ併し此希望は水の泡で夜がまだ明けない頃から盲目にされた巨人が殆んど同じ大きさの二人の者を引き連れ雲霞の如き大勢を率ひて攻めて來たのであるそこで我々は出來るだけ早く筏を水に浮した之を見た巨人共は大なる石を提げて海岸に驅け寄り胸の深さまで水中に這入つて石を投ぐる其巧妙なる手段に私が乗つて居たより他の筏は皆之がために沈没し私達三人を除く外總ての船員は溺死してしまつたのである私達三人は力の限り筏を漕いで漸く虎口を免れたが海に出ると強い風や大きな浪に翻弄せられ苦多き不安の念に驅られつゝ其日と次の晩を過したのである其翌日になると幸にも筏

はとある島に漂ひ付き此島で生命の種とも謂ふ可き美味なる果物を見出して之を食ひ大に英氣を回復したのである其夜は三人は海岸で眠つたが何とも謂へない位大きい蛇の聲に驚かされて目がさめた此音は蛇が其体を捲く時に鱗が磨れ合つて發するのだ此蛇は私の仲間の一人を大叫喚を發せるにも拘はらず一氣に搔つ拂つて數回地上に擲ちて体を碎き夫の骨を裂いたり又はムシブッて食つて居るのが手に取る如くよく聞えるのだ尤も其時は私等二人は遠方まで逃げ延びて居たが次の日も亦大蛇を見て大に恐怖して『噫無情なる哉神よ何ぞ私の危險に遭ふ事の數多き』と慟哭したのである。

▲舊知己

其道を歩いて居ると高い木が目についたから其上で次の夜を明さんと思ひ先づ果物で腹を拵へやつと木へ攀ぢ上つた暫くすると大蛇が木の根の所へ來て幹に卷ひ上つて私の仲間を見付け搔拂つて行つてしまつた、私は一人で夜の明けるまで木の上に居つたが朝になつて降りて來て愈今度は仲間二人と同じ運命になるのだなと觀念したのだ併し考へれば考へる程怖くて堪えないから寧ろ一思ひに海に身を投じやうとも思つたが失望のあまり運命に逆ふのはわるいと悟り人間の生命を支配する神の意志に身を委ねんと定めたのでゐた、その間に私は荆棘を澤山集めて多くの束に束ね此束を木の周圍に周らして廣き圓形を割し其又幾つかの束は頭上にある枝へ結び付けて置いたのであるかうして終つてから夕方になつて私は此圓形の中に這入つたが大蛇は時間を違へずやつて來て木をグルグル周つて私を食はうとした併し私は拵へた壘壁が邪魔になるものだから中へ進入する事出來ず止むなく夜の明けるまで幸ひにも安全なる場所に居る鼠を恨めしげに見つめて居る猫の如く大蛇は其處にヂットして居つた日が出ると大蛇は去つたが私は太陽が高く昇るまで壘壁の中に身を潜めて居つた神は不幸なる私の境遇を憫むで呉れたものであらうか再び私は心を定めて

今や身を海中に投げやうとした時に遙かに沖に一隻の船を認めた私はありだッけの聲を出し、リンネルの頭巾を裂いて之を打ち振り船員の注意を促したが到頭彼等は私を見付け出し船長はボートを下して迎へに水夫を寄來して呉れた私が本船に歸ると商人や水夫が私の周圍に蝟集しどうして此荒果てたる島へ來たのかと其理由を聞くそこで私は經驗した冒險談を皆に話すと其中で一番老人のものが時折あの島に住んで居る巨人は食人種であると謂ふ話を聞いたと語つたが兎に角水夫達は百難を免れた私を祝福して呉れてから彼等は船長の所へ私を伴れて來た船長は私の襤褸を纏へるを見て其所有の着物一枚を惠むて呉れた私はよく船長の顏を凝視めると第二回の航海の際私が眠つてしまつた島に置き去りにして其儘出帆した時の船長だなと知つたから

『船長さんよく私を見てください、私は貴君があの荒れ果た島へ置き去りにしたシンドバットだと知つてましよう』

船長は甚だ注意して私を見たが思ひ付いたと見えて

『神に謝す私は幸にも先きに被むつた失敗を償ひ得た君の荷物は此處にあります私は夫を今迄保存して居たのですと私を抱いて喜んだそこで私は船長から荷物を受取つて長らく管理して置いて呉れた禮を述べたのである。

其後暫く徇航海を續け諸島に寄港して遂にサラバットに上陸したサラバットは檀香と謂ふ藥材に用ふ一種の木材を產する所だサラバットより尙他島に行つて丁香肉桂其他の香料を得たさて此島を出帆して又航海を始めて居ると長さ幅各二十キビットに達する大龜を見たし、又牛乳をとる牝牛に似てる一種の兩棲類をも見た此動物の皮は非常に堅固で土人は之を以て小盾を作るのだ長い航海を終つて間もなく私はバルソラに達し其處から殆んど日分にも數へ切れない位の富を提げてバグダットへ歸つて來た大に財を散して窮民を賑し當時既に所有して居た他に數多の財產を作つた。

かくしてシントバットは第三回の航海談を物語り終つて荷運人のヒンドバットには又百セクヰンを與へ翌日また話を聞き飯を食ひに來いと招待したのである。

第四回の航海

▲食人種に攫はる

第三回の航海の危險を忘れてしまつた頃になつて私は又商賣をし且つ新奇な事をやつて見たくて耐らなくなつたから私は色々の用事を濟して置いて之から着手せんとする商買に用ふる荷物を準備し數ケ國を經由して波斯地方に行つてある港で又船に乘り組むだのであつた海へ出ると突然又暴風に遭ひ船長の命によつて帆桁を下し危險を豫防するに必要なる總ての用意をしたのである併し何事もやつた事は皆駄目になつて帆はチ切れ〳〵に引き裂け船は坐礁する二三の商人や水夫が溺死すると謂ふ騒で積荷などはすつかり失くしてしまつた幸運にも私は數名の商人と水夫と共に漂ふ木材に取り縋り潮流によつて前に見える島へ流れ着いたのである此島には果物や泉などがあつて生命を維持する事が出來た其翌朝私達は島内を探險して數軒の家を

發見し其方へと近づいて行つた近づく儘に私達は大勢の黑人種に包圍せられた奴等は數團になつて私達を捕へ夫々其住所へ連れて來たのである私は五人の仲間と一緒に同じ所へ連れられて來たが我々を坐らして或牧草を示し之を食へと合圖したのである五人の仲間は黑人自ら此牧草を食はない事にも注意せず唯空腹を滿さんと欲して大食をやつた併し私は何かの計略だらうと疑つて居たから草を食はなかつたので大によかつたが仲間の五人は暫くしてすつかり知覺を喪失し私に話をしてる事も自分で分らない樣な始末となつてしまつたそれから黑人はコロアナットの油で料理した飯を私達に食はしたが例の知覺を失つた連中は不相變鱈腹食つて居る私も食ふには食つたが極て少量に止めて置いた元來奴等は始め牧草を食して知覺を失はしめた目的は私達を殺さうとするのを悟られまいと思つたからで又米の飯を食はしたのは体を肥やして置かうと謂ふ考へであつたのである之は食人種のよくやる計畫で肥やして置いてすぐ食つてしまうのだ案の通り黑人は仲間の五人を食つてしまつたが私

はまた知覺があるから誰れも容易に想像せらるゝ通り他の五人の樣に肥えて行く處か日まして痩せて來るのだ何故かと云へば五人の仲間を殺して食つた黒人が私の日に瘠せ衰へるを見て殺すのを延期したからだ、かくやる間に私は漸く多くの自由を得此自由のために私は或日黒人の住家から遠く離れて逃走を企つる機會に出會した尤も一人の老人が私を見守つて私の計畫に疑を抱たのであらう頻りに歸つて來いと大きい聲を張り上げて叫んで居たが私は夫れにも從はず速力を倍して早く驅け出し老人の見えない所まで來た其逃走を企てた時には黒人の住家の邊には例の老人の他誰れも居ない皆外に行つて居つて夜になるまで歸つて來なかつたのだそこで黒人共が私を追つかけて來ても到底間に合ふた話ではない安心はしたものゝ尙夜に至るまで歩き通したから少時の休息を取り兼て得たる食料を食つて元氣を養ひ再び足を早めて出發した丁度七日間旅行を續けたが其間多くコーアナットを食料として居つた第八日目に私は海近く來ると自分と同じ樣な白人が此地に多く產する胡椒を拾つて

居るのを見付けた私は之を以て或吉事の前兆となし躊躇する所なくツカ〳〵と其側へ寄つて行つた胡椒を拾つて居つた人達の方でも私が目につくと此方へ寄つて來て亞利比亞語で私は誰で又何處から來たのかと先方から問ひかけた私はこんな所で故郷の言葉を聞いて喜び謂ふべからず自分の難船の事から黒人の手に捕へられた事まで殘る所なく話した、私は白人等が所要だけの胡椒の量を拾つて終ふまで一緒に居つて夫からみんなと船に乘つて彼等の出て來た島へと出發した彼等は王に私を引見せしめたが其王は人の好さゝうな顏付で私の冒險談を辛抱强く聞いて居たが非常に驚かれて、私に衣物を呉れた、此島は人口も多く分布して萬事の秩序甚だ整頓し、王都は大商業の中心となつて居た重ね〳〵の不幸の後此面白さ土地へ來ようとは實に私の愉快に堪えなかつたので加之寛大なる王の親切なる待遇に益々滿足の度を高めた私が小島で見た事の中で非常に不思議だと思つた事は王を始め總ての人民は手綱若くは鐙をつけずして馬に乘る事もあつた、そこで私は或日職人の所へ行つて鞍

を作る方法を敎へ之を作つた後私は自ら手を下して鞍を皮と毛織絨にて蔽ひ金糸で之を縫繡したそれから又鍛冶屋へ行つて見せた見本通の細い錐と鐙を拵へ此諸事相整つて鞍が立派に出來上つた時に王に献上して一匹の馬に附けて見たすると王は直ちに之に跨つたが非常に滿足せられ私に澤山の下賜品があつた位である殆ど絶間とてなく私は王に面謁をするから或日王は『シンドバットよ余は御身を愛す、そこで御身に求めたい一事がある他でもないが御身に嫁を世話したいのださうすると長く余の領地に止つて御身の國の事を思ひ出さない樣になるだらう』と謂つたから私は敢て王命に逆はず上品で美人で且つ金持ちな一人の宮女を王から賜つたのである結婚式終つて私は妻と住むて居つた暫くは仲睦しく日を送つて居たが私は到底此の流浪の生活を以て滿足する事が出來ず機會を伺つて逃げ出しバクダットへ歸る計畫をやり出したのであつた。

▲奇態な法律

當時私の近所に住む人で私と極く親密に交際して居た男の妻が病氣に罹つて死んだのだゝから私は此男に遭つて其悲嘆を慰めてやらうと思ひ彼に會ふと直ぐ『君は身躰を大事にして永く生きて居れ』と謂ふと『あゝ君は僕を長く生きられる身躰と思ふのですが僕は今から一時間と生きて居る事が出來ないのだ何故かと謂へば今日妻と一緒に埋められる体で此島の法律では生きてる夫は死せる妻と共に生ける妻は死せる夫と共に葬られる規定なのだ彼が此野蠻極まる風習の話をして居る中に其親族、知己及近所の人々が葬式の手傳にやつて來た此等の人々は女の屍を生前に持つて居た美しい衣物と總ての寶玉にて飾つて結婚式を擧ぐる時の如くになし之を其儘車に乘せ埋葬地に向つて出立した此順序は第一に夫を先きに立てゝ死せる妻之に從ひ高き山を攀ぢて埋葬地に來るや彼等は深き穴の口を塞げる大石を取去づて衣

物や寶玉を飾つた儘死体を穴の中に入れたのだすると夫は親族故舊に抱き合つて名殘を惜み依々として他の棺架上に置かれ之に水を充てる瓶と七個のパンの小塊を合せ乘せて同じく穴の中へ入れられて仕舞ひ之にて埋葬式は終り穴の口は例の大石で蓋をしたのである之より數週間の後私は同じく此運命に遭遇したのだあゝ止ぬる哉だ私の妻が病氣で死んでしまつたのだそこで私は外國人たる私が此人道に欠ける法律により生埋めとなつて殺される義務がないと王と大に議論を戰したが王や其近臣は主立ちたる市民と共に葬儀に列しせめて私の悲嘆を輕からしめんと申出で遂に葬式後私は水を入れた瓶と七個のパン塊と共に穴の中へ入れられました私が穴の底に近いた時に上部より來る光線にて穴の中の有樣を知る事が出來た此穴は宛ら果てしもない樣に見えるが深さは五十尋ばかりである爾來暫くは水とパンとで餘命を續げて居たかもう其食料も盡き果てた時何か足音が聞えて其物が動き出すと喘き聲が聞えるだから私は尙ほも耳を澄して其音する方へと寄つて行くと其物は屢々立ち止つ

ては逃げ段々私が近くに依つて苦しさうな吸呼が聞ゑるかう謂ふ風にして可なり長い間私は其動物を追躡し遂に遙か向ふに星の樣な光るものを見付け出したのだ私はズン〳〵進で行くと其光力が或は消え或は現れて居たが遂に此光線は巖の穴から射し込むて來る事が分つて此巖の穴から海岸へ出る事が出來た時には飛び立つ程嬉しかつた私は此處で身を伏して幸運なりしを神に謝し目をあげて遙か海の向ふを見ると私の居る海岸目蒐けて走つて來る船を見付けたからリンネルの頭巾を打ち振つて出來るだけ聲を張上げ乘組員に助けを求めた船員は此聲を聞きつけてボートを下ろし本船まで私を連れて行つて呉れたそれから私達は船に乘つて諸島を歷訪しベルス群島に寄泊した此島はセレンテブより順風に乘ずること十日位にして達すべく私の上陸したクラ島からは六日位かゝるのだクラ島の王は威勢赫々として且家富み盛え王都より二日路にして達し得べきベルス島は此王の配下に屬して居る併し其土人は人肉を食ふ位の野蠻人である此處で私達は交易をやつてしまつて帆を上げて出發し

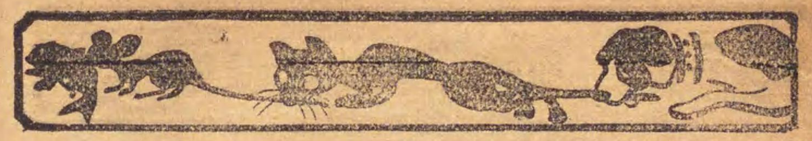
倚幾多の諸港に寄港して芽出度くバクダットへ歸つて來たそこで私は神の厚き恩惠に報ひんために寺院には寄附金をし貧民には救恤を施して其福を祈り私は數多の知人を招待して長夜の宴を張つて數多の餘興を催したのである斯く語り終つてシンドバットは又百セクキンを荷運人に與へ明日また同じ時刻まで第五回の航海談をするから皆々一緒に來いと招待した。

第五回の航海

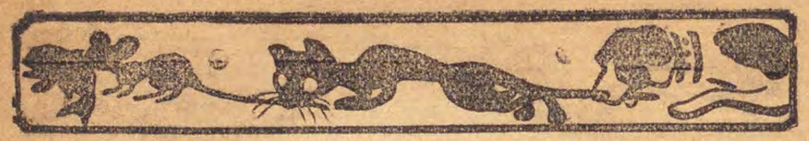
▲無人島に漂ふ

私が今まで出遇つた千辛萬苦も尙私の航海をしたい願望を中止することが出來ず私は又荷拵へをして之を携へてよき海港に至り此處に止つて私の費用で此航海の爲めに使ふ船の出來上るのを待つて居つた船が出來上ると私は荷物を積んで之に乘つたが積荷があまり少いから二三の商人を誘つて其商品と共に船に乘り込ましたのであ

る出帆の際は順風吹いて航海に甚だ好都合で隨分長く船を走らした末船の始めて着いた所は荒れはてた一個の無人島で此島で怪鳥ロックの卵を又發見した尤も此卵は將に孵化せんとして居たもので今しも雛がその嘴で卵の殼を碎かうとして居るすると此處へ私と一緒に上陸した商人等は手に手に斧を以て卵に穴をあけ生れたばかりの雛をチ切れチ切れにして引つ張り出し燒いて食はうとして居るだから私は口を酸ばくして卵に惡戯をするとよくないからと頻りに商人等に謂つたがどうしても聞かない商人共が舌鼓を鳴らして之を食つてしまつた時に遙か遠方の空に二個の大なる雲のやうなものが現れて來た今までの經驗からあの雲の樣なものは何であるかを見て取つた船長はあれはロックの雌雄であるから早く船に乘つて逃げやうと言葉忙しく連呼した二匹のロックは驚く程大きい聲を立てゝ近づいて來たが卵が碎かれて雛が盜み去られたのを知つた時には益々其音が劇しくなつて來たすると何思つたか二匹のロックは元來た方へすぐ引返して飛去り姿も見えなくなつたから此間にと私達



は全帆に風を孕まして將に我等の頭上に起り來らむとする慘劇を避けんと努めたのであるすると間もなく又二匹のロックが此方へ引き歸して來るからよく見ると爪に大きい石を持つて居る見る〳〵二匹の怪鳥は船を目蒐けて飛び來り一匹の奴が上から石を落したのだ併し船の舵取りが旨味かつたから石は船に當らず海の中へ落ちてしまつた、所が今一匹の奴の投げた石は巧に船の眞中に命中して哀れや船は粉微塵に碎かれてしまつた此時石に打たれて商人や水夫の死せるもの夥く幸に石を免れたものは皆海の中に沈むでしまつた私は此海の中え沈むた連中であつたが再び浮き上つて來ると幸に船の破片を捕へたから之に交る〳〵片手で取縋つて泳ぎつゝ風と潮に運ばれて無人島に漂着し安全に上陸する事が出來た、そこで私は疲勞を醫さんとして草の上に坐して英氣を回復し島の中へ段々這入つて行くと四邊は丁度美しい庭の如く至る所に森があつて綠葉繁茂し果實は樹上に熟して清泉の流れ潺湲として仙境に遊ぶ心地かした内地に進入する事遠からずして私は弱々しい一人の老人を見



付げ出した此老人は小川の傍に坐つて居るから私は其方に近寄つて禮をしたが唯輕く頭を下げたばかりであるそこで私は何故こんな所へ坐つて居るかと聞くと老人は何も答へず手眞似で以て自分を負つて河を渡し『さあ下りなさい』と謂つて下り易い樣に腰を曲めたが爺さんは下り樣とはせず（此事を思ひ出す度に私は可笑くて耐らない）今まで私が弱りきつた老人とばかり思つて居た彼はすばやく足を私の首の所へ持つて來て肩の上に跨り喉頭を死ぬだらうと思ふ位かたく絞め付けた間もなく手を緩めて呉れて呼吸が通ふ樣になつた時に老人は今度は足を一本投げ出して亂暴にも他の足で私を打つから仕方なくに私は腰を伸して立つたのだ私が立つと老人は森の下まで又脊負つて行けと謂ふので其通りすると今度は果物を食ふのだから止れと謂ふ夜になつて私が横になつても私の脊中に居つて首筋へ緊と抱さついて居る夜が明けると起さろ〳〵と謂つて私を抓るから仕方がなく起きて歩く不相變老人は脊中に居るのだ或日私は木か

ら落ちた數個の乾いた瓢單を見出したから其中で大きさうな一個を取つて中を奇麗に洗つて葡萄の汁を絞り入れては都合のよい場所に隱し置き數日後其處へ行つて見て之を味つて見ると精神を興奮せしむるには誠にいゝ葡萄酒が出來て居るだから私は之を飲むで脊中に老人を脊負つた儘陶然と歌つて舞踏を初めたのだ酒が私に及ぼせる効果を見た老人は手眞似で自分にも少し飲ましてと謂ふ實に葡萄酒を飲んでからは脊中に負て居る老人も今までの樣にさして重く感じなかつたそこで私は瓢單を渡すと彼は舌鼓を鳴らして此滋味を味ひすつかり酒を飲んでしまつた尤も隨分澤山酒が殘つて居たのだから老人も陶然と醉つて歌ひ出した旋て私の体に卷きつけてあつた足も漸く緩んで來て前の樣に緊着して居らないから此處ぞと私は老人を地上に投けると死んだ樣になつて身動きもしないそこで私は大い石を取つて打ち殺してしまつた。

▲眞珠で大儲け

此の足手纏ひの老人を除き去つたから私は大に喜び海岸の方に歩いて來ると其處に碇泊せる或る船の船員が丁度水を酌みに來たのに出會つた船員は私を見た時には大に驚いたが更に私の冒險談を聞いたら其驚き謂はん方なく　『じや君は海の老人の手に捕へられたのに相違ない併しあの老人の害心ある手に抱き絞められ而も生命を全うしたのは君が始めだ聞く所によると彼は一度捕へたものは決して殺さなければ止まないさうで此島の人に知られて居るのはあの老人に殺された人の數が多いからだ』　と謂つて私を船長の所へ連れて呉れた大に歡待されたそこで私は此船に便乘し船長は再び航海を始め數日の後或都へと着した私の懇意にした商人の一人が一緒に行かうかと私を勸めて大きい袋を呉れ市民の人等に私を紹介して呉れた此人達はココアナツト拾をして居る連中であつたからかの商人は私のために其同行を願んで

呉れたそして私に『あの人達について行き給へあの人達がやる樣にすればいゝのだから、併し彼等に離れては生命を失ふ恐がありますから氣をつけなさい』と商人は敎へて呉れた一行が茂つたコヽアナット林に來ると木は亭々として高く其幹は滑で到底之に攀ぢて枝に生つた實を取る事が出來ない森の中に這入つて來ると大小の猿が數知れぬ程居つて夫が人影を見ると石火の如く敏捷に木の頂上に逃げて行くのだ私は一行の商人達と共に數多の石を集めて木の上に居る猿に向つて之を投ると猿は又其復讐として手早くコヽアナットを雨の如く我々目蒐けて投げて來る其又猿の姿は一見慷慨に堪えないやうである、そこで我々はコヽアナットを拾ひ集めつゝ絶間なく石を投げては猿を怒らした此方法で我々は袋に一杯にコヽアナットを集めたのであつた船にコヽアナットを積んで更に出帆し胡椒の産地として名高い諸島を歷訪してコヽアを胡椒又は伽羅木と交換し他の商人は眞珠採取に出掛けて行つた私は潛水夫を雇つて大きい純粹な數個を採取する事が出來たそこで私は又船に乘つて茅出度バルソラに着し此處よりバグダットへ歸つて胡椒伽羅木眞珠とで漠大な利益を博し其十分の一は施恤に用ひて長途の航海を慰むる休息をしたのであると話し終つてシンドバットは更に荷運人に百セクキンを與へ尙第六回の航海談をするから明日又飯を食ひに來いと招待した。

第六回の航海

▲また難船

私は五回まで難船に遇ひ幾多の危難に遭遇したにも拘はらず尙冒險をして苦勞して見たいと思ふ私の心は自分でも既往を追想するとその行爲に驚き十人が十人まで免れる事の出來ぬ非運よりよくも免れる事が出來たと思ふ位である一年程ぢつと此處に居つたが親族故舊が泣いて諫むるを聞かず又第六回の航海をなす用意を始めた、併し今度は波斯灣の方に路を取らずに再び波斯印度の内地諸縣を歷訪して或港に來

て此處より船に乘つたが長い航海をやつて行く間に船長及水先案内は船の針路を全く過つてしまつた私は急に縄梯子を下つて來る船長の嘆息する聲を聞いて何事が起つたかと聞くと今本船が洋中の最も危險なる場所にあるのだと答へた更に船長は

『船は早き潮流に流されて居るから今から十五分も經つかたゝない内に船諸共我々は死んでしまうのだどうか神に此危險から助かる樣に祈りなさいかうなつては神樣の助でなければ免れる事が出來ない』と語をついだ續て船長は帆を捲き收めて命令を下したが帆索は皆切斷され其中に船は潮に流されて殆んど近き難き山に向つて突進し遂に片々にチ切れたのであつたが船員の生命、食料と貴重品には何等の別條もなかつた、私達が居た山の麓は數多の難破船と白骨が累々として山をなし各種の貴重品等が殆んど數ふるに遑ない程澤山あつたが之等の物を見ると益私達の失望を甚しからしめた一体他の所では河か海に注ぐか普通であるが此所では清水が海より暗黑なる洞内に流れ込むで居る其入口は高くて中々廣い併し此處で一番著し

い事は山の石と謂ふ石は皆結晶のルビー其他の寶石である事だ又此處には灑青の泉があつて海に流れ込み夫を魚が食つて再び排泄すると龍檀香に化し之が波のために澤山海岸に打ち上げられて居る數多の大木も亦繁茂して大低伽羅木なのである此場所の光景は右の通りであるが一度船が此場所へ來ると再び外へ出る事が出來なく假令海上より吹き來る風が船を此處より押し流さんとするも反對に又風が起つて潮流と相俟ちて船の進行を遮り陸風が吹いて居る時に此處へ船が來ると山は全く風を遮つて一波も動かずために潮流によりて岸へ打ち上げられてしまふのである斯の如き險惡な場所にて難破した上に山へ上る事も出來なければさて海へも出る事が出來ぬそこで私達は失望のあまり山麓の海岸に止り唯死ぬ日の來るを待つの他なかつた尤も初め上陸した際にはありとあらゆる糧食を皆に等分して置いたのだ。

私は他の乗組員よりも一番長く生命を保つ事が出來たをして船員が全く死に竭してしまつた時にはもう私の生命も之迄だと觀念した位、何等の食物もなかつたのだそこで私は穴を堀りて身を其中に横へた何故と云ふに私が死んでも之を葬つて呉れる人のないからである併し神がまた私の境遇を憫み給ふたのか不圖私は大きい洞穴に向つて流れ込んで居る川の堤に行かうと考へ注意に注意を加へて此川筋を計つて私は『此川が地下に流れ込む以上はどこかに出口がなければならないだから私は筏を作つて流れのまゝに之を流せば或は人の住む所に出る事が出來るかも知れないよし中途で溺死してしまつた所で他の船員等と死場所を變へるだけの話だ』と獨言を謂ひ難破船より流れ來る木材と綱よりいゝ奴ばかりを澤山集めて仕事に着手し相互の間を固く縛つて堅固なる筏を作つて其工事終るや其にルビー綠桂玉龍檀香結晶と高價なる織物を積載して筏をよく平均ならしめ綱で之等の貨物をよく筏に結び付け手製の掉二本を携へて自分も之に乗り運命を天に任しつゝ川筋を流れのまに

に下つて行つた洞穴の中に流れ入るや四邊は全く黑暗々として何れの方向へ流れて居るかとも分らない此暗黑の中に漂ふて居る中に方形になつて頭もツカヘル位低い所を通つた事もあつた勿論此流れて居る間は高價な品物こそ澤山持つて居るが食物とて少しもないから何も食はないために私は人事不省になつてしまつた何時まで人事不省であつたか私は知らないが不圖目を開くと筏は川の岸に沿ひたる沃野千里の中に流れ出てゝ杭につながれ周圍には黑人種が黑山の樣に集つて居る私は之れを見て吃驚してすぐ起き上り兎に角彼等に挨拶をしたすると彼等は何か話しかけて來たが言葉がちつとも分らない私はまた眠つて居るか醒めて居るのか宛ら夢のやう、其夢でないと云ふことが判ると嬉しさ謂はん方なく私は高聲に亞剌比亞語で『全智全能の神よ私を助け給へ惠み深き神は目を閉ぢて眠りつゝある間に幸運を授け給へり』と謂ふと一人の亞剌比亞語を解する黑人が私の言葉を聞いて此方に近づき『我が同胞よ驚き給ふな我々は此地の住人で近きあたりの山より來る此川にて田畑

に灌漑の途を開いて居るものであるすると一人の者が筏を見付け出したから川へ飛び込み泳いで行つて今繋いで居る所まで持つて來たのですそしてあなたの目の醒ますのを待つて居ましたどうか理由を聞かして下さい、どちらから入らしたのですかこう黒人が謂ふから私は第一にまづ何か食して呉れ、それから話をするからと謂ふと彼等は二三種の食物を呉れたから之を食つて腹を拵らへそれから今までの經驗を話したのだ話がすむと今の黒人が通譯して他の人々に聞かすと私よりも之を聞いた彼等の方が驚いて王に此話を聞かしたいから私を王の所まで連れて行くと謂ひ出したそこで彼等は直ぐ一匹の馬を取りにやつて私を助けて之に乗せ二三の黒人は道案内として私の前に歩み其外のもの等は私の筏と荷物を持つてゾロ〳〵跡へついて來た私達はセレンデブの王都の方へ進むで行つた此島へは前に一度來たことがあるのだ黒人は王の許へ私を連れて行つたから私は玉座に近づき印度諸島の王に對する禮式をすると王は私に起立を命じて懇に挨拶され近く座を賜ふた私は何事も隠す所な

く自分の經歴を王に話し筏をも見せて王の前にて荷物を解いて御覽に入れると王は數多ある伽羅木龍檀香やルビー綠桂石を見て大に賞讃の辞を賜ふた王は樂しげに私の寶石を見て其中から善かりさうなものを順次に手に採つて居るから私は王の膝下にひざまづき恐る〳〵申すやう『私の命は陛下に捧げて居りますから此筏に積むだ荷物もどうか陛下の物と思召して御自由にして下さい』 すると王は微笑を湛えて『シンドバットよ余は御身のものを欲しくはない御身のものをまだ此上增してやりたいと思つて居るのだ、どうか御身は此地に止つて余が許しなくして此處を去るなよ』 と私を慰め役人に命じて余を接待せしめ皇室の客として私を歡待する旨人民に布告を出したかくして役人は私の荷物を兼て定めたる宿所に運び入れて呉れた其後私は毎日一定の時間に王の機嫌伺をなし其餘の時間で町を見物した、此王都は島の中心に位して四面山を以て圍まれたる谷間の一端にあつてルビー此他綠桂石の産出多く珍奇な草木は至る所に群生して杉の木コヽアナツトの木が甚だ多い又

此島の大河の河口には眞珠を産し或谷間には金剛石に富むでゐる私は暇に任かせてパラダイス(極樂)にてアダムか罪を犯し爲めに禁錮された場所に巡遊し又高山の頂に昇つて面白く可笑しく暮らした。

▲王様の言傳

私は町へ引き返して來てから王に歸國したい旨を申出ると許可せられ無理無体に私に貴重な土産物を持せ且つ私達の王なる正義の指揮者に宛てたる手紙を渡して且つ曰く『どうか此土産物を受納してほしい而して此手紙を御身の王へ渡して私の交情を傳へよ』と私のセレンデブの王より受取つた手紙は此世に極めて少い貴い黄色を呈せる動物の革の上に書かれたもので字体は藍色にて書き其全文は『鹵溝には百頭の象を牽ひ幾千萬とも數を知らない位のルビーにて飾られたる王宮に住み其寶庫には二萬クラウンの正金及び巨萬の金剛石を有せる印度王よりフハラウンアルラスチント大王に親書を呈す余の大王に呈する品物は極めて粗末なるものであるが一人の兄弟一人の朋友より王に對して有する滿腔の交誼を表する標として願くば之を受けられん事を尚今後我等兩人は王たる其位地に鑑み長く交情を續けん事を切望に堪えず之れ余は此手紙を王の足下に呈せんとする所以なり恐惶謹言』と書いてある王の贈呈品は左の如くであつた。

一高さ半呎厚さ一吋のルビー製コップに重さ半グラム位の數多の圓き眞珠を盛れるもの

二鱗は黄金の如く光り此を布いて寢る人を無病ならしめ得ると云ふ神徳を有する蛇の皮

三最上伽羅木五千グラム及びヒステーショの實位の大きさなる樟腦三十粒

四寶石を縷めたる衣服を着たる美人の奴隷

船は出帆後愉快なる航海を續けてバルソラに上陸し私はバグダットの都へと急いだ

私はセレンデブ王の親書を持つて大王の門に至り玉座へと導かれたから拜謁して禮をなし親書と贈呈品を差上げた王は此親書を讀むで私に實際セレンデブの王が此處に書いてある通り富裕で威勢あるものかと聞かれたから私は再び禮をなして身を正し『大王よ夫は全く其通りです私は自分で目擊しました其宮殿の立派さと謂つたら他に較べるものがありませんそして王が何處へか行幸する時には玉座を象の脊上に設け更に玉座の前には一人の役人が手に黃金の槍を持ち同じく其後の者は金棒を持つて上つて居るのです王は黃金と絹で作つた衣服を着て威儀整々として夫々象に跨れる一手の近衛兵に護衛せられて居りますそれから玉座の前に居る役人が暫く高聲に印度にて名位赫々たる帝位を有し其偉名ソロモン王にも優り其權勢マハラシヤも及ばざる我大王を見よと謂ふと玉座の後にある役人は之に次で『斯くも威あつて斯くも強き大王は死すべし〳〵〳〵』と答へるのですすると前の役人は又『願くば神よ大王をして永久に生かしめ給へ大王萬歲と謂ふのです』此話を聞いて王は大

に喜び珍らしき頂戴物をして私は家へ歸つて來たシンバットは此に至つて荷運人に又百セクキンを與へ明日第七回即ち最後の航海の話を聞きに來いと謂つてヒンドバットを歸したのである。

最後の航海

▲王樣への返事

第六回の航海より歸つて來て私はもう二度と航海をせず年も老つた事であるから今まで遭つた樣な苦しい思をせず安樂に世を暮らさんと決心し平和の中に餘年を送つて居つたすると或日の事王の使者が來て『大王が御身に何か話したい事があるから呼びに來たのである』と謂ふ命を傳へたから私は王宮に至つて拜謁し禮をなすと王は『シンドバットよ余は御身に賴みたい事があるどうか手紙の返事をセレンデブ王に持つて行つて呉しい』との事であつた此王命は私に取つては青天の霹靂で

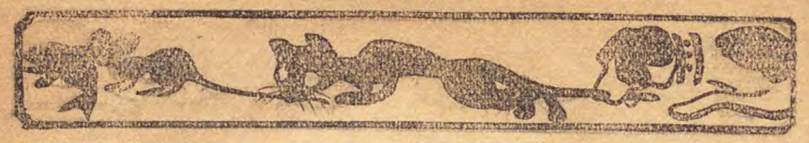
あるから　『大王よ私は大王の仰せには何でも從ひまする併し私は此王命を以て少し自分には重すぎると考へまする』　と申上げたすると大王は余の謙讓に首を振つて是非使者になれと謂ふから止むなく私も此命に從ふた之を見て王は大に喜び旅行中の費用として一千セクキシを賜ひ二三日で旅行の用意を整へ王の親書と贈呈品とを受取るや直ぐ出發してバルソラより船に乘り愉快なる航海をしセレンデブ島に安着して私は大歡迎を以て王宮に導かれ王の前に平伏したすると王は　『シントバットよよく來て呉れた余は今まで幾度御身の事を考へ居たが知れぬで實は心の中で再び御身に會ふ日の來るを祈つて居つたのだ』　此に於て私は厚く禮を述べて王に謝し私達の王よりの親書と贈呈品とを差上げた王の親書は左の如くである。

『神の命じ給へる地を領して先祖より傳へたる王位に上れるハラウンアルラスチットは神の一人の臣下として正義の王者たる武威並びなきセレンデブ大王に申す余は大王の親書を拜誦し余が代表者を貴國に使はす光榮を有す余が大王に有する交情を

察し長く交誼を給はらん事を祈る恐惶謹言』　王の進呈物は一千セクキンの價格を有する黃金製の衣服一領と貴き織物にて製せる衣服五十枚セイロン、スエズ、アレキサンドリアにて精製せる白布百枚及び深さよりも幅廣く厚さ一吋幅半呎の瑠璃の器物にして其底部にシナイキの皮にて弓矢を持てる男が片膝を地に着けて今や獅子を射んとする圖を浮彫してある此他尙高價なる一枚の額とであつたセレンデブ王は我王の示せる友情を深く喜び面謁することを暫時にして別離を述べると中々王は之を聞き入れて呉れぬ、然し漸く許可が出たから又多くの土產物を賜ひ直ちにバグダットに歸還せんと船に乘つたが豫期せるが如く速くはバグダットに到着しない出帆後三四日して本船は海賊の襲擊を受けたが何分軍艦ではないから直ちに船は彼等のために占領せられ一部の船員は之に抵抗を試みたが遂々殺されてしまつたのである併し私始め殘りの人達は幸に生命だけは助けて貰ひ遠方の島に連れて行つて奴隷として賣られてしまつたのである。

▲象を射よとの吩咐

私は金持ちの商人に買ひ取られたが商人は私を買ふとすぐ自宅へ連れて行つて待遇も惡くはなく奴隷には不相應な佳い着物も着せて呉れたそれから數日の後彼は私に何か商買をしたことがあるかと聞くから私は職人ではない元は商人であつたが海賊に所有品はすつかり巻き上げられ其上奴隷に賣られたのであると答へた『ぢや弓をひく道を知つてるか』と重ねて聞くので『弓は若い時分によく稽古したものです』と返事したそこで彼の商人は弓矢を私に渡し象の上に乘れる彼の後部に位置せしめて町から數哩距たる茂れる森に私を伴ふた適當な所へ來て止めると後は象より下よと謂ふから私は其通りすると今度は大きい木を指し乍ら『元來此杜の中には無數の象が居るからあの木に昇つて象の群が其側を過ぎる際弓で射るのだ、で若し象をうまく射止むれば私の所へ來て報知せろ』と私に命じた商人は斯く謂



つて食物を私に與へ自らは町へ返つて行つた私は其夜木の上でヂツト止まつて居たのだ

夜間は象を見かけなかつたが次の朝になつて四邊が明るくなると私は象の大群を見付け出しただから私は象に向つて數矢を放つて遂に其中の一匹が倒れたから私は象群の退却するのを待つて其場所に至り其成功に付き主人に告げ得るを喜んだのだ私の報知を聞いた商人は大に私の熟練を賞し兩人打連れて林に來り象のために其所に穴を堀つて之を埋めた商人は象の体の腐るのを待つて商買にする齒牙を取り來れと再び私に命じたのである私は二ヶ月程其仕事に從事した其或朝の事であつた私は象の群を見て居ると例の通り象は森の中を通過して温和しく私の側を通り過ぎる所が象群は一度止つて私の方に向つて天地も震ふ如き聲を出して突進して來た又其象の數の多いことゝいつたら殆んど平野を蔽ふばかりで地もために震動した位である之を見た私の驚きは如何ばかりであつたらう象群は私の隱れて居る木の周圍を圍み鼻

を上に向けてぢつと私を凝視して居る此怖ろしき樣を見て私は身動きもせず身も世もあらぬ思ひがした尤も私の怖れるのも無理のない事だ即ち一番大きい象が木の根の所へ鼻を持つて行つて木を引き拔き地上に倒したのだゞから私は木と共に地上に落ちると其の今謂つた大きい象が鼻で私を抓み上げて其脊中に置いた私は其時生きて居ると謂ふよりは寧ろ死んだと謂ふ方が適當でチット脊中の上に座つて居つたすると大きな象は先頭に立ち他の象は行列を作つて一匹づゝ之に從ひ私を遠方へ連れて來て地上に横へて皆の象がどこかへ行つてしまつた地上に横る暫時にして象の去るのを見るや私は起き上ると長くて廣い小山の上に自分が居る其小山も象の骨と齒で以て一面に蔽れてゐる私は此處を象の埋葬地だと信じ且つ自分を此處へ連れて來たは以後決して象を殺すなと云ふ事を知らしむるためだと思つた私は此小山に止まらず直ちに他の方へ歩を移し一晝夜歩き通した後再び主人の所へ歸つて來た主人が私を見るや『お主は可愛相に俺はお前がどうしたのかと思つてどれ位心痛したか

知れんそれだから俺は杜へ行つて見ると一本の木が引き拔かれてあつて弓矢が地上にあるのではないか一体どうしたのだい』と聞いたのだそこで私はありし次第を語り翌朝打ち連れて小山に來り乘つて來た象には運べるだけの象牙を積んで歸宅した其時主人は『まあ俺の謂ふ事を聞けあの杜の象群は象牙を取りに來た澤山の奴隷を毎年幾人となく殺すのだ又奴隷の方でも時々象を殺す併し神はお前をして象の危難を免れしめお前一人に此惠みを與へて呉れたのだ是れ實に神がお前を愛すると謂ふ標で世界がまたお前の働きにより利する所多いのだ今お前は俺に無限の財産を呉れ我町もお前のために大に富む事が出來たかゝる事がある以上は俺は最早やお前を奴隷として使ふ事が出來ないから之から兄弟にならう神はお前に厚き惠みを加へ給ふであらう今俺はお前を自由にして又少し計の財産を分けやらう』と私は之に答へて『神は貴君に幸すべし私は貴君や當地のために大資産を作つて御禮として何も欲しかないですが唯どうか故國へ歸らして頂きたい』と謂つた『よろしい今に

象牙を買ひに來る船が貿易風に運れられて來るから夫で御國まで送らせましよう』　と相談整ひ私は貿易風の吹き來るまで主人と共に止まつて其間例の小山へ行つて象牙を運むんで來て倉庫へ一杯つめて置いた船は其中に入港したると商人は自ら私が乘る船を檢査し私の勘定で船の半分迄象牙を積み入れ所狹きまで食料を澤山用意し此國に產する珍奇なる土產物を澤山貰つて出帆した船は新鮮なる食料を得んが爲め諸島に寄泊し遂に印度諸島の中で一番大い島のとある港に到着し此港よりバルソラまで海路を取らず自分の象牙だけを提げて上陸し陸行して國に歸還せんと謀つた私は此持つて來た象牙で多くの金を儲け之にて土產物とする珍奇なものを購ひ用意全くなるや隊商の中に加つて出發した、斯くして私は遂にバグダットに安着し使命を報告す可く直に王宮に詣てた王からは數多の下賜品あつて勳章等も賜はり爾來私は親戚故舊の中に居つて面白く世を送つて居る、シンドバットは第七回航海談を終つてヒンドバットに向ひ　『君は私程難儀した人を知つて居りますかこんな

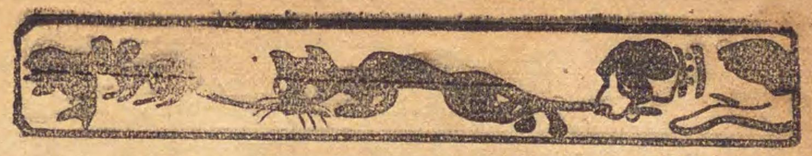
辛苦をして來た私ですから今太平樂を竭して世を渡るのが當り前ではないでしようか』　之を聞くやヒンドバットはシンドバドトの手に接吻して　『貴君のに比べると私の困苦などは何でもありません貴君は樂に暮して善いばかりかうまく運用した財產を當然所有する價値があります私は貴君の祝福を祈ります』　と答へたのであつた此に至りシンドバットは更に百セクヰンを荷運人に與へ且つ荷運ぶ仕事を止して今後一緒に食卓で飯を食へと勸めた之はツマリ荷運夫風情のものがどうしてシンドバットの樣な富める人と友達になつたが其なつた動機を一生涯荷運人に記憶せしめて置きたいためであつた。

二人の王子の話

▲父王の後嗣

カマラルサマンの二人の皇子は冒險剣の英雄であつて二人は共に養育せられ且つ同じ年齢であつて二人の間の愛情は極めて深いものであつたそこで二人の切なる願により同じ宮殿に起居し同じ家庭教師により教を受け同じ家臣に侍せられて快樂をも共にして居た斯くして二人の皇子が段々成長して年頃になつた時に何者かゝ二人の皇子が父王に對して叛逆を企てゝ居る旨を父王に讒訴したのであつた、すると父の王は輕卒にも其れを信じて非常に怒り最も信頼して居る家臣のジオンダルと云ふものに皇子を遠く離れた森に伴れて行つて殺すやうにと命令したのでジオンダルは二人を連れて命ぜられた森へ行き父王よりの命令を二人に語つて曰ふには　『貴君がたを殺すのは父君からの命令で己むを得ませむが天に在る神樣が御助けくださる事を私は願ひます』　と云ふと二人の皇子は答へて　『汝は汝の義務を果せ我々二人は眞心より御前を許すぞ』　と云ふて二人は相抱いて之れ今生の見おさめと互に名殘を惜むだのである此に於て先づ第一に殺される身仕度をしたのは皇子アサットで

あつて曰く兄のアムギアットの死を見て居るのは忍びないから見ない樣に先に殺してくれと云ふとアムギアットは之れに反對をして自分を先に殺してくれと云ふたのでジオンダルは二人の爭を見て泣かずには居られなかつたそこで二人は終に一緒に殺してほしいとジオンダルに願つたのでジオンダルは之れを許して二人の胸と胸とを合して共に斬り殺し易い樣な位置に二人を置いて何か死ぬる前に遺言は無いかと問ふたすると皇子の云ふにお前が歸つたら父上に我々は無罪であると云ふ事を告げて貰へばそれでいゝ然し我々は父君が事實の眞相をよく知らないからとて父君を恨むなどゝ云ふ事はないのであるとジオンダルが劍を拔いた時に傍の木に繫いであつた彼の馬が日に輝く劍に驚き綱を切つて走り去つてしまつた此の馬は甚だ高價な馬であつて美しく飾つてあるので彼は驚いて皇子の方には目も呉れず劍を捨てたまゝで馬を追かけて行つた馬が森の中深く馳け込んで行くと其足音に驚いて側に眠つて居た獅子が目を醒しジオンダル目がけて飛びかゝつて來たので今は彼は馬の事は忘



れて如何にして我身を救はんかと考へる許りてあつたジオンダルの去つた時に二人の皇子は其繩を解いて水を飲まうと思つて近傍の泉へ行くと獅子の吠る聲とジオンダルの恐しい叫び聲が聞えたので二人は森の方へと走つて行つて見ると獅子は今正にジオンダルに飛び掛らんとして居る所だすると獅子はアムギナツトを見てジヨンダルを見捨てゝ勢猛く彼れに向つて來たので皇子は勇ましくも此れに向つて行つて鋒尖鋭く獅子に切りつけたから獅子は地上に斃れてしまつたジオンダルは二人の皇子に自分の生命を救つてもらつたので今は皇子の足下に身を投げて自分の命の救れた事を感謝し聽て彼れは立上つて皇子の手に接吻をして目に涙を浮べて私が今貴君を殺す事は神が禁じて私に許しませんと云ふと皇子は我々がお前を助けたとて何も御前が父君よりの命令を行ふに妨にはなる筈のものでない先づ逃げた馬を捕へて以前の場所へ歸らうではないかと云ふて直に馬を捕へて之れをジオンダルに返した後父君の命令を果さん事を彼れに謂ふたが彼は少しも聞入れずに胸中皇子を殺さずして主命を果した風をしてカマルザマンに立戻る謀を案出し先づ皇子に二人が他國へ行く約束をなさしめて自分は皇子の衣類を取つて死んだ獅子の血を以て之を染め皇子を殺した証據に其れを父王に示す樣にし次ぎに彼は持つて居つた金を悉く二人の王子に與へて其儘別れてしまつた彼は王宮へ引歸して來ると王は命令を果したかと思ふたので彼は皇子の血に染んだ衣類を示して御覽下さい首尾よく果しましたと云ふと其の死際は如何であつたかと王樣は重ねて聞くから彼は答へて曰ふには

『驚く程沈着で只だ我々は罪無くして死するのである然し別に不平を云ふのではないが我々の死は天の命であるから天は我父君を許し給はん』　と云つたと復命したのである後幾もなくして皇子の無罪であると云ふ明白な証據を得たので父王は自分の命令が輕率であつた事を深く悔ひ此上も無く悲み我身を責め叫んで云ふには嗚呼我は殘忍な父である馬鹿な事をしたものだ無分別にも二人の罪も無い子を殺した盲目な慈悲のない父である斯くの如き罪を犯して如何で生き長らへて居る事が出來や

うかと父王は皇子の死は自分が下手人であると思つて皇子の死を悲んで居る間に皇子は人の住む所や人間を避けて沙漠を漂浪し野生の草や果實を食とし雨水を飲料とし夜は猛獸を避けて交互に番をして眠り以て艱難のありたけをしたのであつた

▲老人に遇ふ

斯くして二人は一ケ月の旅をして大きな黒石から出來て居る高い山の麓迄で來たがなか〳〵近寄る事も出來ない樣に見えた位であつたが終に一條の小道を見付けたから二人は其處から登らうと決心したのであつた、段々進むに隨つて山は愈々高く益〻險しく見えたので二人は幾度も中止しようかと思つたが終によく困難に打勝ちて山も追々下り道となり五日程終つて漸く打ち開けた平原へ來たのであつた其處から遠くに一大都會が見えたので二人は大に喜んでアサツドの方が町へ行つて食物を買ひ其間にアムギアツトが山の麓で待つて居る事に相談一決したアサツトが町へ這入

つて行くと直ぐに杖をついた立派な老人に出會たので挨拶をして『市場へ行くには何の道を行つたら宜しうございますか』と尋ねると老人は笑ひながら『左樣な事を問ふからにはお前他國の人じやな』と云ふからアサツトは『はい御覽の通り私は兄弟と共に國を出てから二月近くもなりますやつと今日此處へ到着しましたのですが長い旅路に草臥れて山の麓で留まつて居ります私は食物を買ふ爲めに來たので御座います』すると『老人はお前は實に宜い時に來たものだ私はお前達の爲めにそれを喜ばしく思ふ私は今日友人の爲めに宴會を開たのであるから私と一緒に來なさいお前の欲するものは何でも食するがよい又お前の兄弟にも又お前にも數日間の食物はやるお前が私に出會つたのはお前に取つては幸福である實を云ふと其町には澤山惡人が居るから』と謂つて呉れたからアサツトが云ふに『誠に有難う御座ります何分にも御願申します』と老人はアサツトを伴れ立つて歩き乍ら皇子を自分の手に捉らへた事を思つて心中で笑つて居るがそんなことは露程も口に出

さないでアサットに向ひ全く御前は私に出會つて幸福であるよと語りつゝ終に二人は老人の住家へ來て老人はアサットを座敷へ通したのである其處には老人と同じ樣な四十人の老人が居つて燃えたつて居る所の火の周圍で禮拜を行つて居つた皇子は彼等が動物を禮拜するの迷信的なる行爲には一方ならず恐れ驚いて身動きもせずして立つて居つた時に彼れを案内した老人は四十人の老人に挨拶して『熱心なる火の崇拜者よ今日は我々に取つては幸福なる日だガズバンは何處に居るか』と聲高く云ふた時に室の外に待して居つた一人の黑人が直ぐに出て來てアサットの方に進み行き彼を倒して手を縛りあげてしまつたすると老人は黑人に彼れを下に連れて行つて娘のボスタマとカバマに彼れの食物として朝と夜とに一片のパンを與へる限りで毎日彼れを鞭打する樣に命せよ斯くして置けば彼を我々の神の犧牲とする場所たる青い海と恐ろしい山とに向けて出帆する次ぎの船までには充分生命だけ長へて居るからと吩咐けると黑人ガズバンは皇子を捉て地下の獄室に伴ひ行き其處で彼れの

足に馬鹿に重い鎖を縛り付けてしまうや否や二人の娘は内に這入つて來てアサットを殆んど氣絶する位無慈悲に打つたのである斯くして後二人は彼れに一片のパンと少量の水とを與へて奥へ這入つてしまつたアサットは大分長い間正氣に歸なかつたがせめて此の不幸が兄弟に迄及ばなかつたのを心で喜むで居たのである話代つてアムギアットは弟が長くなつても歸つて來ないので非常に心配し一夜を殆んど睡りもせずに過し夜の明けるのを俟て彼れは町へ行き或る洋服屋の店の前で立止つたのである洋服屋は皇子の服裝ですぐ回々教である事を知り丁寧に挨拶して一伍一什の話をしたのである。

▲拜火教の一團

皇子アムキアットが此話をした時に洋服屋は『若し貴君の兄弟が火を崇拜せる人々の手に捕へられたものとするともう二度と遭ふ事が出來ないですよ可愛想に兄弟

が今迄艱難をつゝけて來た事も水の泡になつてしまつただから私は貴君に御兄弟と同じ様な目に遭はない様に御注意を申します夫れには貴君が私の家に滯在してるのか最上の策です」　と謂つてくれたそれで皇子は一ケ月程の間と謂ふものは主人に連れられなければ家を出なかつたのである併し遂に王子は冒險的に一人で出掛け今や家に歸らうとして居る途中で一人の美人に出遭つたすると其美人は顔の覆面を取り微笑し乍ら何處へ行くのですと聞くから王子はあまりの美さに見惚れて　『貴女よ私は家に歸るのです併し御差支なければ御宅へ御伴しましょう』　と語つたすると美人は私は貴君に御伴しましようと謂ひ出したので王子は自分の下宿へ連れて行くことが出來ぬ又町の事も一内不案内ですから何處へ御連れしていゝか分りませんと答へ乍ら、町中を此處彼處と歩いて遂には勞れて歩くのが厭になつてしまつた併しまたある道筋を歩いて居ると其町外れの所に來り美しい別莊へと導いて閉された門の前に立つたのである此門の兩側にベンチがあつたから王子は一寸一吹せんがた

め其一つに腰を掛ると女の方も他の一つに休むだのである女が腰を掛けると王子は之は貴君の御宅ですかと聞くから貴女は何故門を開けないのですかと美人に話したすると美人はでは貴君は何を御待兼ねですかと謂ふので王子は私は鍵を持つていません奴隷が持つて居りますがまだ歸つて來ませんと胡魔化したすると美人は　『私達をこんなに長く待たして隨分な奴隷ですねだから奴隷が歸つて來ると其返報に罰してやりますよ』　と謂ひつゝ席から立つて石を拾ひ錠前を碎いてしまつたのだ尤も此錠前は木で拵らへたものであるからごく弱いのだ戸が開くと二人は家の中へ這入つて行つた王子は厭々乍ら美人を伴ふて廣々とした庭を通り數段の階段を昇つて宏壯なる室に導く玄關に來り廣間へ通ると山海の珍味を集めた食卓もあれば果物を山の如く積むた棚もあり側の棚には葡萄酒の瓶を幾つともなく並べて居る二人は其處へ坐つて食物を食ひ始め之れが終ると美人は葡萄酒を注いで自ら飲み次に盃を王子にさしなみ〳〵と之れにも注ぎ入れ此に王子は美人の健康を祝する盃を擧げたの

である然し王子は此冒險なやり方を考へ出せば考へ出す程今にも此家の主人が出て來やしないかとの懸念に堪えず且つ心でこんな廣い別莊に召使が一人も居らないとは不思議な事よと驚いて居つたのである斯くして王子は『美人に此冒險を悟られない樣に主人が歸つて來なければいゝがな』と獨言を心の中で謂つて居る二人は尙ほも食後の果物を食つて居た時に到頭主人が歸つて來た其主人はババダーと謂つて火を崇拜せる人々等の王の乘馬の調馬師なのである。

元來此主人は平常二三人の親友と會食をやる場合の外は滅多に此處へ來ないだから宴會の場合には外の別莊から食物を此處へ持つて來るので今日も召使の者共に食物を運ばしめて置いたのだ美人と王子が來た時には丁度召使共が留守であつた。

▲露顯

主人のババダーが自分の別莊へ來ると戸がコヂ明けてあるのを見て大に驚き音をさせずに這入つて來ると大廣間から人の樂しげなる話聲が聞えるから誰かと思つて戸口へ半分首を突込むで中を見たのだ美人は主人の這入つて來たのを知らなかつたが王子は直ぐ之を認めババダーを一目見るより顏色は土の如く變じたするとババダーは樣子で以て王子に一語も語る勿れと示し併し此方へ來て御話しなさいと默々の中に暗示したのであるそこで王子は席を立つて美人に貴女は此處に御出でなさい私は之れから歸りますからと謂つてババダーに玄關迄送られ更に美人に聞かれない樣に話をせんため廣庭に王子を導いたのであつた此處に王子はババダーに此家へ無斷で這入つて來た顚末を話しすると主人は『あゝそうでしたかじや御戻りになつて御遊びなさい私は貴方の奴隸の樣に裝つて居りますからねだから私が奴隸の服て貴所の所へ行きました時何故早く來ないと謂つて私を御叱りなさいなに打つ位は構ひませんよそれで私は御二人が食卓について居る間御給仕しましよう』と謂ふので王子は幾度か之を固辭したが主人はいつかな聞き入れない無理矢理に美人の側へ後戻

りをさしたのだこんな事をして居る内にババダーの友人がやつて來たから主人は今日は差支あつて會食が出來ないと斷り且つ其譯を御話しようと謂つて友達を歸し自分は奴隷の服を着けて之に假裝したのである王子は再び席に歸つて美人と共に卓を圍んで居ると間もなく奴隷になつてババダーが入り來り恰も主人の譴責を恐るゝ如き態度をしたババターは身を伏せ地に頭をつかへてから手を組んで王子の後方に立ち命令を待つて居つたすると王子は言葉鋭く怒つた顏をして　『シラー貴樣は何をして居つたのだ早く來ると謂つて置き乍ら』　と叱るとババターは　『旦那樣どうか御許可下さい私は旦那樣がこんなに早く御歸りになると思ひませんものですから』　王子は　『惡戲者奴ー懲らしめのためだぞ』　と謂つて席を立ちステッキで輕く睨むで彼を打つて再び席についた、併し美人は是位の懲罰では滿足しないから自ら立つて杖を取りババダーの泣く位無慈悲に打ちすゑた之を見た王子は夫は餘りひどいと美人をたしなめもし御止しなさいよと謂つたが駄目だまた怒りに任せてババ

ダーを打つから餘りの事に王子は卓より立つて杖を無理に美人の手から取つてしまつたババダーは目を拭ひつゝ葡萄酒を注がうと立つたが二人の飲食し終るのを見て衣物をぬいで室内を掃除して之が整理をなし夕近くなつて來たからランプをつけた二人が歸り去る時になつて美人は玄關を通りつゝ不圖室に懸れる偃月刀を見て後を振り向き　『王子よ貴君が私を愛して下さるなれば此事をかなつて下さいどうぞ此偃月刀を取つて奴隷の首を刎ねて下さいな』　と謂ふから王子は此美人の提言に大に驚いて　『もう彼を許してやりましよう私も打てば貴女もあれ程打なさつたあれで充分じやありませんか』　美人は激した調子で　『あの惡戲者を殺さぬ以上は私はまだ滿足出來ません貴君が殺すのが御厭なら私が殺します』　と謂つて手づから壁に懸けたる偃月刀を下ろして來た玄關の中で王子は　『じや仕方がない貴女が滿足する樣にしましよう併し他人の手で私の奴隷が殺されるを見るに忍びません』　と謂つて美人より刀を受取り二人はババダーの室に來つて王子はババターに切りつ

けないで美人に刀を浴せかけて其首を切つたすると其首はババダーに當つたのであつたババダーは腰をかけて居た椅子の上に美人の首が飛んで來たから始めて氣が付くと王子は血に塗れたる假月刀を持つて側に立ち床の上には首のチ切れた美人が倒れて居るから大に吃驚したそこで王子は今迄の經過を物語り且つ　『私は最早や貴君を殺さぬ以上は此怒りたる女をどうする事も出來なかつたのです併しもう女を殺してしまいましたから』と謂ふにババダーは大喜びで　『貴君は私の生命の親です私は感謝します』　と謂つて王を抱き　『夜が明けない中何とか此屍体を處分ぜねばなりません併し私に御任なさい私は始末をつけましよう』　と語をついだ王子は私が殺したのですから自分で之を何處かへ持つて行きましようと謂つてババダーの謂ふ事を聞かないするとババダーは　『貴君は此土地に不案内ですからよく知つたものゝやうにうまく出來ますまい私が始末しますから貴君は此處に居て下さい若し日の出るまで歸つて來ない時には役人に捕へられたものと諦め下さいね念のため私

は此家と一切の品物は貴君のものだと謂ふ事を書き殘して置きましやう』　ババダーが此旨書き終るや署名して其紙を王子に渡しそれから女の屍体と首を袋に入れて肩にかけ町々を通り抜けて海岸の方に道を取りつゝ出掛けて行つたまだいくらも路程を歩かない中に町を密行せる巡査に出遭つたすると密行巡査の附添人がババダーを呼び止めて袋の中を檢べ巡査は變裝こそして居るが調馬師たる事を知つて居るから其儘家に伴ひて王に申上げない間は死刑の宣告を爲さず夜の明るを俟て之を朝庭に連れて行つたのである巡査は當時の摸樣より推察してババダーが罪を犯した旨を王に告げると王は自ら　『貴樣は余の臣下を殺して秘密の内に死体を穩さんとして持ち運んで居つた不屈至極である入牢申付ける』　と判決を下したのであつた罪なきババダーは死の宣告を聞いても拒まず先の巡査はババダーを牢に連れ行き小使をして本日正午調馬師は殺人罪を犯せるにより死刑を行ふ旨町内に布令しめたのである王子はババダーの歸りを今か〳〵と待つて居ると調馬師の死刑執行さると謂ふ

事を聞いたから大急ぎて刑場に行つた王子は今や斷頭臺上にのせられんとするババダーの巡査に連れられて來るのを見てツカ〳〵巡査の前に進み事情を話して　『此調馬師には女を殺した罪がありませんと私は斷言します女を殺したのは私が下手人で自衛のためにしたのです』　そこで巡査は死刑執行の中止を命じ王子と調馬師を王の面前に連れて來たすると王は王子の口より此話を聞かんと欲したから王子は此機を利用して自分の生より兄弟アサッドと二人がエポンー島出發以來遭遇せる出來事に及び此町に流浪し來れる次第をも述たのだ王子の語り終るを俟ちて王は　『余は大に滿足だ御身の生命は勿論御身に親切を竭した調馬師は生命も助け且つ其役目に安んせしめん又余は御身を内閣總理大臣に任じて御身の父の非道な取扱ひの塡補しよう且御身に余が全權の使用を許してアサット王子を探索する使官に供さん』とそこで王子は大に王に謝し有らゆる手段を用ひて兄弟のアサットを探すに努め全國に王子サアットを發見せるものは賞金を與ふべしと布告を出した

▲改宗

斯くせる間にアサット王子は晝夜の差別なく連續して穴倉の中でポスタマ及びカバマの兩人より非常な殘酷な目に遭はされて居つた其中に火の崇拜者の嚴肅なる祭祀の日が近いて來り例の如く火に向ふ船は艤裝された其船長の名前はヘブラムと謂ふて熱心な火の崇拜者なのだ彼は適當の品物を積み込み出發の用意なるやアサットを箱の中に入れ空氣を通はすために僅かばかりの裂間を置いてあるだけである船がまた出帆しない中に總理大臣のアレギアット王子は火の崇拜者等が毎年一人のマサルマンを犧牲として火山に捧くると知り或はアサットが彼等の手に捕へられて犧牲にされるのではあるまいかと疑ひ自ら船中を探索せんと思ふて總べての乘組員を上甲板に集め部下をして隈なく船中を探さしめたが上手に隱蔽されて居るものだからどうしても見付け出す事が出來なかつた船中の搜索が濟むと船は纜を解き洋中に出づ

るや船長はアサット王子を箱の中より連れ出して足械を施して失望のあまり自殺を企てさせない樣にした出帆後二三日は風が順風であつたが遂に猛烈なる暴風に遭ひ船は其針路を失ふたから船長は之は屹度火の祟拜者とは全く呉越も只ならざるマホメット教の信仰者アーヂアナ女皇の王都たる港に到着すべしと推察した女皇は宗教上の敵たる彼等の港に來るを欲せないのは勿論だ船長は今は進退谷まりたるを以て水先案内と水夫を集めて相談を始めて曰く　『諸君我々は波にさらはれて沈沒するか乃至は我々の宗教を非常に嫌忌して居るマーヂアナ女皇の港に這入るかどちらと一ッを撰ばなくてはならぬ樣になつた併し女皇の毒手より免るゝ方法もなきにあらずだ夫は今船に積せて居るアサット王子の足械を解いて奴隷の如く裝はせ女皇が私に朝庭に來いと謂つて來て其從事する商買を尋ねた時には私は奴隷賣買をして居るのですと答へるのだ併しもう皆奴隷を賣つてしまつて今殘つてる一人は讀み書きが出來るから自分の書記にして居りますと謂ふのだすると女皇は其奴隷を見て男振りもよければ宗教も同じであるから從て奴隷を憫むに違ひないかうなれば奴隷を女皇に賣れと謂ふだろうから之に何かと口實つけて日を延し其内に天氣になつたら出帆しやうではないか』　水夫水先案内は拍手して此説に同意を表したそこで船長は命を下してアサットを縛れる鎖を解かしめ奴隷の如き質朴なる服裝を着せしめてマーヂアナ女皇の前に船長の書記であると見せかけたのだかくして船は入港して碇泊した、マーヂアナ女皇の宮殿の庭園區域は海岸の所まで來て居るから女皇が船の碇泊せるを見て朝庭に來る樣にと船長に使者を送り女皇は庭で其來るを待つて居つたのであるすると船長はアサットを連れて上陸し女皇の前に來るや地に身を伏せて陛下の港に入港せざる可からざる次第を語り且つ奴隷の賣買に從事し今や總てを賣却しつくして唯一人アサットを殘すのみと言上したのである女皇はアサット王子の方に暫く氣を取られ之を凝つと眺めて居たが遂に之を買はんと決心しアサットに其名前を問ふたのでてつたするとアサットは涙乍らに答ふるやう　『女皇陛下よ陛下は

私の以前の名を御尋ねですか又今の名前をですか』　と謂ふと女皇は　『お前に二ツの名があるのか』『ハイ私は以前アサット（幸福）と呼ばれて居りましたが今はモーター（犧牲）と謂ふ名です』　女皇は之れを聞いて其意の了解に苦んだが之は奴隷となつた境遇にあるものと解釋し併しお前は船長の書記だと謂ふから屹度上手に書く事が出來やう今書いて見せよ』　と女皇が謂ふから船長はアサットに自分の役人だと謂ふ標としてペンインキと紙を與へアサットは少し側に身を寄せて二三の格言を書き付けたのであるすると女皇は其文章の道徳的にして書体の立派なるを賞讃し格言を讀むとすぐ船長に向つて　『此奴隷を賣つて呉れるかさもなくば朝廷の土產物として置いて行け』　と謂つたのですると船長は傲然として　『差上る事も出來ませぬ私はあの奴隷が要るのです手元に置かねばいけないのです』　船長の無禮に憤れる女皇は手を伸してアサット王子を捕へて王宮の方に去らしめ船長には若し夜になつて港に碇泊するに於ては荷物を沒收し船をも燒き拂ふべしと命令したからな

ると船長も致し方がないまた暴風が止まないが船は再び纜を解いて出帆する事となつたマーヂアナ女皇は王宮に歸つて食事を命じてアサットを自分の室に連れ來らしめて席を與へアサットは此處で今日までの經歷を女皇に話したのである晩食の用意が出來たから女皇はアサットと共に食卓につきて相助けて食事を爲し元氣を回復せしめるために大に酒を飲ましたのだ夫がためアサットは我を忘れる位泥醉してしまつたアサットは女皇が氣が付かない間に衣服を解いて庭に降り立ち見ると庭園への戸が開いてゐるものだから出て行つた庭の美しきに誘はれて暫し其中を逍遙し泉水の所へ來て芝生の上に横になり其儘眠つてしまつた女皇より攻擊さるゝを怖れて船長は兎に角碇を揚げ小船に曳かれて港外に出て今や本船に小船を引き揚げんとする際船長は水夫に向つて　『待てまた本船へ上るのぢやない此處に樽があるから之へ水を酌むで來い本船は夫まで待つて居るから上陸して宮殿の庭園へ行け庭の垣は胸位の高さだから飛び越すのは譯もない話だ庭の眞中に泉があるから樽へ水を入れて

船へ持つて來い』　と叫んだから水夫は敎へられた通り其處へ上陸して垣を飛び越えて中へ這入つた水夫共が泉の所へ來るとアサットが草の上で眠つて居るのを見付け出したから水夫共は手分けして一部の者共は成るべく音をしない樣にして水を桶に充し他の水夫はアサットの周りを圍むで目を醒せは捕へやうと番をして居るアサットの眠つて居る間に桶に水を充して之を垣外に居る水夫に渡し次でアサットを捕へて又垣を飛び越えてボートに乘り移り桶を乘せて本船へと漕いで行つた本船に近づくや水夫等は喜びの餘り　『船長さんまた奴隷を連れて來ました』　と連呼した船長にはどうして再び水夫等が彼を見付けて連れ歸つて來たが分らない併し喜びは滿面に溢れ水夫に命じて足械を付けしめボートを引き上げ再び火山に向つて出發した。話變つてマーヂアナ女皇はアサット王子の居らざるに大に驚き女皇自ら探しに出掛けた位であつたが庭の戸が開いて居るのを見て尙奥深く侍女を連れて其邊を歩き探した女皇が泉水の側を通ると上靴を見付けたから拾つてよく見るとアサット王子のものに擬れもない尙池の緣には水が滴て居るから女皇は愈以てベーラムが奪ひ去つたと信じたのであつた此に於て女皇は常に用意して軍港に碇泊せる軍艦十隻の指揮官に命令を下して最も近き距離（早道）を航海して翌朝未明に女皇を艦隊に乘組ましむべしと命じたそこで指揮官は上陸せる各艦長水兵に命令して指定された時までに出帆の用意を整へしめた女皇は自ら之れに搭乘して指揮官に曰ふには

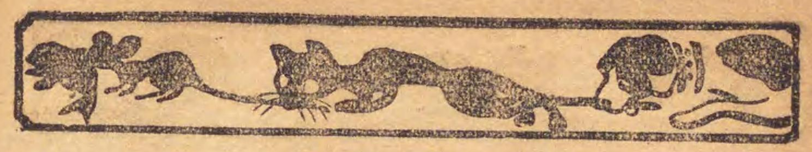
『全速力を出して昨夜此港を出帆せる商船を追跡せよ若し之を捕獲するを得ば御身の財產として其船を與ふべし』　十隻の軍艦はベーラムの船を追ふ事二日なりしも未だ之を認むる能はず三日目の朝に至つて漸く之を發見し正午には船を包圍して最早や逃げる事も出來なくしてしまつたベーラムが十隻の軍艦を見るや直ちにマーヂアナ女皇の艦隊の己れを追跡せるものとなし如何にす可きやと謂ふ事について大に心を腦ました併しアサットを此方へ止めて置くのはアサットをして自ら逃走したのだと謂はさねばならない又アサットを殺さんか危險極りなしだそこで彼は命じてア

サットの足械を取らしめ箱から出してアサットが船長の前に來るや船長は『俺の追つかけられたのは一にお前のためである』と謂つてアサットを海中に投げ入れた泳ぎの名人なるアサットは巧に手足を動がして安全に海岸に達した上陸後第一にした事一度ならず火の崇拜者の手より免れたと謂ふ神の恩惠を謝する事であつた次に彼は着物をぬいで水を絞つて岩の上に干すと太陽の熱と岩の熱とですぐ干いてしまつたそれから彼は身を横へて暫く休息を取り再び衣服をつけて出來るだけ海岸に沿ふて歩き出した王子はかうして十日程の間無人の地方を旅行し食物としては牧草植物と野生の果實を用ひたのである遂に町へ近く事が出來たが夫は火の崇拜者の住んで居る處で曾ては非道な目に遭つた處である併し今此町には兄弟のアムギアッドが總理大臣となつて居るのである（尤もアサットはこんな所に兄が居るとは露程も知らない）其時既に夜が更けて路も既に凍り往來には人氣なきを知つた王子は町近き墓地に止らむと決心した此墓地には數多の靈廟があるのだ此靈廟の中に其戸の

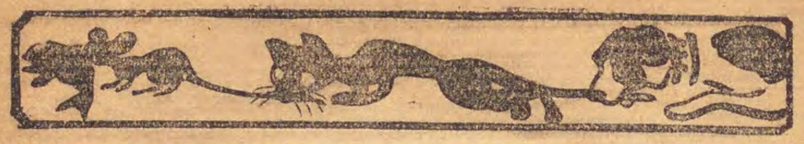
開いたものがあつたから王子は其中に入り一夜を明かさうと思つた話がベーラムの船に移つて船長がアサットを海中に投入したる後は四面皆女皇の艦隊に包圍され女皇の乘れる一艦はベーラムの船に近いて來た此に於てベーラムは降服の標として帆を卷き收めたのである。

▲邂逅

女皇は親ら敵船に趣きベーラムが大膽にも王宮から掠奪して來た書記の一件を訊問するとベーラムは『陛下よ彼書記は最早此の船の中には居りません』と答へた、そこでマーヂアナは出來るだけ精密に侍者をして船中を探索せしめたが求める人がどうしても分らない仕方がないから女皇は本船と之に積むで居た貨物一切を没收してベーラムを其部下の生命ばかりは許して小船に乘せて放免してやつた、斯くして虎口を漸く免れたベーラム一行はアサットが到着したのと同じ夜に火を崇拜せ



る種族の住む町に着し矢張りアサットが眠つて居る墓地で夜を明かしたのであつたアサットが人の足音に目を醒したが其時ペーラムはすぐ其のアサッドの姿を認めて『オヤ彼奴は此處に居たのか』と獨りこちつゝ飛ぶか如くに王子に近ついて聲を立てさゝない樣に半巾を丸めて彼の口中に押し込み部下の者の助けを借りて彼を縛つてしまつたのである翌朝町へ這入るべき大門が開くのを待ち兼ねてペーラム及び部下はアサットをまた行人とてなき通りを通りて前の老人の家へ連れ込み再び以前の地下室に彼を幽閉して前にも優る逆待をしたのである併し王子の苦痛を受けるのも實を謂ふと今暫くの間であつたのだと謂ふのは此再度の幽閉を受けてから間もない或日の事ポスタマは牢獄の中へ這入つて來て『もう安心しなされ貴君の罪を受ける時は過ぎてしまいました以後は此私を信して下さい私は出來る丈け盡力して貴君を逃がす樣にして上げませう』と謂ふから此言を聞いて皇子は飛び立つ計り喜び此苦痛を受けたのもツマリは神が自分を愛して下さるからだと深く天帝に謝し尙語



を次ぎてポスタマに再生の恩を謝しつつ今日までわりし次第を殘らず物語つた此事があつてから以來と謂ふものはポスタマは決して其妹を地下室へ來らしめず加之今までのパンと水の代りに今度は手の及ぶ限り善い葡萄酒や食物を持つて來る樣になつた實にポスタマは出來得る限り皇子の不幸を救はうと決心したのであつた夫から二三日たつて或日ポスタマが父の家の戸に立つて居ると向ふの方から總理大臣が數名の官吏と數多の待者を從へつゝ次の樣な嚴しい公告を大聲で謂ひ乍ら此方目蒐けてやつて來た『賢宰相が一年前に分れた儘今以て其行方が分らない弟を尋ねに自ら出て來たところ弟は此町の火を崇拜する人民の中のどこかの穴倉の中に押し込められて居る樣に思ふそこで若しアサットの居る所を知つて連れて出したものには總理大臣から莫大の褒美が下さる事になつて居る併し若しアサットを隱して居つて後に至り其事が露顯すると總理大臣は之に死罪を申渡し且其家を破壞する』云々此總理大臣と謂ふのは實にアサットの兄アムギアット其人であつたのである此布告を

聞くやポスタマは飛ぶが如くに戸を閉ぢて地下の牢獄に來りイソ〳〵喜びながら謂ふ樣　『皇子よ貴君の苦痛も之がおしまひですさあ私に連いていらつしやい』　皇子は其言葉に從つてポスタマに連れられて町へ來るとポスタマは　『皇子は此處に居られます』　と謂ふと總理大臣は直ちに弟を認め優しき情に堪え兼ねて彼を抱き官吏が乘つて居た馬に乘せて王宮に導き王に謁見せしめたのである又ポスタマは元來父と一緒に居るのを好まないのであるから矢張此時一緒に王宮に連れられて來た斯くして老人やベーラムと火を崇拜する人民の全体が王の前に呼び出されて夫々磔刑の申渡を受けたのであつたが彼等は聲を揃へて王の膝下に蹲き其許を哀願したのであるすると王は　『貴樣達が火を崇拜する事を止めてマホメット教に歸依せない以上はどうしても許す事が出來ぬ』　と謂い聞かすと彼等一同は王の言葉に從ひ且つ自由の体となり得たのは一にポスタマの恩であると深く之を德としたがアサットの口添へもあつたから彼等は無事に放免された。

▲御注進〳〵

アムギアットと弟アサットの話を聞いたベーラムは大臣に御兄弟二人を母國まで船で御送り致したいと申出て且つ　『父王樣には貴君方御二人の罪なき事を御聞きにもなりましたらうから嘸會ひたいと思つて御出でゞしようと謂ふから二人の兄弟は其情を容れて之を王に言上すると王も夫は結構だと大に喜ばれ直ちに船を艤裝する樣にと命令し船の用意整へて俟つた二王子は告別のため王に謁見して告別の辭を呈し其今まで受けた好意を感謝して居る時に不圖町の方に當つて大喚聲が聞えて來た其れで前後して一人の官吏は雲霞の如き大軍が此町を目蒐けて攻め寄せて來ると注進して來たのである王は大に驚いたがアムギアットは　『陛下よ私は總理大臣の位を今辭しましたが併し此危急に際し私は出來る丈御國のために盡しましようそこで申上げますが城下を攻めに來た敵は何者であるか私が見屆けて參りましよう』　と

言上したのであつた王は夫を許したからアムギアットは直ちに一人の供人を連れて敵の正体を見届けどう謂う理由で來たのかと云ふ事を調べに出掛けたのである皇子は出掛るとすぐ敵を見付け出したが威儀堂々破竹の勢を以て段々城下目蒐けて押寄せて來る此に於てアムギアットは敵の前哨の所へ行つて旨を通ずると前哨は皇子を一皇女の許へ連れて來たすると皇女は皇子と談をして居る間兵馬を止めたからアムギアットは皇女に一禮して此國と友誼を修めんが爲め來たものであるか又は戰はんが爲め來たのであるかと謂ふ事を尋ねたのである皇女は答る樣　『余は國交を修めんが爲め來たものである併し夫に就て先つアサットと謂ふ一奴隷を余が手に渡してほしい此奴隷は此町の船の船長なるベーラムと謂ふ人の爲めに捕へられて居るものである私はマヂアナと謂ふ女王であるが貴國の王が之を聞けば屹度其願望を聞き屆けて呉れる事と思ふ』　そこで皇子は答へて曰ふに　『賢明なる陛下よ陛下の尋ね求められて居る奴隷こそ私の弟で一度分れてやつと今再び廻り合つたばかりなんで

すどうぞ王宮まで御出で下さい私から直く御渡し申上げましようから』　女皇はアムギアット皇子に伴はれて城下に來て王宮で謁して一國の女王として優遇されたのであるアサットは女皇を見るやすぐ夫と悟つて一別以來の情を叙して歡喜の聲王宮に溢れて居る時も時更に優勢なる大軍が町の他方面から押し寄せて來ると謂ふ警報が、櫛の齒を引くが如く傳へられて來た、王は前よりも一層驚愕して　『アムギアットよ如何にすれば善いだらう』　と途方に暮れて居るそこでアムギアットは再び馬上に跨つて進み來る敵に向つて進むて行つた皇子は先づ前哨に總指揮官に面會したいと申込むと直ちに許されて大將の所まで導かれて來た而して玉座近く來ると馬より下り地に伏して大王何の爲に來り給ふと恐れ乍ら尋ねた　『余は支那王デアヲルなりそも此處へ來た理由と謂のは兼てチルドレンオフクワレダン群島王なるシャーザマンの一子、カマラルザマンに娶してある我が女王バドウラの消息を聞かうと思つたからであると謂ふのはカマラサマンが其父に遇ひたいと謂つてやまないか

らそれでは一年中に屹度歸つて來ひと云ふ約束で其願を許したのだ所が夫以來今日に至るまで何の消息もない貴國王は兼てから仁慈の念に厚いと聞いて居るから行方不明になつた我女姓の消息を聞かうと思つてはる〴〵來たのである之を聞ひたアムギアットはそれじや此王は自分の祖父に當るのだと吃驚したが恩愛の情止めあへず祖父の手に温きキッスをしつゝ『陛下よかく謂ふ私はカマラルザマンの子でバトウラは我母で御座ひまする唯今でも兩親は屹度達者で居る事と存じて居りまする』之を聞いた支那王は初めて孫の顏を見て大に喜び懷しげにアムギアットを兩手に抱き占めつゝ其本國なれば兎も角、なぜこんな異國に居るのかと優しく尋ねられたからアムギアットは弟アサットと共に遭遇した今までの經歷を事詳しく話したのであつた話を聞き終つて支那王は『罪なきお前達をそんなひどい目に遭すとは何たる事だらう併し喜べ俺がお前と弟を國へ連れ歸つて面白く愉快に暮らしてやるからそれでは今直ぐ歸つて俺が此處へ來たと云ふ事をアサットに知らしてやれ。

▲四面楚歌の聲

かくして支那王は其處に陣營を構へアムギアットはありし次第を王に告げんと王宮さして歸り來つて旨を王に通ずると王は支那王の如き大國王が單に其王女に會はんが爲めにはる〴〵此處まで來たと謂ふ事を深く驚いたから兎も角も自身王に面謁せんと出掛けられたのであつたこんな事で混雜して居る最中今度は前とは全く違つた方面に當つて黃塵濛々と立上り又も變事が起つたのでなかろうかと人々安き心もなき折柄果然驚報は更に大軍の到着を報じたのだそこで王は支那王と面謁する間もあらばこそ劇に沙汰止みとなり三たびアムギアットをして其情勢を窺はしにやつたのであるそこでアムギアットはアサットを連れて出掛けると此大軍は父カマラルザマンの軍隊でカマラルザマン王親が二人の皇子を尋ねに來たのであつた。話は後に戻るが王は二人の皇子が無實の罪に斃れたるを深く憐みて止まず遂に之が任に當つた

エミルヂオンダルは見るに見兼ねて二人の皇子を殺さないで逃がしましたと申上げたのだ之れが爲め王は身親ら二人の行方を尋ねやうと決心して出掛けて來たのである思はぬ所で二人の皇子に巡り合つた王は其嬉しさ謂はん方なく王子を抱いて歡喜の涙止めあへず噫此涙は實に長の間王を苦しめた涙であつたのではなからうかとつおひつ王子は父王の養父たる支那王が同じく此處に來て居ると謂ふ事を話しをすると王は殆ど夢心地して二人を促し支那王の陣營さして鹵簿を進めて來る其行程未た半ならさるに更に第四の大軍が旗鼓堂々此方さして進んで來るのを認めたのであるどうも第四軍は彼斯より來たものらしいカマラルサマンはそこで二人の王子をして其軍隊の眞相を見届けしめ其間王は軍馬を止めて其復命を待つて居ることにした二人の王子は直ちに發足し軍隊の所へ來て王に謁見し敬意を表しつゝ此處に駕を枉けられた理由を聞いたのであるすると王座近くに控へて居た總理大臣が王に代つて答ふには

『王の名はシャーザマンと仰せられてチルドレルオフグワレダン群島の王

である數年前國を去つた王子の行方を探す爲めに親らこんな長い旅路に暮されて居るのである若し貴君方が其王子の行方について御心當りがあるならはどうぞ御教示を願ひたい』 すると王子等は 『唯今すぐ御挨拶を致しましよう』 と謂た儘飛ぶが如くに歸つて來てカマラルサマンに其父王が大軍を引き具して來て居られると言上した夢に夢追ふ心地とはこんな時を謂ふのであらう今やカマラルザマンの胸中は驚愕歡喜悲哀の情に張り裂けんばかり實に彼は父王の陣營に到り身を膝下に投げて一向其罪を待つたのである西と東に別れては再び回り合ふ日も……と果敢みては淡き夢と消えて今恩愛深き父子の對面、シャーザマンは言葉優しく父王を見捨てた情なさを責むればカマラルザマンは今更慚愧つゝ涙に暮るゝばかり戀の爲めに父を捨て國を奔つた其若き日の罪がひしゝと身を責めるのであつた三人の國王及ひマーヂアナ女皇は三日間王宮に滯在して貴賓としての取扱を受け其間アザットはマーヂアナ女皇と又アムギアット王子はポスタマが弟アザットに竭して呉れた親切を

德としてポスタマと日出度夫々華燭の典を擧げたのであるかくして三王一女王は夫〳〵々の國に歸つたがマヂャアナの王はどうしてもアムギアットと別るゝに忍びず且甚だ年老いたるを以て王位をアムギアットに讓つたと謂ふ話である。

漁夫の話

▲網にかゝつた壺

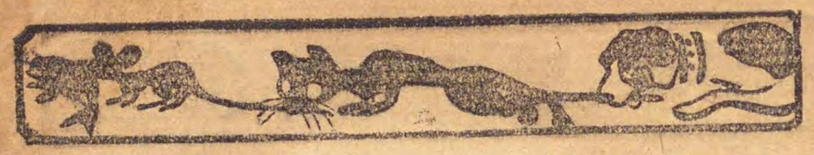
一村の漁夫町に一人の老漁夫が住んで居た家には妻と三人の子供があつて日々海邊で網打し乍ら、細い烟を立てゝ居た、ある日日も夕暮に間近い頃いつもの通り、岸近くで網をうつて居たが、また今日も不漁で歸ることかと内心不平で居ると、案に相違して大きな、ドッシリしたものか引かゝつた、久しぶりて、獲物でもあることかと網を引き上げて見るとこれはまた何と云ふてと、年老いた驢馬の死骸だ、『ま

たか！』と舌打し乍ら、もう一度ほうり込んで見ると、てんだは砂利と石だ、よ〳〵癪に障つたがもう一度と思つて淘然と網を下ろして見た、てんどは、なんだか手應へがありさうだ、たくし上げて見ると黄金の壺が白銀の瓶が、網の目を洩れて、ギラ〳〵光つて居るものだ、開けて見ると、古光りのしてゐる一つの銅壺！手に採つてよく〳〵見たが何物もない、口は銀板で閉ぢられて居る、中にはなにか入つてゐるか判らない、かう秘密になつて居ると、ソロ〳〵見たくなつて、そつと其の銀板を切り破つて開けると、中には一物もなくて、ただ黑團々たる黑烟が吹きだした。その烟のさきの方が天に届いたかと思はれる頃、一天俄かにかき曇つて海岸一帶は靄に閉ぢられた、漁夫は、この先きどうなる事かと思つてはら〳〵しだした。

▲ソロモンの魔法瓶

漁夫は、もう身も魂も無くなつてしまう計りに驚いた、壺の中からはやがて黑い怪

物が出て來て漁夫を睨みつけて　『ソロモンよ許せ、大豫言者よ、余は汝の命令に背かぬぞ』　と叫んで、この漁夫の方に、にぢり寄り大音を擧げて　『汝の一命は余が貰ひ受くるぞ』　と手に大刀を翳し上げた、漁夫はいよ〳〵驚いて何と云つてよいか眞青になつて震へて居た、やがて怪物は言葉を續けて　『余は天上の惡魔だが、獨りソロモンの命令に背いたが爲に永年此の中に追ひ込められて海底深く沈められてゐたのだが今日、御前が拾ひあげて開けたが百年目、汝の命を貰はねばならぬ』『ソリヤまた何故に』『判らずば云つて聞かさうか、實は余が此の壺の中に煙められてより已に三百年を經たのだ、其の最初の百年間に若し、この壺の蓋を開けてくれたなら、其人に富貴安樂を授げてやらうと決心して居たが誰れも開けてくれなかつた、次の百年目には强國を授げて其の國王となさんと云つたが矢張り誰れも開けてくれなかつた、次の百年には然らば此の年内に蓋を開くる人あらば直ちに其人を殺害せん―併し其の方法―斬殺か撲殺か將た銃殺かは其人の撰ぶに任せんと心



の中に定めた時に丁度今汝が蓋を開けたから、それで、殺してやるのだ』　と何だか理屈に合はない事を云ふ、魔王は今にも斬り附けさうな勢だから、漁夫も度胸を据へて、『よし、命は呈げませう―、併し其の前に少々御伺致したい事がムります、どうか御答を願ひたいものです』『よし、何なりとも問へ神に誓つて答へてやるぞ』『然らば先づ第一に御尋ね致したいは魔王は自ら此の壺の中に居たと云はれたが夫れは多分虚言でせう、若し眞實ならば、再び余の眼前にて、此の壺の中に入つて見せて貰ひたいものです』　と云ふと魔王は呵々と笑つて、『疑深い人間だな、吾れには神通力あれば、吾身は之れを放てば六合に擴がり、之れを收むれば三寸の壺中にも隱れるのだ、何の詐、何の虚言―』　と威猛高になつたが漁夫は信じない『いや、もし眞實なら、ドウカ眼前で、其の術を見せて頂きたい、そうすれば即座に私の命は差し上げます』　と云ふ、魔王も、彼是云つても面倒だと思つたか、『よし―それでは、よく見て居ろ―』　と云ふと均しく妖術を行ふと、今迄天地に廣ま

つて居た怪物は、忽然として、壺の中に入つて了つた。

此の時、漁夫は吾計成れり！と心の中で喜んで居ると、やがて、壺中から、微妙な聲で、『いかに漁夫よ、疑は解けたか、いやさ、神通力の恐ろしいのが判つたなら、そろ〳〵壺を出るぞ』と云ふ、漁夫は、こんな奴にまた出て來られては大變だ、と思つたから、早速ソロモンの鉛板で、確手と其の壺に蓋を被せて、扨て云ふには

『サーどうだ、今こそは汝は余に哀を乞ふ番となつたぞ、こうする上は生殺の權は余に在るのだ、しかし殺すも可哀想な奴だから、此の儘、海底に沈めて、此の世界には出さないから、そう思へ』と洶然とばかり海中に蹴込んだ、そして、吾家の前に大きな柱を立てゝ其の表面に墨黒々と『この海岸には惡魔の入れる銅壺あり若し何人にても此の壺に觸るれば、直ちに惡魔に殺害せられん投網者は注意せよ』と書き付けた。

天を翔り地を潜る大神通力ある魔王も、あさましや、匹夫の漁夫が舌端に乘せられて、ウマ〳〵と壺中に投げ込まれたとは笑止である、魔王も失敗つたりと思つたがもはや、通力を使ふことも出來ないので、又一度、漁夫を誑かして、再び壺から出やうとして『漁夫よ、今一度余の言ふことを聞けば汝の望みのまゝに恊へてやるぞ』と云つたが、漁夫は頑として聽き入れない『汝は壺中の別天地にありて樂め余は今汝に說き聞かす物語あれば聞くがよい』と。

希臘王とドクトル・ドウバンの話

▲拜診

昔、彼斯國ヅーマンと云ふ片田舍の村長が永い間癩病に罹つて、如何に名醫を呼ぶも看護の法を代へても癒らなかつた、其の時に唯一人、外國から、來合はせた、當時評判の善い、ドウバンと云ふ醫者が居た偶ま此國に來て、其の村長の病氣も診察

して、追々、快方に向はせたので、一時の評判醫者となつた、丁度この王も亦た難病に惱んで居たので、然らば、一度ドウバンに拜診仰せ付けるべしとあつて、愈々謁見拜診の順序になつたのでドウバンは空柄の木槌と藥とを持つていそ〳〵と出掛けた。

熱心なるトーバンの申出でに役人等は評議の末兎も角も診せる事にしやうと云ふので其由王に奏上して許可を受けトーバンの許へ　『では速刻出頭せよ』　との通知をしたトーバンは直ちに喜んで宮中へ伺候した並居る役人の面前を通つて悠々と王の前に進み出ていと恭しく平伏した王はドーバンに　『トーバンと申す醫師は汝であるかよく參つた就ては朕の難病を診察して呉れるといふ事だが汝には全治し得る見込があるか』　と問はれるとドーバンは膝を直して　『某不肖では御座りますが謹つて陛下の御病氣を全治し參らせますれば何卒御信用あつて某に御申付下さるやうに願上げます』　と述べたので王は元より並居る群臣も大に意を強くした王は喜ば

れて　『ドーバンよ其一言で朕は大に安心致したでは是非申付くるぞ』　と仰せあるドーバンは禮拜して　『不省ながらお請合申しまする』　と答へた其翌日に至つてドーバンは王に向ひ　『では陛下よ何卒玉遊の場所へ御出御を願ひます』　と王を玉遊の場所に伴ひ用意の木製の槌を王に手渡して　『陛下よ何うか御汗の發しまするまで此槌を以て御運動遊ばせよ』　と云つて運動の形を御目に懸けた王はドーバンの示した形の通りに槌を以て玉遊の運動を續けられたすると間もなく王は發汗したさて何の爲めに槌を以て運動するかといふに實はドーバンは槌の中に靈藥を入れてあるので運動の爲めに槌から藥が王の手を傳つて發汗につれて全身に泌み込む裝置になつて居るのである、運動は終つたので王は其夜ドーバンの勸めに從うて入浴の後臥床に入つて安眠された、扨て翌朝に至つて群臣は王の容態如何にと何れも心配して居たが不思議や王は何時になく心地清々しく何だか昨日と今日とは別人のやうな氣がする王は起上つて叫んだ　『あゝ朕の病は全癒した忌はしき難病は拭

ふが如く全治したあゝ喜ばしい』　之れを聞いた宮中の一同は夢かとばかり喜んで変る〳〵王の膝下に跪いてお祝ひを申上げたやがて此噂は宮中に鳴り響いたドーバンの名は神の如くに傳へられ活ける醫師とは誰しも思はず必ず王を救はんが爲めに天帝より降し給ふた天使に相違ないと國民殘らず喜び祝した王はドーバンに向つて『ドーバンよ』　さて〳〵汝は天下の名醫である神ならでは恐らく全治の法を知るまいと諦めて居た此難病を僅か一夜のうちに拭ふが如くに癒やしたる汝の醫術は迚も人間の業ではないあゝ汝は實に朕の恩人である辱けない〳〵』　と手を取らん斗りにして賞揚し感謝された餘りの慶たさに宮中では一大祝宴を催ふされたドーバンは正賓として王側に侍して宰相の上席に坐すためだ其席上王は頻りにドーバンを賞揚されて如何にせば朕は其恩を返すことが出來るであらうかとまで幾たびも繰返して云はれた喜びは獨り王のみかは列座の群臣も多年の愁眉を披いた事とて歡聲處々に湧くが如くドーバンの名譽は人々の口に囃されて酒宴の興は何時果つべしとも見へなかつた王は先づドーバンへの當座の謝禮として莫大の褒美金を下賜せられたそして特にドーバンの爲めに從者を任命しドーバンの意の儘に立働くやうに命じ給ふた一旅醫者も自家の技能の爲めに端なくも大出世をなし莫大の褒美金を惠まれ特に從者を任用された上に邸宅其他の調度をも何一つの不足なく與へられて出づるに車馬あり入るに財寶ある榮華の境過となつた。

▲忠諫の裝

併し人の榮枯盛衰ほど豫測のできぬものはない一朝君王の寵遇を受けて國中に名聲を轟かした醫者ドーバンの榮華も驕る平家の久しからぬと同一の運命に陷つて好事魔多しの語を事實にした茲に宰相某性來嫉妬の心深く昨日までは位人臣を極めて王者の他には誰一人として其命に服せぬものとては無つたから平和であつたが何處よりかドーバンと云ふ旅の醫師が立現はれ生意氣に王の難病を全治せしめた爲めに王

の寵は其者の上に厚く此身の寵は次第に薄らいで來たやうであると思ふと彼宰相はドーバンが憎くて堪らず何とかして王の寵を失はしめやうと苦心して遂に或日宰相は王に向ひ　『陛下よ臣は今日迄宰相の地位に居りながら何一ッ忠義を盡すの機會もありませんで過ぎましたが爰に臣は陛下の爲めに意外の報告を齎らし陛下の玉体をして泰山の安きに置き奉ることの出來る時機に到着いたしました』　と述べたので王は何事かと且驚き且怪まれた　『宰相それは何であるか朕の身に關わつた事と申すのは何事ぢや』　宰相は心の中で得たり賢しと思ふたが表面は何氣なく『ハイ他でもムりません彼の醫師ドーバンの事で御座ります彼ドーバンは表に醫師を標榜致して居りますが其實陛下を害し奉らんと企てゝ居りまする大謀叛人でムります彼をお近づけになるのは爆裂彈を御近けになると同樣危險此上もムりません内偵致した處では彼は陛下の御病氣を聞込んで好機逸す可からずとなし普通の醫師の態をして巧みに宮中に接近して參つたのでムいます願くば陛下臣の申上る處に御信用あ

つて十分御賢察御熟慮の程を願上げます』と誠しやかに讒言した之を聞いて王はカラ〳〵と打笑はれ　『何事かと思ふたらドーバンの事が何だと彼は危險な男であるとハ……何を申すのぢや彼は曠世の名醫であり朕に取つて生命の親てある朕は今日まで彼に與へたる欵侍をば寧ろ其功勞に對して薄きに過ぎると存じて居る位た仍て今後更に充分に彼の功勞を賞し遣はさうと思つて居るのである然るに彼を謀叛人であると申す卿の言葉は、甚だ奇怪に思ふ處で、恐らく汝の觀察が誤つて居ることゝ信ずる朕は飽まで彼を信じて居る決してさる惡人でない事は朕が十分に保証ずるであらう』　との仰せ一向讒言の効顯かない宰相は一旦王の前を退いたがこれは一筋縄では迚も讒言の目的を達することは出來ないと云つてドーバンに別段之れと云ふ惡い事があるのでもないから此惡役は甚だ難かしいので奸智に長けたる宰相は毎日〳〵王の前へ出ではドーバンの事を惡さまに吹聽する中に種々の虚構の事實を陣述して取かへ引かへ王の心を動かさうと企てた人は弱いものである如何に信じて居る

事でも日々に新しい反對の事實を耳にすると何時しか自信が薄らいで來るものである宰相は思案の末到底他に策畧とては無いからぢり〳〵と王の心からドーバンに對する信用を取除き其代りにドーバンの惡聲を刻み込むの外なしと考へたで王に對して『陛下は失禮ながら一時の甘味に醉うて遂に其毒を忘れ給ふて居るのでムいます臣は辱くも宰相の位に居り王寵に浴して只心中一點私なく忠義骨髓に徹して居るので御座りまする何を苦んで虛僞の言辭を弄しませうや陛下よ願くば飜然として大悟致され臣とドーバンと何れを信用致さるゝやを決せられよ』と忠諫の裝ひをして巧みに王の心を亂し幾たびか王の迷ひ給へる事を繰返したそして最後に『陛下よ願くば臣に對し彼の逆漢ドーバン死刑の儀を何卒御下命あらせられ臣をして陛下への忠勤を全うせしめ給へ』とまで極言した。

▲寃罪の苦痛

王も最初のうちは眞逆彼ドーバンをば宰相の謂ふが如き謀叛人であるとは信んじ給はなかつたのであるが宰相が巧みに搆ふる讒言の數々につひ動かされ且つは宰相は舊くよりの重臣ドーバンは他國の一醫師である所から賢明の王も遂に宰相の奸言に囚はれ迷はされて果は善良なるドーバンをば眞の謀叛人であると信じられドーバンの生命を絶つといふ決心を致されたで王は直ちに使者をドーバンの許へ馳せ付けさせ『速刻宮中へ罷出よ』と命じ給ふたドーバンは神ならぬ身の不測の災禍か我身の上に在らうとは元より知るべき筈もなく急いで平常の如く王宮へ來ると王は顏色常ならずハツタとドーバンを睨まへながら『ドーバンよ汝は太い奴ぢやのう今日までは汝の事を善良なる醫師天災の恩人と思ふて敬意を盡し禮儀を表し行届かぬ作らも國賓として汝を侍遇し信用致して居つたが汝は世にも憎むべき陰謀を企て居る曲者であること最早疑ふ餘地もなく明白に相判つた汝は朕の病氣を治療すと稱して此宮中に接近し其實朕の生命を奪はんと計り居る白者よ汝如き輩の爲めにをめお

めと殺害される朕ではないぞ』　と大喝されたドーバンは大に驚いて種々に其嫌疑の無根であることを訴へやうとしたが餘りの事に頓と言葉も出なかつた稍あつて漸く氣を落着けて王の膝下に平伏して　『陛下よこは又不思儀の御言葉を承りまする何として此ドーバンが左樣な恐ろしき考を持ちましようや抑も又何に據つて其樣の御嫌疑を蒙りましたのでしようか』　と聞くと王は一段と聲荒らげ　『默れドーバン汝の如き奴のことを盗人猛々しいと申すのじや表に蜜を含みて裏に針を藏す大惡人じや朕は最早寸時も汝の辨解を聞く耳は持たぬ速刻死罪に處するから覺悟を致して懺悔せよ』　と儼然として言放した宰相は心の中に吾計當れりとばかり窃かに北叟笑を洩らしたが他の群臣は驚いた王には何故にあれ程寵遇せられて居たドーバンをば死罪に處せられるのであらうかと各々訝かしく思つた。

ドーバンは餘りのことに驚き呆れて　『聰明なる陛下よこは又情けなき仰せを承るものかな若し此ドーバンが眞實左樣の惡心を抱いて居るものと致せば何とも王の

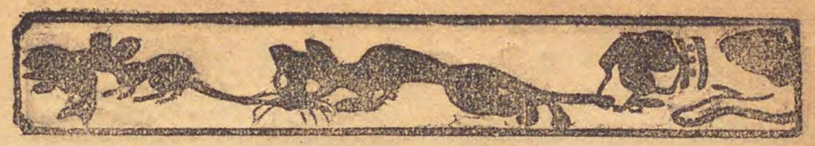
御病氣を治療して奉りましようや之れ何よりもドーバンに私心のなき証據でムりませう』　と云ふと王は曩きに信じて居た事の強い反動として飽くまでも疑ひの眼を以て見て居るのであるから事理を説いての辨解も王の耳には只詭辨として響くばかりだ『ドーバン汝は何故其樣に強情であるか最早免れぬ罪なれば男らしく潔よく白狀し神妙に斷頭臺の露と消え去れよ尙汝は此期に及んで朕を籠絡致そうと思つても朕の決心は再び飜す事は出來ない汝が朕の病氣を治癒し呉れたるは其實汝が朕に安心を與へ其虚に乘じて朕を害せんと致したに相違ない大奸は忠に似たりと申すが汝は實に恐るべき奴じや』　王は宰相の妖言に飽までも迷はされて居るからドーバンの辨解も徒らに王の怒りを增すのみ群臣がドーバンに寄せる同情の哀訴嘆願も却つて王の激怒を加へる計りであつたドーバンは決心して　『陛下よ最早辨解は致しませぬ唯一言私は天地神明に誓つて精神の潔白である事を確証致しまする大仁大慈の王よ願くば此ドーバンの心中を憫れと思召し何卒死罪の儀たけは思止まらせ給ふ

やう偏へに仰ぎ奉ります』　と云つても王はいつかな訊入れ給はず　『汝も謀叛を企てる程の大惡人ではないが死期に及んで生命乞ひを致すなどは卑怯未練の振舞であらう一旦許さぬと申したら例令汝の罪が寃罪であつても朕は決して　志　を翻す事は致さぬ』　と言放ち直ちに捕吏に命令を下して　『捕吏共よ此惡漢を打据へよ』と叫んだ捕吏共の丁々と打下す鞭はドーバンの顏と云はず手と云はず無慘にも肉に喰入つて悲鳴は宮殿を搖動かさん斗りであつた昨日の榮華は今日の災禍ドーバンの境遇は坐ろ群臣の同情を惹いた此時舌を出して喜んだのは只宰相一人であつた。

▲一　卷　の　珍　書

鞭は間斷なく打下されるドーバンは悲鳴を揚げて狂ひ廻つたそして血潮と涙の下から手を合せて王に向ひ哀訴嘆願して見たが王は少しも耳を藉さず頻りに　『強く擊て強く擊つて早く殺して終へ』　といふ酷命更らに丁々と力を強めて打据えた

ドーバンは怨めしげに王に向ひ涙に顫へる聲で　『王よ陛下よ』　と哀願したが王は　『ドーバンよ朕は汝の生命は許したくも斯くては朕の生命を捨つるも同然であるから到底許すことは出來ない』　と云つて益々捕吏を勵まして居るドーバンは之を聞いて絶望の極に達し嫉妬の結果讒訴した奸臣を恨み怨んで物凄い形相となつたやがてドーバンは斷頭臺へ引据えられて今や白刃の下にコロリと首を打落されやうとした刹那屹と覺悟の色を顏に浮べ聊かも惡びれずに端然と王を仰いで　『陛下よ死際に臨んで一言申上げ度き事がムいます私死しての後死骸や埋葬やら遺產の處分やら種々の遺言などもムりますし又平素珍藏の奇書一卷之を陛下に差上げたいと存じますから是非一度宅まで歸して頂きたいものです其奇書といふは世界に類なき珍書で中には無數の珍奇なる譚が記してあります陛下が若し私の死したる後其書の第六ページをお開きになつて左側の三行目をお讀みになると私の首は一々陛下の問に答へます』　と之れを聞かれて王は好奇心からドーバンの歸宅を許されたドーバン



は嚴しい警固の士卒に圍繞されて邸に歸つたが翌日引立てられて新造の白洲へと引据えられたすると四方からドーバンの處刑の事を聞込んだ者が白洲へ押寄せて死罪の見物を願出たやがてドーバンは一卷の書物を王に捧げ水を鉢に盛つて其上に其書物を置いたそして云ふには『陛下よ私の首が落ちるや否や陛下は此書物の上に此鉢を置き給いて私の首を洗ひ給へ然る後其書物を披き給へば私の首は一々問にお答へ申す可し陛下願くば今一度寛仁の御心を以て私の生命をお許し下さるやうに御考直しを願はれませぬか』と最後の嘆願をして見たが王は聞入れずして遂にドーバンの首を擊落させた王はドーバンが生前に告げた通りに水鉢を書物の上に置き首を洗つて後其書籍の六ページ目を首の口に指を入れ其唾液で指を濡らして開いたが一字も見へないので王は首に『何故だ』と聞給ふと首は『マア五六ページをお開きなさい』と答へたで王は更に數ページを開くと豫てドーバンが其書物の紙に塗つて置いた毒藥が王の指を傳ふて全身に泌込み王は遂に其處へ倒れて非常に苦惱

せられたするとドーバンの首は大聲で倒れて居る王を睨んで『神は暴逆非道なる王を罰し給ふたのである』と叫んだ王は程なく絶命しドーバンも次いで瞑目した。

四色の錦魚

▲怪物の案内

希臘王とドクトル・ドーバンとの長物語を漁夫は先程から壺の中に封じ込めておいた、怪物に話して聞かせて扨て一段と嚴格な句調で怪物に向つて云ひ渡すには『お前も今聞いたやうに希王があの醫師ドーバンを殺さなかつたなれば希王もまた上帝の怒に觸れて命を奪はるゝ事もなかつたのであるお前も壺の中に封じ込められた其の恩義を忘れて私を殺さうとすれば上帝も直くにお前を殺すであらう今如何に言葉巧に私に云ふてもどうしてお前の云ふ事を眞個とするものか』と如何しても動かな

いから怪神は困まつてしまつて眞實悲しくなり　『漁夫よ神に誓つて僞は云はないお前を殺すことは決してしないお前の一生を氣樂に暮らせるやうにしてやるから是非今一度開けて下さい』　と云ふから漁夫も　『神に誓つて私を害せないと云ふのならば開けてやらう』　と壺の口を開け放すと一筋の黑い烟がむら〳〵と立ち昇つて見る〳〵内に海岸を蔽ひ又固まつて大きな怪物となり漁夫に向つて云には　『約束したやうにお前を富ましてやらうサア私に從ひに來い』　と云ふから一里余り隨いて行くと池のある所に出た池の水は美しく澄み渡つて底の小石までも見ることが出來るやうで其の中を白紅青紫の四色の魚がちよろ〳〵と泳いで居つた魔王は漁夫に指して　『お前が此の魚を捕つて國王に奉れば珍らしい寶を澤山に賜る併し此所に網を打つのは一日に一度だけだ』　と云ひも終らず魔王は右の足を揚げて大地を蹴ると其處に大きな穴が明いて魔王は穴の中に消えてしまつた漁夫は云ひ付けられた儘に四匹の魚を捕つて國王に奉つたそして不思議に思ひながら樣子如何にと待

ちかまへて居たが國王は其の魚を見て非常に驚いて直ぐに料理人に命じて料理せしめ漁夫には金四百圓を下された漁夫は大變に喜び又不思議に思ひながら自分の家に歸へつた扨て料理人は彼の魚を料理しやうと俎板の上に置いた時不思議にも厨の壁が破れて中から一人の美人が現れてしづ〳〵と料理人の方へ寄つて來たそして料理人には何も云はないで釜の中の魚を持つた杖で叩いて云ふのには　『魚よ汝は海の義務を有するか如何に』　と云ふと魚はくち〴〵に　『然り〳〵吾等は海の義務を忘るゝ事なし』　と云ひ終らないうちに彼の美人は元の壁の處へ消えてしまつた料理人は大に驚いて鍋の中の魚を見ると四匹とも黑々に焦げて居る料理人は非常に怖れてこんな大切な魚を黑焦にして王樣にどうしてお詫をしやうとたゝおろ〳〵と泣いて居る處へ宰相は厨に來て料理人の泣き伏せるを見て始終の樣子を聞き然らばその魚を再び買つたらよかろうとて彼の漁夫を召し出しても一度かの魚を捕つて來いと云ひ渡す漁夫は先きに魔王の云ふたのは一日に一回であるから明日早朝に持つて

來ませうと其の翌日魚を持つて來て金子を貰つて歸へつた料理人は又魚を釜の中に入れて置くと前のやうに美人が出て來て亦もや魚を黑焦にして消えてしまつた宰相は事の樣子を聞いて大變に驚いてこれを國王に申上げると王は不思議なこともあるものであるそれでは余が實見しやうとて王は宰相と共に厨に出で魚を鍋に入れると壁が破れた中から大なる怪物が出て鍋を覆して行つてしまつた王は之を見て不思議に思ひ斯う云ふことのあるのは何か惡い事のある前兆に相違ないこれから實地を見やうとかの漁夫の云ふ處へ行くと宮城から三時間で達することの出來る程の處に大きな池がある。

▲不思議な池

王は暫く此池の傍らに滯在して怪物を實見せんと天幕を張つて露營を爲し王は此の怪しき原因を探らうと獨りでぶらり外に出た一里計り行くと此んな山中に珍らしい大きな立派な建物がある王は危みつゝも此の城こそ探險して見やうと獨り奥殿の方へ深く入つて行くのに四邊は靜かで人の影も見えない王は四邊を隅々まで見廻すと善美を盡したる裝飾に庭園の結搆何れを見ても醉ふ計りである王は部屋の隅々にある腰掛に座つて靜かに見惚れて居ると何處からともなく苦しむやうな悶くやうな聲が聞える王は訝しみながら聲のする方に近寄つて戸を細目に開けて中をソツト見ると十五六才計の美少年悲し相に王の床の上に座つて如何云ふ譯で自分はこんな苦痛に逢はなければならないかと泣いて居る國王は靜かに戸を押し開けてこの少年の傍近く進んで何故そんなに苦しいか其の譯を語つて聞かせよと云へば少年は腰を擡げて『見給へ王よ余の半身は已に人間ではない』と云ふを見て王は驚いた少年の腰から下は眞白な大理石である此時少年は言葉靜かに說き出した『余が父はマームートと云ふて黑島を支配した王であつたが七十四才の時に逝りそれから余は王位を嗣いた余は從妹を妻として交情よく暮したが年が經つにつれて妻の擧動の怪しいから

訝しく思ふ内ある日うたゝねの枕元で二人の侍女が話すを聞いて居ると妻は臥床に入る前に必ず魔薬を用意して余に飲ましし自分は夜更けて何處へか出て行くと云ふて居る余は此話しを聞いて大に驚いたからさう云ふ事のあるとは捨て置き難き大事であると考へて其夜は妻のすゝめる魔薬を飲む振りして庭に出てゝ静かに夜の更けるを待て居ると果して妻は夜更けに一人床を脱けて出た之は愈〳〵怪しいと余も亦そつと妻の痕を追ふて行くと妻は何やら口の中に云ふかと思ふとそれは呪文を唱へたので堅く鎖した門の扉は自つと開いて妻は早くも塀外に出た其内にとある森に來た時一人の男が現はれて妻とひそ〳〵と語るを聞けば貴方は吾夫となつて下されば貴方の望みは何に依らず協へませうし又妾が云ふことを聞かなければ此の宮殿も荒してしまい庭の立木も梟や鴉の住家とするのはいと易い、いかに〳〵と互に手を握り合ふ其の睦しさ余は大に驚いて姦夫の傍に進みよるより早く短劍をぬく手も見せず姦夫を水もたまらすたゝ眞二ッに爲し返へす刀で妻をも共にと思つたが從妹同志の

間柄であるから命たけは助けて置かうと刀の血を拭ひとり宮殿に歸つて、臥床に寢て居ると妻も何時の間にか歸つて自分の傍に心配相に寢て居つた、黑島王は其日から數日の間妻は奈何であらうと妻の容態に氣を付けて居ると妻は物憂き姿心配相の顏をして居る或る日何か心に心配でもあるのかと問ひしに妻の曰く父は戰死し母は病死し而して今また兄弟の一人か狩の歸り途の谷に墮ちて死んたからそれやこれやと思ひ出でゝ悲しむのであると云ふ王は伴り事と分つては居るがそれでは余がお前の爲めに父母の靈を安ずる宮殿を造らうとて造つたのが此美しい宮殿てある名も涙殿と付けたか妻は姦夫を此處に住ましめて日となく夜となく訪ひ來て先きに吾が及先に死せんはかりの傷を負けたが妻か勸めた一杯の魔薬に漸く命ばかりを取り止めた姦夫と見るに堪えざる痴態を演じたけれともまだ物を云ふことは出來ないから妻は之を概き悲しんで姦夫に向つてその仇を復さんとて或日余が妻を訪れた時妻は憤怒の相を現はして余に復仇せんとして口に怪しき呪文を唱へたと思ふと悲しや余は

半身はこんな無生物と化したのであつた余が妻の魔藥は余を半人半石と化せしめて尙飽き足らてか美しい都をは原野となし土地を代へて此の世界の有樣を一變さした罪なき多くの人民を魚とし宗教の別によつて白色と赤の魚は拜火教青色は基督教黃色は猶太の信徒等である釜の中に入れたのは是等の人魚であるそれでも尙ほ懲らないのか妻は毎日此の家に來て余を鞭ち皮や肉が破れて血が出るやうになると羊毛織を肩から掛けて行つてしまう』と黑島王が涙を流しての物語りに王は大に憤られ諸し御身の爲めに余自ら美事に仇を討つて見せ樣と勇氣を振つて涙殿さして進んで行き姦夫が靜かに眠むつて居る臥床の傍に伺ひ寄つて半死半生の姦夫の細首を水も獨らず切り落し其の死骸は池の中に淘然と計りに投け入れて自分は臥床の中に入り姦夫の眞似して魔女が來たならば只一討ちと待ちかまへたさてかの魔女はこんな事の起つとは夢にも知らず例の如く黑島王の傍に來り頻りと鞭を打つて居るのであつた其の內魔女は苛責の鞭を緩めて涙殿さしてやつて來たそして臥床の中に橫る王を姦

夫と思ひ込んで小さな可い聲で何やら囁しさうに云ひながら何故苦痛は未だ癒えないのか知らと云ふ王は可笑しさを忍んで『御身黑島王の苛責の鞭を止めて元の王にすれば余が痛みも苦しみも自然と直るであらう』と云ふ魔女は何か心に合點きゝ急き足に王の傍に寄り一椀の魔水を頭から注くと思ふと王の姿は忽ち元の人間となつた魔女は再び此の城に入つてはならぬぞと王を追放した王は人間になつたから非常に喜び天を拜し地を拜し涙殿の樣子如何にと待ち構へた魔女は走り歸つて臥床の傍に寄つてこれで可いかと云ふ王は姦夫の聲音でまた〳〵都を元の形に復し魚になつた人民も元の如くにせなければいけないと云ふ魔女は可し〳〵とて口に呪文を唱ふると原野は元の都に四色の魚は元の人民に變つた斯うして魔女は急いで王の傍に座したから王は近くお寄りと女を招と囁しさうに近よるのを岸破と跳ね起き咽喉を目がけて匕首にて手も見せずたゞ一抉り。王は女の死體をそとに投げ捨てゝ黑島王が待つて居るであらうと急ぎに急いで城門をさして出て行つた扨て國王は黑

島王に向つて今や恨み重なる仇を討つことが出來たからこれからは心を安じて此處に居り給へ而して人民を可愛がつて大事にするが宜しい今余と共に余の國に來る必要はあるまいと云へば黒島王は笑ひ乍ら王は此の國と王の國と近いと思ひますが今や魔術は悉く消えてしまつたから王の國と吾が國とは非常に遠い何卒余を王の嗣子として連れて行つて下さいと云ふ王もそれが可からうと思はれたか直ちに旅の支度に取りかゝつた。

そこで百頭の駱駝にいろ〳〵の珍しい寶物や奇しき道具やらを戴せ美しく着飾つた五十人の紳士は肥馬に跨り前後左右を警戒し日數を重ねて本國の近くに着いたから王は一人の家臣に命じて王の歸國を知らしたので國内大喜び人民は皆道の兩側に列んで王を出向へた、王は黒島王を伴ふて宮殿に入り其翌日いろ〳〵の職にある役人を集め自分が豫定よりは旅行の長引いた事から其の間に出遇した事の始終を報告して黒島王を助けたことそして黒島王を養子とした事まで述べそれからかの漁を上つ

た漁夫にも賞を與へたから漁夫は何不足なく一生を暮したと云ふことである。

ソベイデの話

▲不思議な御殿

かの回々教の教主ハラオンアシラード時であるとかその都バッグダットの近くに一人の荷物運送人が住んで居つた此の男賤しき業に似ず心の正直なものであつたから用事を頼む人も多かつた毎日四辻に立つて荷物の持ち運びの事を頼む人の來るのを待つて居るとある日一人の美人が來て自分に追ひて來いと云うから男は心の内に金儲けの出來たのを喜び乍ら此の美人に從ふて行くと途中で葡萄酒、野菜類だとか砂糖漬物の類まで買ひ調へて籠に入り切ぬほどである其の内に此の婦人は美しい大きな家の下に行つて此所を訪ふと中から一人の婦人が出て來たが此の人はまだ世界中

に二人とないと云ふも恥かしいてとはない程の美人である運送人は是の美しさに呆れてしば〳〵持つた荷物を落す計りであつたが三人ともに門の中に入つて見ると庭の築山泉水立木いろ〳〵の草花や又家の建て工合など美しいこと此の上なしである座敷の中央に卓に凭り掛つて居る一人の美人がある此の婦人は前二人よりもまた美しい位である抑〻此等の三人の女は初め町に買ひ物に出たのはアマイン玄關の取次に出たのはサフイヤ卓に凭つて居るのは主人のソベイデである、ソベイデは運送人の持つて來た荷物を受取り賃金を與へて返らそうとしたが運送人は返らうともせず不思議さうに一人で訝んで居る此の男は口を開いて不思議に思ふのは何だと思ひますか女計りの世帶は危ぶないと思ふのですと云ふ三人の婦人は此男の云ふことを聞いて云ふには自分等は此の世界で秘密の職業をするものである此の秘密を明かすことは出來ない早く歸れと云ふ男は秘密は決して洩らさないから何卒是非今夜一夜を宿て戴きたいと懇々と頼むとソベイデは此の男に自分等は毎日毎晩榮燿榮華にして

帝王の暮しにも勝る今汝妾等が仲間に入らうと思ふなら何か品物を持ちて來いと云へばサフイヤも傍から何か持つて來いとソベイデの云ふ通りに云ふたが獨りアマインは此姉妹の言を遮つてこの運送人は先程から我身とともに買物に出て吾が爲めにいろ〳〵の困難を忍んで呉れた其の心の内は極めて正直であるから吾等の仲間に入れても宜しいと云ふ他の二人も漸く承知したから改めて秘密は洩さない身持を慎むこと等を云ひ聞かされてこの奴僕となつたそれからアマインは衣服を着換えて又も や入つて來て卓上の山海の珍味を副食物として酒を呑み酔のまわるにつれて節おもしろく歌ふ其の歌は　『吹き匂ふ花の間洩るゝ春風は常にも增して香るなりその花にしも比ぶべき色も香もある天津姫君が手づから酌む酒は香を添へて馥郁と賤か身にしむ難有さ後の世までも忘れさらまし』　と歌ひつ舞ひつさも樂しさうであるすると サフイヤは此の奴僕の傍に來て早く去れと云ふアマインは之を可い位に應對して再び二人を宥めてやう〳〵此の男を今宵此處に宿らすことと定めた、其前に此の

男に一札を見せた札には『若し己が身に無關係のことを一言でも語ると禍は直に身に及ぶ』とある奴僕は大に恐れ入つて臥床に入つた折しも誰れともなく訪ふ聲のする一間では三人顔を見合せて驚いたやうであるやがて來た三人を見ると三人とも片目盲いた僧主である田舍修行に出たものである今宵一夜の宿を願ひたいと云ふソベイデとアマインとは之を斷はつたがサフイアの執り成して許すことゝしてかの門内の掲示を讀ますと讀み了つて圖らずも奴僕の姿に目をつけて實に不思議な姿だと三人目と目を見合はしてひそ〳〵と話をするから奴僕は非常に怒つて他人の事を談すなとの掲示を忘れたかと詰つたから三僧も罪を謝して之を許すと三人の僧は笛と太鼓とを取り出して宴席の興を助けたから又更らに賑かになつたそのうち又もや門を叩く音がする何人かしらんとサフイヤは行つて見るこれは帝王アラシドで此夜お微行で宰相ギアファ侍從武官メスラフを從へで市中を散歩して居ると面白しい音樂に聞取れて思はず立ち止り門を叩くと中から花耻かしき美人が出て來たから王等

の三人はモゾール商人で此地に行商に來たがふとしたことから三人行違ふて宿もなく困つて居る一夜の宿を願ひたいと云ふソベイデはそれでは吾等の約束を守れば自然宿も貸し申すとて妄に語ることは出來ない又自分の身に關係しないことは必ず人に云ふてはいけないと云ひ聞かして宿を許すこととして三人は更めて一間の中に入り又もや歌ふ舞ふ音樂の聲はいつ果るとも思はれない程であつた此時杯の數は已に重り主人も客も醉ふて仆るゝ計りであるソベイデは例の式を始めやうと立つてアマインに云ふとアマインは卓の上の瓶皿等を取り除けて室内を整へサフイヤは箒を持つて來て室内隅々までも掃除して三人の僧を右側に列べ帝王を左に向けて坐らせそれからアマインはかの奴僕を呼んで別室から痩せ衰へた二匹の牝犬を引づり出して此の室の中央に引据えた此時ソベイデは三人の僧と帝王との間に坐を占てサフイヤが差し出す銀の棒で此の牝犬を發矢〳〵と打ち犬の皮や肉が破れて血は泉のやうに出る其の慘たらしい有樣は見ることも出來ない程で今一鞭打てば死ぬほどになつた

のを止めて犬を自分の前に引き据えてその顔をぢつと見て涙を流すと犬も悲しさうに泣いたそして何度も〳〵も接吻して鎖を奴僕に渡して更にその頭を引き摺つて奴僕はソベイデの云ひ付けとほりかの打ち倒された犬を伴れて元の小座敷へ行き更にアマインの伴れた犬

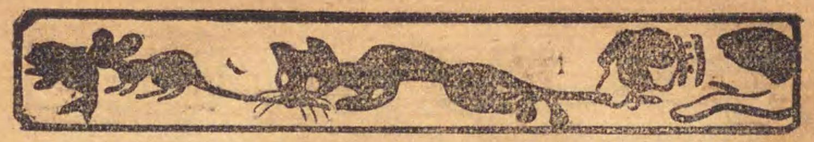
を曳いて來てソベイデの前に引き据えるとソベイデは前の通りに容赦なく鞭うつて再び小座敷へ追ひ入れた帝王の一行と三人の僧は先頭から默つて見て居つたがソベイデが余りと云へば不思議の振舞にアラシド王は急にギアフワに問へと命じたがギアフワは先に約束した事もあるから容易に從はず先づ今暫く御待ちなされと王を宥めて後の樣子如何と眺めて居るのであつた斯うしてソベイデは先の折檻の鞭に疲れて暫くは其處に靜かに座して休息して居つたサフイヤは此時聲を掛けて疾早御身の爲す可ことはしてしまつたこれからは妾がなさねばならないことをしやうと座の中央に出だ此の有樣に七人の者は何れも不思議の思ひをしたサフイヤは中央の椅子に凭つてアマインにかの小函を持ち來れと云ふと欝金色緞子の蓋ある一つの箱を持ち出してサフイヤの前に置くとアマインが函を開けると一つの琵琶があるサフイヤは之を取り出して糸を調へて彈き出すと奏音は善く響き渡りて節々善く律に合う半餉ばかり彈してサフイヤはアマインに御身も一段奏てたまへと云ふするとアマインも

半時計り彈して居つたがあまり力を込めた故か甚しく疲勞して悶絶したそして尙苦しさに堪えかねて衣をおし寛げて胸のあたりををしげもなく露したから一同は玉を詐く雪の肌かと好奇の目を注いて見ると驚く可し其色は雪の肌にはあらで鐵の銹びたやうな色に黑い斑さへ交つて居るソベイデアマインの二人は之を介抱して居る內に七人の客は皆不審顏奴僕に樣子を尋ねたけれども奴僕も樣子を知るはずもなし帝王は何とかして此の樣子を知りたいものと思つて奴僕を皆の總代として遣したソベイデは之を引見して扱ては貴客方は先の約束を破つた今はもう仕方がないと云ひつゝ床板を三度踏み鳴らすと何處からか七人の奴隷は壁を破つて出て來て此の七人の客を捉へて刄を閃かして其の命を取らうとするのであつた七客は大に驚き呆れて爲す所を知らず呆然として居つたが今から汝等に問ふことがある何事に依らず正直に答へよ然らば命は許して遣すまず王より答へよと云ふに王の一行は默つて何事も答へないそれでは三人の僧に仔細を語れと云ふソベイデは僧等に問ふて云ふ汝等皆一樣に片目の盲いて其形まで似合ふて居るのは察するに兄弟ではあるまいかと云ふと一人の僧は膝をすゝめて否兄弟にあらず同一の宗敎を守る僧の仲間であるとソベイデは重ねて僧に向つて汝等の目の盲いたのは生れ付きか怪我か病氣か僧云ふ此の片眼の盲いたのは其原因こそ不思議と存ずる今宵此處に來たのも全く偶然の出來事で我等の父と云ふのも世に名ある國王であつたと語を聞いてソベイデは七人の奴隷に命じて此者等自分の身元を明かにすればそれでよしそれでなければ此場を立たせず殘らず殺してしまう今少し手を緩めて遣はせと云ふ奴僕は之を聞き終つてから經歷をさへ語れば罪を免るゝものと合點して今迄の有つた事を一々洩れなく語つてソベイデに命乞をしたから之を助けて遣さうとした此時僧の一人は奴隷の歸つたのを見て進み出て徐かに身の上話を續けて行くのである。

▲第一僧王子の物語

私が父は國の王で私しが隣の國の王は私しの父の兄であるそれで兄と弟とは叔父姪の間柄であるから妻や私等は互に情誼を厚して日夜往來したのであつた此の僧があるとき隣の僧に招がれたから行つて見ると山海の馳走をして饗應さしたそして互に隔てなくいろ〳〵の話をした後で云ふのにはもはや互に秘密も語つて差支がないから今一つ話すことがある暫く此處で待ち給へと奥に入つたと思ふと一人の美しい婦人を連れて來たそして此の僧に向つて御身早く此女を伴ふて新墓のある處に行けと云ふ私は實に無氣味に思つたけれ共云ふがまゝに伴ふて行くことにして出掛けた此の時ふと後を見ると王子は清水を入れた小な徳利と一挺の斧と石炭とを入れた小な袋を携へて後から來て追ひ着いた王子の墓に付くと直くに其の石を切つて穴を堀つて其の穴から二人は中に入つて行くのである私は驚いて袖を引き止めたが王子等は袖を振り拂ふて尚ほも穴の中深く入り込んでしまつた私は大に驚いたが仕方もないから後に心を殘して吾が家へ歸つて臥床に入つた翌朝になつて王の家へ行つて見る

と王の家臣は王が歸らないのを心配して居つたから私はきつと何處かで搜して來ようと性懲もなく又もや王の搜索に出掛けた此の時私の叔父は狩に出でゝ宮中に居なかつた私は又父を訪ねやうと宮に急ぐ途中で出し拔けに一群の兵士等が來て私を取圍んだ何事を何をするのかと言葉激しく尋ねると父の王は宰相の爲めに弑せられて宰相は代つて新王となつたからその仇とも云ふ可き私を殺す爲めに來たのであると云ふ抑々此反逆した宰相が私を惡むのは別に理由があるのである或日私が狩に出た時一羽の鳥を見付け覘ひ定めて切つて放ちし矢は外れて折惡しく散歩して居つた宰相の片眼にぐさつと立つた私は大に驚いて直ぐに醫師の處に行つて治療を賴み人を遣つて其罪を謝したけれども宰相は聽かずして私は囚はれの身となつた時に此の通りに私の一眼を傷けたのである殘酷極まる宰相は尚ほそれに慊らず私を箱の中に封し込めて遠く野外に持ち出て首を刎ねて屍を曝らし野獸の餌食にせよと嚴重に命じたが護送する臣の情で生命ばかりは取り止めることが出來たから急いで私の叔父



の處に行かうと晝は山林の中に隱れ夜は微行してやう〳〵に皇城に着いて仔細を打明けた叔父も非常に怒つて私に同情を寄せたそこで私は叔父が息子の行衛を尋ねるのに苦心して居ることと知つて居るから太子と約束を結びしものゝ斯々の理由で墓の下に室を造つて住んで居ると云ふと叔父はそれでは直ぐに其墓地に行つて太子を探し出さうと私と叔父とは木立の深い山林に忍び入つて墓標の下を堀り出して陷し戸を開き五六級の階段を下て見ると小さな座敷がある黑烟がむら〳〵と渦をまいて臭氣紛々として鼻を衝く、けれども其の室内は美しく飾られて錦の窓掛けなどが掛けてあつな其の内に叔父は彼方地方を見廻して居つたが遂に寢臺の上に横になつて居る王子と王妃を見出したけれども此の二人の身体ははや石灰となつて冷かに眠つて居る叔父は此の二人の姿を見るより早く靴を脱ぎ探つて王子の顔を發矢と打つた私は大に驚いて何故打擲し給ふかと云ふと叔父は涙を呑んで此二人は幼き頃よりいとも交情好く暮したがいつの間にか蓄生にも等しき交情となつて此の樣に土の中に家

を作つて不義の淫樂に耽つてゐんな最後を遂ぐるのも皆此等二人が自ら招いた罪から起つたのであると涙をはら〳〵と流した私も叔父の話しを聞いて共に涙に咽んで暫くは顔も擧げることが出來なかつたが俄に軍馬の寄せ來る物音に氣が付いて何事なるかと耳を澄ますと確かに反逆臣の此の所へ襲ひ來たものと分つた叔父も必と思案して寄せ來る亂軍の中に飛び入り遂に敢えなくも戰死した私も危くも一命を殞さうしたが漸やく一方の血路を切り開いて重圍の内を脱れることが出來たさて命だけは無事に脱れることは出來たけれども何處をそれと定めもなく彼方此方と逍遙ふたが軍服の此儘では人目に附き易い恐れもあるから軍服を脱て法衣に改め兼て聞く此の國のアラシド王の賢明なることを慕ひ推參した次第はや市の近くに來た時に此等二人の僧侶に出會て此處に三人は姿も同じ僧侶であるから義兄弟の約束をして市内を徘徊て居る内にふと音樂の音の妙へなるに引かされて思はず此處に來たのであると語つた。

▲第二僧王子の物語

次きに第二の僧は進み出てゝ私も元は王族であつたがアラビヤ語を研究して非常に上達したから時の印度王は之を聞いて是非一度會ひたいと禮を極めて迎へに來たから私も一度は印度へ行きたいと思て居る矢先であるから是を幸に印度へ行かうと決心した一月計の後には早や數百里の道を來たがふと向ふを見ると馬の足搔きに砂烟を上げつゝ威勢よく乘込んで來る一隊は正しく山賊である彼等の一隊は吾等の一行に近寄つて巧く荷物を奪取らうとするのである私等の一行は如何しても脫れることは出來ないから聲張り上げて吾等は印度大王の部下に在る重き役目を帶つた使者である亂暴して粗忽すなと勢ひ見せて云ひ聞かすけれども山賊どもは少しも恐れずせゝら笑つてはや吾等の荷物を奪ふとするから此方も是れ取られてはとてゝにしばしば戰ふたが元より少數なる吾等の一行の山賊に敵ふはずもなく散々に討ち崩され私

も數個所の手傷に力なく此處に落ち延び小道枝道足に任せて走ると小河の傍に出た暫く疲を休めやうと思はず河の面に映る吾が顏を見て驚いた顏の色は黑焦げとなり疲せ衰ろへて昔しの姿の悌も見ることは出來ない悲しさに堪えず泣いて居つたか何時までも斯うして居るわけにも行かないから又もや山路を越えてある町に出て裁縫店の前に休んで居ると忽ち私の姿を見て何處から御越しなされた名は何と仰有るなどゝ親切に尋ねるから私は包み隱さず有体に云ふとそんなことは余り人に云つては不可ない此の國の王は御身の國を敵のやうに思つて居る所さて〳〵危ないと私を戒めて何か職業の定まる迄は山稼なとしてお暮しなさいと云ふから地獄で佛と喜んで何分宜しくと賴むと其翌日は一挺の斧と繩とを呉れて此の町には程近い山林に案內して椎夫の群に入いつた慣れぬ仕事で困りはしたがそれでも其日〳〵を過すことは出來たから是れも店主の御恩と毎日の幾分を割いて店主の恩義に報ゆることゝした月日の經つは早いもの此の生活を始めてから一年程を經て又もや例のやうに林に入

つて薪を切りつゝ思はず知らず山奥へと深入りして頻りに木の枝を集めて居ると足下に一個の鐵環が落ちて居るのが目に入つた不思議に思つて落ちて有つた傍りの土を掻き除けて見ると一個の陷し戸がある戸を開らいて中を見ると階段があつて其先きには不思議にも美くしい立派な一個の堂がある朱塗の廊下は玉を連ねて欄干として其裝飾の結構さ美しさ地下にあるものと思へない程であるから私は不思議に思つて廊下を行くとふと美人に出逢つたすると美人は匂ひこぼるゝ計に嫣笑として何誰と問ふ私は怖る〳〵神に見放された人間であると答へると美人は久しく人間に逢ふこともなかつたが珍らしい此方に來て話しを聞かせよと云ふが私は山中の椎夫で鐵環を拾つて計らずも此處に來たことを語ると美人はさも物憂さうに妾は元はエッヘラ島の王エビチマラスの娘で從弟の王子を夫と定めて愈々結婚と云ふ夜に怪物に攫はれて獨りこんな穴の中に入れられて淋しく毎日暮したが指折り數へて見れば早や三十五年の昔となつた近頃は怪神も妻の出來てか此處へは十日に一度來るばかり

けれども若し妾に用事があれば入口に書いてある魔字に手を觸れると怪神は此處へ現れませう今夜は怪神の來てから四日目であるから未だ來るまでには後六日もあるから今夜は此處で樂しく話しを聞きませうと共に浴室に來て浴あみさせて新しい衣服と取り換えて來れたこれから寢床に入つて四方八方の話しに夜は更けたが私は美人とこんな穴の中にいつまでも閉ぢ籠つて居るよりは人間界に出てやう私が此の入口の魔字さへ破れば怪神も出て來ることは出來なからうと云ふと美人は手を振つてそんな事をしては吾等二人の破滅の元と頻に止めたが血氣な勇に逸つて止めるも聞かず魔字を足に蹴り落としたこんな無法な事をして此の先き如何なり行くかは神ならぬ身の知るよしもない美人の止めた時に止めれば可かつたものを俄かに雷がおどろ〳〵と鳴り出し木の葉の吹き散らされて枝の鳴る音は凄く美人は恐れ怖れて居つたが怪神はしづ〳〵と現れて怒の聲の鋭く何急ぐ用事のあつて吾を呼びしかと美人の方を一睨してあたりを見廻す此方の美人は靜かに落ち付き拂つて實は急に腹の痛

と云はせも果す　『怪は此の繩と斧とは何か』　はッと轟く胸を押へて美人は思ひもよらぬ御尋ね今宵の出御は大層急で風烈しく吹きましたから何人かの持物を此の洞中に吹き入れたので御座いませうと云へば怪神は大に怒り美人を床の上に押し倒し鞭を以てりゆう〳〵と打つ打たれて美人は悲鳴を擧げて苦しむ樣子に物蔭に隱れて居て聞き苦しく如何かして助けたいとは思ふが迂濶に手出しは出來ず氣を焦つて控へて居ると美人は早や息もたへ〳〵になつて床の上に倒れた私は余りの怖ろしさに此處をそつと逃げ出して階段の入口で中の樣子をじつと窺ふて居つたがやがて此の山を下りて裁縫店に歸ると主人は非常に心配して居つたが私の顏を見て無事を喜び尙ほ留守中に一人の異形の老人が來て斧と繩を出して是れは何誰の所有物かと問ふたとの話私は大に怖れてさては先刻の怪神が假りに姿を變へて尋に來たものに相違ないと思ふと身も世にあらぬ心地して居る處へ最前の老人が來たと聞いて早や魂は身に添はず如何しようか、と云つた處で對手は怪神なりなまじ逃げ隱れせんより

はと門口に來て何の御用とおづ〳〵云へば怪神は聲もあら〳〵しく此の斧と繩とは汝の物かと云ふサアそれはと口込る途端に乃公と共に來いと一聲高く叫ぶかと思ふと一陣の魔風を吹き起して私を捉へるより早く虛空遙かに舞ひ上つた其の內に地上に落下して一踏大地を踏むと元の地獄へ眞逆樣に下りた怪神の責呵責に彼の美人は哀れや息も絕へ〳〵に倒れて居るのであつた怪神はやをら進んで美人に向ひ此れは汝の情夫であらうと私を指さして云ふた美人ははつと躊躇らふ樣子であつたが其の柳に似たる眉を逆立て此は解せぬ事を仰られます此者は何人であるか何で妾が知りませうと言葉もきつぱりと云ひ放つた怪神は大に怒つて情夫でないのならば此の劍を以て此男の首を刎ねよと大太刀の氷と閃めくを拔き放つた美人は之を見て冷かに笑ひ殺さうと思へば怪神自分で手を下しなさい如何して妾の手が入用ませうやと承知しないすると怪神は私に向つて汝は此女を知つて居るだらうと問ふから私は暫時思案して此んな婦人は全く知らない遇ふたのは今が始てだと云ふと怪神はそれでは

汝この劍で此の婦人を殺せと云ふ何と詮方なきまゝに怪神の渡す劍を取つて立ち上つたがつく〳〵心の内に思ふにはかの美人こんな呵責に遇はせるも元はと云へば自分から起つたこと一層この劍で自殺して不德の罪を美人に謝さうと決したのを早くも美人は私の顏色で悟つたが其の苦しさうな息の下から眼色で制するから自分も思ひ返して神よ罪のない女を如何して殺すことが出來ようぞこれ計は許し給へと云ふと怪神は忽ち怒の色を面に滿してつか〳〵と美人の傍に寄りずぱつと計に右の腕を切り落して私に向ひ汝の命も取る積だが生命は取けてやる其變りに犬か鳥かに變化させると云ふ私は詮術つきて彼の怒を鎭めやうと神に向ひ私は卿の恩を忘ない爲めに一つの話をしやうと前提をして善人と惡人と云ふ話をした昔或る所に善惡二人の僧があつて恰も隣合せに住んで居つた甲は其の性質邪慳で人に惡まれることも度々あつた之に反して乙は性質正直な所から人に愛されて居つた或日の事惡僧は善僧の人に愛せらるゝを姑み亡さものにしやうと散歩に結托て庭の古井戸の所へ來た時隙

を見て善僧を突然井戸の中に衝き落した落された善僧は一且は驚いたが幸にも井戸の中には大勢の魔神が寄合して居る所で此の魔神等は魔術を以て善僧を助けやうと相談したそしてその語る所を聞くと頗る面白い余はアラビヤ公主の爲めに祈禱に招かるゝ途中である公主はヂク〳〵國王の皇子であつたけれども今は全く魅せられて沈倫しナモン公主の許にある父の帝王は非常に歎き悲しんで君に祈禱を煩らはしにわざ〳〵來たと云ふのである。

扨もかの善僧は古井戸の中で已に生命の亡くなる所を不思議にも助かつて茫然と吾を忘れて居つたがもはや曉方近くなつたから漸々に左右へ取付いて漸やく井戸から匍匐ひ出てほつと一息吐いて居る所へ弟子等が搜しに來たのに遇ひ昨夜の仔細を話すると皆惡僧の恐ろしい企みを憎まない者はなかつたそれから自分の室に歸ると手飼の黑猫が尾を振りながら來たから七本の毛筋を拔き取つて用ふる時の來るのを待つた折節隣の國の王は王女が病氣に罹つて如何なる名醫も祈禱も効能がなくふと此

の善僧が奇妙な法を知つて居ると聞いて或日此の僧の許へ尋ねて來た僧は丞しく國王を迎て何御用なるかと拜伏すると國王は王女が病氣で如何にしても快方に向かず困つて居る何とかして直る工風はなきものかと仰せられるから善僧は承知したと座を立つて先きに拔き取つた猫の毛を燻らして王の衣服を蒸して王女に掛けると王女は忽ち姿を取直して嘻しさうに笑まれ病氣の樣子は更に見えない國王は大層喜んで可愛の王女の生命の親の善僧に何を褒美にしやうかといろ〳〵思案の末に王女を善僧に賜はつた間もなく國王は病の爲めに沒なられたが嗣後のないので此の善僧を改めて此國の王として國内は善く治まつた或る日王は自分の治める都の中でも見物しやうと家來を連れて出ると其の行列の立派を見やうと來るもの限りなく澤山の人であつたが其の中に先に自分を殺さうとした惡僧も此の中に交はつて居るのを目早く見付けた王は歸館の後にかの者を召し出して昔しの恨は水に流して多くの金銀を彼に與へたと云ふことである大王も此の話にある通り私の罪を赦し給へと例を引いて

賴むけれども怪神はいつかな聞き入れる樣子もなくいや〳〵命計は助けてやるが汝の姿は何かに變へてやると云ふより早くも私しは怪神に攫まれて大空高く舞ひ上り暫くして小高き岳に下りて呪文を唱へたかと思ふと悲しや自分は猿となつたそれから一月余りは彼方此方を逍遙ふて居ると或る日ふと一艘の舟が通るのを見て手眞似でもつて救ひを求めると情ある船長は私を甲板の上に連れて行き甲斐〴〵しく食餌などを與れた其の内舟の港に着く頃に二三人の商人は船へ來て何誰でも此紙へ字を書いて下さい若し巧く書く人があれば此の國の宰相に取り立てると云ふ私は不思議に思つたけれども猿の悲しさ尋ねるとも出來ずに居ると船長と或る客との話には此の國の宰相は非常に達筆であつたが此の人沒し此の人に次ぐ能書家を求める爲めに試筆さすものと分つた船中の人は吾れも〳〵と書いたけれども一つも巧いと思ふ人はないそこで自分は手眞似でもつて書かしてもらひたいと云ふと人々の訝しむに拘らず船長の周旋で漸く筆記帳に字を書くことが出來たやがて國王は彼の卷物を見